

2020 年度（令和 2 年度）
WWL コンソーシアム構築支援事業
研究開発報告書

管 理 機 関

学校法人 渋谷教育学園

事 業 拠 点 校

渋谷教育学園渋谷高等学校

目次

ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWL）2年目を終えて.....	3
I WWL構築支援事業構想計画書（概要）.....	4
II 2020年度WWL構築支援事業完了報告書.....	5
III WWLコンソーシアム構築支援事業活動構想図.....	24
IV 研究開発活動報告.....	25
1 Peace, Justice and Strong Institutions Project.....	25
(1) 国語科（現代文）の取り組み：比較文化論としての核.....	25
(2) 公民科（現代社会）の取り組み：ヒロシマから戦争を考える.....	32
(3) 情報科の取り組み：広島を発信する.....	36
(4) 英語科の取り組み：Learning “Hiroshima”.....	39
(5) 広島WWL国内フォーラム.....	47
2 Partnerships for the goals Project.....	48
(1) 公民科（現代社会）・英語科の取り組み：2050年の世界.....	48
(2) 英語科の取り組み：Wars and Conflicts.....	55
(3) 英語科の取り組み：Social Justice.....	58
(4) 家庭科の取り組み：子どもの権利.....	65
(5) 中学2年生の取り組み：SDGsを理解しよう.....	67
(6) 高校2年生の取り組み：Service Learning.....	71
(7) 特別講座：気候正義.....	74
3 Research and Analysis Project.....	80
(1) 国語科の取り組み：中学国語科ディベート.....	80
(2) 公民科の取り組み：未来を考える特別授業.....	84
(3) 中学3年生の取り組み：奈良研修 プロジェクト.....	91
(4) 自調自考論文：Write for the Future.....	94
4 特別交流活動.....	98
(1) カンボジア課題探究プログラム.....	98
(2) イタリアを学ぶ特別講義.....	103
(3) さくらサイエンスプログラム.....	105
(4) Raffles Institution（高校）交流.....	106
(5) Dunman 校交流会.....	109
(6) 高校生国際会議参加プロジェクト.....	112
(7) 全国高校生フォーラム2020参加.....	115

5	評価・分析結果.....	117
(1)	WWL アンケート分析	117
(2)	活動事例における生徒たちの活躍	125
【参考資料】	129
A	WWL アンケートデータ～3 年間における意識変化	129

ワールドワイドラーニングコンソーシアム構築支援事業（WWL）2年目を終えて

渋谷教育学園
理事長 田村 哲夫

本校が WWL 事業の取り組みをはじめ、2年が過ぎました。この1年間、コロナ禍においても連携大学・高校・企業・団体の皆さまにご支援をいただき、感謝申し上げます。

4月の休校から始まり、年間のカリキュラムを見直しながらのWWL活動ではありましたが、オンラインという新しいツールを活用しながら、まさに手さぐりで新しいことに取り組んで参りました。この事業は、高校生のもつエネルギーを世界で共有し、より発展的な内容につなげ、SDGsを担う地球市民への意識づけにつながるものと期待して参りました。国際交流にとどまらず、国内研修でも移動の制限があり、思うような交流ができないこともありました。参加する生徒たちの熱意で本年を終えることができました。

連携校である広島女学院、Ruffles Institution とはオンライン交流を実施し、これまでの交流を継続することができました。

2021年8月には「学びのオリンピック SOLA2021 (Shibuya Olympiad in Liberal Arts 2021)」を開催する予定で準備を進めています。

生徒たちが主体となって、渋谷から発信する新しい取り組みです。つながりたいという思いが届く機会になるよう期待しています。

新学習指導要領では、探究・統合・教科横断をもとにより深い学びへの期待がこめられています。今後も学びを活かしつつ、同世代との交流を通じて自身の経験や思考を深める機会をつくり、「協働型探究学習による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成」を目的として事業に取り組んで参ります。

引き続き温かいご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

I WWL構築支援事業構想計画書（概要）

【別紙様式4-1】

2019～2021	期間	ふりがな	しぶやきょういぐくえん	都道府県番号
	管理機関	ふりがな	しぶやきょういぐくえんしぶやこうとうがっこう	13
	事業拠点校	ふりがな	しぶやきょういぐくえんしぶやこうとうがっこう	

2019年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業
構想計画書（概要）

構想名(30字程度以内)

協働型探究活動による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成

構想概要(400字以内)

テーマをSDGs(持続可能な開発目標)とし、中でも、環境、人権、平和を取り上げる。その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場(学びのオリンピック(仮称))を定期的開催する。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

研究開発・実施体制

		機関名・学校名・情報						代表者・校長名	
管理機関		渋谷教育学園						田村 哲夫	
事業拠点校		渋谷教育学園渋谷高等学校 (私立)						田村 哲夫	
		学科・コース名	1年	2年	3年	計	学校規模		
	対象:	普通科	200	200	20	420	420		
	対象外:	普通科	0	0	180	180	180		
事業共同実施校	①	()						0	
			学科・コース名	1年	2年	3年	計		学校規模
		対象:				0	0		
	対象外:				0	0			
	②	()							
			学科・コース名	1年	2年	3年	計		学校規模
対象:					0	0			
事業協働機関 (国内外の大学、企業、国際機関等)	①	東京外国語大学						三浦 吉永	
	②	電気通信大学						福田 喬	
	③								
事業連携校 (国内外の高等学校等)	①	渋谷教育学園幕張高等学校 (私立)						田村 哲夫	
	②	清教学園高等学校 (私立)						森野 章二	
	③	広島女学院高等学校 (私立)						渡辺 信一	
	④	St. Stephens' Episonal School ()						Dr. Jan Pullen	
	⑤	Ruffles Insutitution ()						Mr. Frederick Yeo	
	⑥	Loreto College ()						Ms. Judith Potter	

※行数は適宜調整すること

II 2020年度WWL構築支援事業完了報告書

(別紙様式3)

令和3年3月31日

事業完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 東京都渋谷区渋谷1-21-18
管理機関名 学校法人 渋谷教育学園
代表者名 理事長 田村哲夫 印

令和2年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月23日（契約締結日）～ 令和3年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 渋谷教育学園渋谷高等学校
学校長名 田村 哲夫

3 構想名

協働型探究学習による、SDGs達成を担う次世代地球市民の育成

4 構想の概要

テーマをSDGs（持続可能な開発目標）とし、中でも平和、貧困、保健、ジェンダー、水問題、エネルギー、気候変動、イノベーションなど、高校生の生活に身近な課題を取り上げる。その特徴でもある参画型、統合性を活かした取り組みとする。教科連携型学習アプローチと探究学習活動を重視し、大学等の学問ネットワークを利用できる仕組みを整えることで、教科の枠に収まらない学びをカリキュラムの中に位置づける。それにより、社会課題に対する認識を深めると同時に、課題設定力や論理的思考力の強化を図る。さらに自らネットワークを作りだし、活用する意欲とスキルを身につける。また、高校生が主役となった国際的な場（学びのオリンピック（仮称））を定期的で開催する。それにより個々の対話力、英語力、探究力を高め、同じ理念を共有する高校と協働して空間を超えたチームワークを学ぶ。取り組みの見える化・ネットワーク化は、本校のSGHから続く研究成果の発信を容易にし、全国規模でのSDGs達成を担う次世代地球市民の育成を可能にする。

5 教育課程の特例の活用の有無

無し

6 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和2年4月23日～令和3年3月31日）											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
P&Jプロジェクト				←							→	
P&Fプロジェクト					←							→
R&Aプロジェクト	←											→
特別講座			←	→					↔			↔
運営指導委員会		↔									↔	
報告書及びHP				←	→							
学びあいの場活動				←	→				←	→		

(2) 実績の説明

本学園は、「自調自考」－自ら調べ、自ら考える－という教育の基本目標のもとに、「高い倫理感を養う」、「国際人として資質を養う」ことを教育目標に掲げている。この3つの目標のもと、社会課題に対する問題意識をもち、課題探究活動、社会貢献活動を通じて、その解決にむけて尽力する姿勢を育む教育活動を中高一貫校の特徴を生かし、取り組んできた。平成26年度より、学園内の2つの高校がそれぞれSGHの指定を受け、グローバル人材の育成に取り組んできた。その連携のもとで進めてきた人材育成をより発展的なものとするべく、海外や遠隔地の高校に連携のネットワークを広げ、協働して人材育成を進めるため、下記のように、連携校との合同プログラムをオンラインを活用して行った。また、多くの人材を輩出している東京外国語大学、電気通信大学との連携を進め、高大連携のもと、より発展的な学びを求める生徒たちへのカリキュラムの構築支援のための検討を進めた。今年度は、新型コロナウイルスの影響を受け登校できない期間もあったが、学内において生徒が参加するネットワークを構築し、授業や生徒活動の支援を行った。また海外への留学や進学、協働型学習活動、国際会議、国際コンクールへの参加、報告への支援を行った。

① ALネットワーク委員会の開催

ネットワーク構築のための特別委員会を開催し、国内、海外との情報共有、連携構築のための準備を行った。授業拠点校においては、すべての生徒に個人のメールアドレスを付与し、自宅でのネット環境を整え、情報共有ができるようになった。（2020年度開催回数9回、校内ネットワーク構築委員会 9回）

② カリキュラム特別委員会の開催

実施計画の運営、検討、評価を行う特別委員会を開催し、特に3つの大型プロジェクト（Peace, Justice and Strong Institutions project、Partnerships for the goals project、Research and Analysis project）に関する研究開発及び高大連携プロジェクトの検討に取り組んだ。また、海外や国内での宿泊を伴う研修が中止となったことから、校内での発表会に切り替え、オンラインでの発表ができるように支援を行った。

（2020年度開催回数 12回）

③ 連携校及び近隣校との協働プロジェクトへの支援

- ・早稲田大学系属早稲田渋谷シンガポール校、渋谷教育学園幕張高等学校とオンラインでつなぎ、ビブリオバトルを主催した。12月25日【学びあいの場活動】

- ・広島女学院の高校生とオンラインでつなぎ、核と平和に関する課題を教育でどのように取り扱うべきか、次世代への継承をいかにはかるべきかといったテーマについて、話し合う場を設け、自分たちの取り組むべきことを考える機会を設けた。

1月16日(土)、2月6日(土)【Peace, Justice and Strong Institutions project】

- ・渋谷高等学校で開催された探究活動の発表会の様子を記録し、関心のある連携校と共有した。次年度にむけてオンライン参加についての模索する機会をもうけた。発表は、ポスターセッション形式で行い、それぞれが取り組む活動についての理解を深める機会を設けた。

2月20日(土)【Research and Analysis project】

- ④ 連携大学等との協働カリキュラム開発および発展的な学びの場支援
- ・ 渋谷高等学校の授業へ、東京外国語大学の大学院生にメンターとして、オンライン参加していただき、異文化への理解を進めるとともに、社会課題に対する日本以外の国の考え方に触れる機会を設けた。課題解決に向けた生徒へのアドバイスとともに、カリキュラム開発に関する助言をいただく機会を設けた。(2020年度 参加人数7名)
 - 【Peace, Justice and Strong Institutions project、Partnerships for the goals project】
 - ・ ロボット研修会
学年・文理等の区別なく生徒が関心を持ち探求したいという要望を踏まえての研修会、外部人材を活用。
 - ・ 卒業生ネットワークの構築
生徒の探究活動を支援するため、卒業生によるライティングセンターを開催した。来校できない期間は、卒業生の連絡先を公開し、同窓会を通じて、在校生とつながるネットワークの構築に取り組んだ。
(2020年度 ライティングセンター協力卒業生数6名)
 - ・ 外部講師による講演会
2050年の世界を理解するため、専門家を招いての講演会を行った。大規模なものから、ワークショップを伴う小規模のものまで開催できるよう支援、感染予防対策を講じつつ直接対話できる環境を整えた結果、オンラインと対面の双方の良さをいかし、それぞれに特徴ある講演会を開催できた。また、事前の事後の学習や質問などは、オンラインを積極的に活用し、短時間で効率的な運営ができるよう時間や回数を工夫した。
(2020年度講演会開催 10回)
 - ・ 生徒の留学・進学の機会を増やすために、海外大学との連携を視野に説明会や卒業生による体験を語る会を設けた。また、現地の情報を獲得できるよう人材の育成に努めた。
- ⑤ 国際協働プロジェクト実施
- 下記の交際交流プロジェクト実施についての支援を行った。
- ・ St. Stephen's Episcopal School (アメリカ) との協働をオンラインを活用して行った。平和と核について、チームで意見をまとめ、人間の安全保障の在り方について、連携校の高校生に直接訴える機会を設けた。訪問ではなく、オンライン上で、意見交換を行い、生徒が作成したブローチャーに関して評価し、優秀賞2チームを選出した。
 - 【Peace, Justice and Strong Institutions project】
 - ・ Ruffles Institution (シンガポール) との協働
通常訪問できない現状をふまえ、オンラインを活用した相互交流の機会を設けた。テーマを英語教育とし、英語圏であるシンガポールと非英語圏である日本の教育システムを比較検証し、母語と外国語の関係について意見を交換した。授業参加とはならなかったが、密度の濃い議論を行うことができた。
交流参加校 渋谷教育学園渋谷高等学校及び幕張高等学校
 - ・ Dunman High School (シンガポール) との協働
日本文化に関心のある日本クラブのメンバーとともに、それぞれ自国の遊びを通して、自国の文化的特徴について理解を含める機会を設けた。ZOOMのブレイクアウトルーム機能を使い、分科会の実施にも取り組んだ。
- *2020年度のシンガポール研修は、感染症の影響により訪問中止となった
- ・ 世界大会への派遣
オンラインで実施される様々な高校生世界会議に代表生徒が参加できる環境の支援を行った。
(模擬G20高校生会議 ・ 英語ディベート世界大会参加)
 - ・ さくらサイエンス受け入れ
さくらサイエンス事業により、シンガポールの高校生とオンラインで交流する取り組みを行った。参加人数30名

交流校：NUS High School of Math & Science ・ Nanyang Girls School

- ⑥ 生徒の自主的な社会課題活動への支援
 生徒たちの自発的な活動を支援すべく、校内での広報や保護者への説明を行った。
 今年は、実際の活動ができない環境下ではあったが、計画を明示し、校内で生徒が開催するさいの留意事項を定め、実施マニュアルの共有と公開を進めた。
 また、オンラインでの発表や参加ができるよう教員が活用できる ZOOM アカウントを取得した。研修での移動が制限されたことから、一部の活動を学校のある渋谷地域での事例に切り替えて行った。
 (高校2年生による活動 206名/その他の活動 多数/会場利用 4回)
- ⑦ 運営指導委員会開催
 取り組みの状況を確認、指導・助言をいただくために、2回の運営指導委員会を予定した。第2回については、新型コロナ感染拡大による中止を余儀なくされたが、文書による説明を行った。(開催回数 2回)
- ⑧ 学びのオリンピック (仮称) 実施準備開始
 校内に実行検討委員会を設置し、それぞれの活動との調整を行った。また、外部人材との交流を積極的に進め、2021年度に協力をいただけるような環境整備を行った。
 また、地域連携にも力を入れ、定期的なミーティングの機会を設けた。
- ⑨ 取り組みの紹介
 本校の取り組みの理解を進めるため、ホームページ等を活用した情報発信を積極的に行った。また外部の研究会での発表を支援するなど、教員の取り組みを支援した。

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間 (令和2年4月23日 ~ 令和3年3月31日)											
	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
P&Jプロジェクト				←								→
P&Fプロジェクト	←											
R&Aプロジェクト												
特別講座			←	→					←	→		↔
運営指導委員会		↔								↔		
報告書及びHP												
学びあいの場活動			←	→								

(2) 実績の説明

探究型学習活動を教科、学校の枠を超えた連携のもと発展的な内容とし、高校生同士のネットワークを構築する目的のために計画に基づき、実施した。

① Peace, Justice and Strong Institutions project

平和な社会のあり方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が抱えるジレンマについての理解を深める。多様な文化、価値観に触れるとともに、AIや宗教など、幅広い分野に学びを深めた。現地でのフィールドワーク、広島女学院との交流を通じて、一人ひとりの意見を持った上で、チームで議論し、平和の構築に自分たちができることを発表した。発表や成果物の作成については、東京外国語大学の大学院生の指導を受けた。代表チームの生徒10名が、連携校であるフロリダの St. Stephen's Episcopal School の授業に参加し、英語で授業を行った。

(連携教科：情報・公民・英語・国語)

(連携校：広島女学院、St. Stephen's Episcopal School、東京外国語大学)

(対象：高校1年全員 年間)

《取り組み事例 I (抜粋)》 ヒロシマから考える

一昨年から始まったWWLは、これまでのSGHの5年間の「ヒロシマから考える」取り組みを基に、新たな視点も加えて継承・発展させ、「ヒロシマから戦争を考える」と

した平和学習を行った。英語の授業や国語（現代文）とも並行しながら現代社会の授業として展開することで、多角的な視点を加えて考察する機会が増え、生徒にとって意義が大きいプログラムとなっている。

a. 公民科による事前学習

現在の国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、議論が活発に行われるよう授業を工夫した。広島への原爆投下だけをテーマとするのではなく、1学期の『2050年の世界』の授業においては、アメリカ合衆国トランプ大統領の選挙戦・米中覇権争いなど時事問題を取り上げることや、前年（中学3年次の公民の授業）の日本の安全保障政策（集団的自衛権）や憲法改正議論などとも結び付けて、「戦争」とは何かという広いテーマについて考えられるように配慮した。

また、国連を中心とした「核兵器禁止条約」の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進が見られたことにも注目をさせることに留意した。「戦争の加害と被害」という視点を持ち、から考える授業に取り組んだ。ABC兵器の非人道性、安全保障と核の抑止という観点から考えを深めていった。原爆関連のDVDはNHKスペシャル『証言と映像でつづる原爆投下・全記録』、NHKアナザーストーリー『オバマ大統領～広島への地へ歴史的訪問舞台裏～』を視聴した。また、情報の授業においてNHKスペシャル『“ヒロシマの声”がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館』を視聴する機会も設けた。

授業は、生徒が考えることを中心にすえるため、「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。議論難民を出したくない。お客さん（部外者、関心がない）になる生徒が出ないことを目指し、全員が意見を言える授業にするようよう、生徒が希望する核廃絶・核使用・核抑止のグループ（各1名）に分かれ、自分の立場を発表し議論を行い、互いの立場について批判的に問題点を指摘した。論点を整理することで、国語・英語の取り組みにつながった。

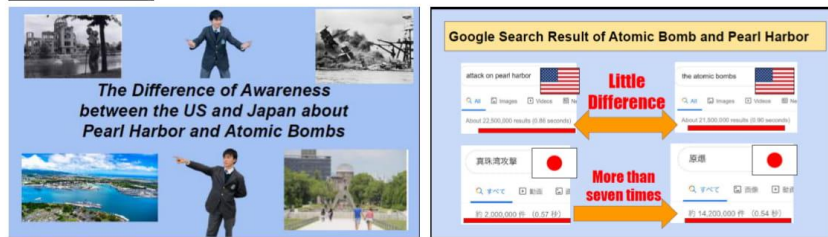
b. 国語科による比較文化論としての核（立場と表現）

課題図書『黒い雨』（井伏鱒二）を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を行った。日本側の表現作品として、『黒い雨』（井伏鱒二 1966 新潮文庫）を、アメリカ側の表現作品として、①『渚にて』（1959）、②『未知への飛行』（1963）、③『トゥルーライズ』（1994）、④『ブローケン・アロー』（1995）、⑤『ダークナイト・ライジング』（2012）を選んだ。異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。授業を通じて、広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得することを目指し、また、文化的表現が、その文化に属する人々の意識と密接に結び付いたものであることを理解することを狙いとした。実際に体験することと表象を介して知ることとの懸隔を実感し、異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める経験を通じて、核兵器や平和についての課題を見出し、自分なりの意見を持つことができているようである。また、相手に伝わる表現方法についても理解を深めることができ、今後の英語科のローシャーププロジェクトへつながった。

c. 英語科による Hiroshima Brochure プロジェクト

「現代社会」「現代文」の授業で扱っている「広島・長崎の原爆投下」に関して、世界へのどのように伝えるかを意識し、プロジェクトに取り組んだ。被害者と加害者という区別ではなく、将来へ何を伝えるべきかを考え、英語での表現に取り組んだ。クラスで選ばれた作品を連携校の Saint Stephen's Episcopal School へ送り、評価のフィードバックをもらった。今年は訪問ができずに終わってしまったが、互いの学びを確認する時間となった。なお、優秀チームは、学校代表として、広島県におけるワールド・ワイド・ラーニング(WWL)コンソーシアム構築支援事業国内フォーラムに参加した。

Brochure 作品 (一部)



② Partnerships for the goals project

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、SDGs に取り組む企業や機関、団体と連携し、社会活動としての SDGs に触れることで、世界とのつながりを意識し、自分たちの行動が SDGs 達成に影響しているという自覚を育んだ。

また、学びを他者と共有すべく、校内での発表を行った。

(連携教科：総合的な探究の時間・英語・地歴・生物・保健体育・家庭)

(連携大学：電気通信大学・東京外国語大学)

(連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティアなど)

(対象：中学2年生全員・高校1年希望者・高校2年生全員・高校3年希望者 通年)

《取り組み事例Ⅱ(抜粋)》 世の中を考える

a. 中学2年生 SDGs プロジェクト

今年度の研修行事の見直しを受け、SDGs を中心に身近な課題について、考えを深める機会を設けた。中学2年という時期に、まず「SDGs」というキーワードを通して世の中を知り、自分たちの行動と結びつけることで、社会の一員としての自覚を促す取り組みを目指した。各自興味があるゴールを選び、そのメンバーで班を編成することで、取り組みやすくなるよう配慮した。また、ポスターセッションという形で活動報告をし、学びの共有をはかった。また、企業における SDGs の活動の実態について学ぶ会を開催するなど、外部との連携をはかった。

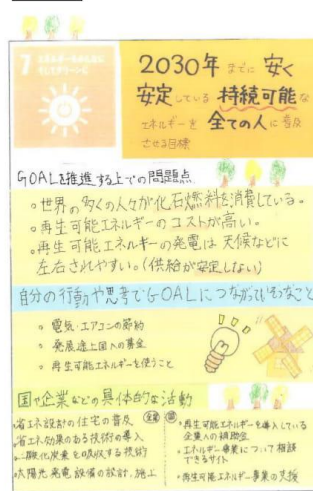
初めての試みだったが、事後のアンケートからも生徒の満足度が高いことがわかった。(満足 45.1 普通 52.8 不満足 2.1)

自分たちの生活と SDGs の関わりを考える ことで、社会課題を身近なものにとらえることができた。また、異なるテーマの発表会開催を通じて、自分の興味関心を広げることになり、中学3年生で学ぶ公民の授業へのつながることとなった。

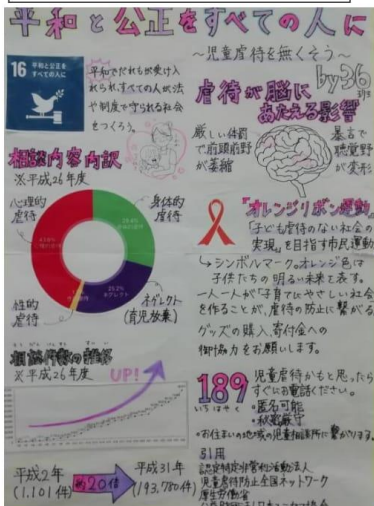
ポスターセッション風景



作品例



ポスターセッション用ポスター例



b. 高校1年生 2050年の世界を考える（英語科・公民科協働）

公民科では、経団連が推進する「Society 5.0 for SDG s」を取り上げ、AIやIoT、ロボット、ビッグデータの活用など、革新技術を活用した社会の到来を予測する授業を行った。ゲノム解析など生命倫理とも結び付け、倫理的な課題や社会課題の解決についての議論を重ねた。学ぶだけでなく、生徒自身が自分の言葉で考えを主張することをゴールにすえた。授業テーマとして、・情報通信分野の米中の主導権争い、・新型コロナウイルスの感染拡大が世界に与えている影響、・AI との未来...AI は天使か悪魔か、・Society 5.0 for SDG s を取り上げた。

また、現在の課題に対して、どのような解決方法があるか、話し合いを行い、実際にカンボジアにおける社会課題解決のための事業プラン作成に取り組んだ。優れた発表を行ったチームは実際に起業にむけた動き出しを企業の支援を受けながら進めている。

*カンボジアプロジェクトについて

生徒は班を組み、カンボジアの課題を踏まえ、国際協力や医療の観点から、現地課題を解決するための事業プランを策定し、発表を行った。1学期に使用した「SDG s スタートブック」も活用し、課題を5つ以上洗い出し、その中から自分の最も興味

のあるものを1つ選び、その課題の対象となっている人、・エリア・解決のために既に取り組みられている施策または組織（行政・企業・NPO等）について、調べ、具体的な提案を行う。

事業プランについては、アイデアの面白さやプレゼンテーションの技術ではなく、「投資家の視点」から評価を行った。評価者は同級生・教員・企業人であり、それぞれの持ち点から、優秀と思う班に投票した。結果、教育支援と飲料水支援の2チームが選ばれた。

英語科では、公民科で学習したトピックに関する英文課題を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに、自分の考えを英語でエッセイにまとめた。

- c. 高校2年生 Service Learning に取り組む（英語科・総合的な探究の時間 協働）
これまで Global Issues の解決につながる活動を各人で計画、実行する。そうした活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。この経験を通して問題意識を高め、将来、各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。活動は、校内外を問わず、関心のある分野で行うようにした。事後、英文レポートにまとめ、活動内容を他の生徒と共有した。今年は、活動に制限がある中、以下のような活動に取り組んだ。

- （活動例）
- ・子ども食堂でのボランティア
 - ・超福祉展でのボランティア
 - ・SDGs Site（SDG で人をつなぐウェブサイト）の作成
 - ・くま川鉄道の募金活動
 - ・九十九里浜の掃除 等

③ Research and Analysis project

本校の教育目標の一つである「自調自考」、自ら調べ自ら考える探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげるため、中学1年から学習活動を継続していく。特に課題を発見すること、問いをたてる活動を丁寧に行っていく。社会が変化するなかで、常識に疑問を持つ力はいつそう重要になる中、知識と問う力の両方がそろふことで、世の中の問題を自分ごととして考えることにつながる取り組みを行う。

この活動を通じて、自分の興味・関心のある領域について深く学び、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、自分自身に対する理解を深め、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。また、この活動の集大成として、生徒全員が論文作成に取り組む。

（連携教科：総合的な探究の時間・国語・公民・理科）

（連携大学：電気通信大学・東京外国語大学）

（連携団体：福祉法人・民間企業・地域ボランティアなど）

（対象：高校生全員 通年）

《取り組み事例Ⅲ（抜粋）》 自調自考を考える

- a. 公民科の取り組み（高校1年生 希望者）

日本経済新聞社と連携し希望者を対象とするワークショップに取り組んだ。一つは「問いをデザイン」すること。新聞記者の方の「問い」を立てることの意義や、批判的に考えるプロセスを共有した。もう一つは日本経済新聞の高校生向け特別版の編集者との企画から、紙面で紹介されていたユニリーバ社に協力いただいた「ほしい未来を考える」機会を設けた。「問いをデザインする」際には、新聞記者の視点から、疑問をもつことが始まりであることが生徒に伝わり、次々と活発な問いと答えが行き交った。

＜グループワークの一例＞

問いを深めるとは、どういうことか、コロナ禍でオンラインなど新しい授業の形から、学校での時間の使い方に疑問を持った生徒からの問いでは、

「どうして学校には昼寝の時間がないのか？」 why

→眠くなる欲求にはあがえないから why

→結果的に授業を聞けなくて非効率 why

→時間をもったいない why

→せっかくハイレベルな授業を受けられるのに why

→自分の意思に反して学びたいことが学べないから

と変化していった。

こうした問いをきっかけに、「学校がない時代はどうしていたのか」「日本の生徒は学校に何を求めているのだろうか」など、様々な角度から考えを巡らせていた。

また、問いをブラッシュアップした後の発見は、「学校は幸せを求めるところ」「芸術は人生を豊かにするもの」など、問いは、ポジティブな表現に変わっているものが多かった。

自分が不満に思っていることでも問いを繰り返し深めることで考えが深まる学びにつながった。

b. 公民科の取り組み 「ほしい未来をつくろう」(中学生 希望者)

SDGs 先進企業のユニリーバ・ジャパンと協働し、「ほしい未来」について考えるワークショップを開催した。ワークショップでは、「気候変動」「ごみ問題」「ジェンダー平等」などの関心のあるテーマごとに11チームに分かれ、高校生をリーダーに中学生と学年混合チームで課題に挑んだ。各チームにはユニリーバ社員や教員、日経HR社員がファシリテーターとして参加し、「ほしい未来」をつくるために話し合う生徒たちをサポートした。現状を考え、課題を見つけ、具体的な活動につなげる中で、学校生活で当たり前と思っていたことに疑問を持つ生徒も発言し、そのうえで、解決に向けた糸口をめぐり、活発な議論を交わした。総合学習で得た知識を先進的な企業とのディスカッションを通じて、「実践できる」ように考える取り組みを行った。



c. 論文作成の取り組み (高校生 通年)

一人ひとりが設定した問いに対して、長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成した。作成過程において、卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生や連携校の生徒とともに、自分たちの学びを共有した。

④ 全国高校生フォーラム 2020 参加

2020年12月20日、高校2年生4名が全国高校生フォーラム2020に参加した。今年は、オンラインによる開催となったが、日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を話し合う貴重な経験となった。

今年度の参加生徒が、高校生フォーラムに取り組んだきっかけは、本校が国際理解教育の旗印のもと大切にしている国際交流である。シンガポールのトップ校である Raffles Institution との相互交流が、コロナ禍で中止となる中、参加予定の生徒達からの強い要望があり、オンライン交流が実現した。交流のテーマを英語教育にとし、6月から準備をはじめ多くの同学年の仲間を巻き込んで9月に2回のオンライン交流を行った。この

実りある成果をぜひまとめて全国の高校生と共有しようと発表者4名と中心メンバーたちが2か月以上を費やしてポスターを作成した。SDGsの発表には少ないHumanitiesの分野で挑戦した。他国の高校生と交流したからこそ、また、日本における英語教育と母語についてしっかり時間をかけて学んだことで、生徒たちも自信を持って発表に向き合った。

SDGsの4.Quality Educationを基軸に、言葉の喪失と文化の喪失をシンガポールと日本に当てはめるとの議論は内容に深いものとなった。

また、今年度は、本校生徒2名が総合司会を務めた。



⑤ 海外プロジェクトの充実と参加支援

コロナ禍においても自宅から参加できる取り組みを生徒へ紹介し、活動を支援した。生徒がオンラインで活動できる場を提供した。また、授業で活用できる端末を増やし、海外との交流が円滑にできるよう回線の増強に取り組んだ。国際交流で発表した研究内容は、12月に行われた全国フォーラムでの発表につなげるなど、多くの実績をあげた。

(連携校：渋谷教育学園幕張高等学校・Ruffles Institution・Dunman High School)

(対象：中学生希望者・高校生希望者)

《取り組み事例Ⅳ(抜粋)》 オンライン高校生会議への参加

2020 Model G20 Virtual Summit (模擬G20サミット高校生会議)への参加

*主催:Knovva Academy 後援:Y7 2020 及び Young Professionals in Foreign Policy
今年度は、オンライン開催 18の国と地域からの405人(60チーム)の高校生が参加
この会議に本校高校生3名が日本代表として参加した。

会議のテーマとして、気候変動(Climatic Change and the Future of Humanity)を取り上げ、チームがそれぞれの国の代表となり、本校生徒は、イタリアを担当した。会議では、ゲストのProfessor Sam Myers of Harvard Th Chan School of Public Health, Professor Cary Krosinsky of Brown University and Yale Universityによるキーノートスピーチの後、チームごとにG20の国の代表として政策を作成し、最終日にそれを他グループの前で発表した。その結果、本校生徒たちは、Most Outstanding Country Delegations - Argentina(最優秀賞)、大臣を務めた高2生がBest Ministerial Award - Minister of the Environment and Sustainable(最優秀大臣賞)を獲得するなど、主催者や関係者から非常に高い評価を受けた。

<参加した生徒の感想>

1月31日から2月20日までの3週間、18の国と地域から400名以上の高校生が集ったオンラインの国際会議であるModel G20 Virtual Summit 2021に参加しました。割り当てられたG20の国の大臣となり「気候変動と人類の未来」について議論し、国ごとに政策を考えました。私はイタリアの「環境と持続可能な開発大臣」として議論の場における自分の立場に戸惑いながらも、積極的にアイデアを出したり他の大臣に質問をしたりすることで建設的な意見を出し合える雰囲気をつくることを心掛けました。ハーバード大学教授であるSamuel Myers氏やイエール大学とブラウン大学で教授を兼任しているCary Krosinsky氏の講義はとて興味深く、リアルタイムでCary Krosinsky

氏に質問をし、答えていただくことができた時はとても嬉しかったです。最終日の政策発表に向けて、EU の調査書を読み漁ったり、時差のため夜中の 1 時からミーティングを始めたりと大変でしたが、環境と持続可能な開発を担当する大臣として最優秀賞をいただくことができました。チームとして賞をとれなかったのは残念でしたが、様々な背景を持った高校生と一丸になって、気候変動に立ち向かうという目標のもとで議論ができたのは素晴らしい経験になりました。何よりもこの会議で感じられた「世界の人とつながる」という感覚をこれからも大切にしていきたいと思います。



▲最優秀賞を獲得したチームの記念写真。上段右が本校の高2生

⑥ 特別授業・講演会の実施（年8回）

オンラインと対面を併用した多彩な内容に関する特別授業を年間のカリキュラムに位置づけ、実施した。今年度は、長期休暇期間内だけでなく、放課後も活用することができ、予定を超える回数を実施できた。また、地域との協働プロジェクトにも取り組み、これにより、ネットワークが広がった。次年度の学びのオリンピック（仮称）につながることを期待される。

（テーマ）

AI・環境・LGBT・異文化理解・地域交流・感染症・ロボットワークショップ
（対象：全学年希望者）

⑦ 報告書及びホームページの作成（3学期）

年間の取り組みを公表できるよう報告書を作成した。また、国内外の視察を積極的に受け入れ、活動の周知を図った。また主権者教育で、取り組みを紹介した。

⑧ 学びあいの場の開催

新型コロナウイルスの影響を受け、対面での交流が制限されることとなった。次年度に向けて準備として、小規模な学習イベントを開催し、運営の方法についての検証と検討を重ねた。また海外とのオンライン交流を定期的実施することで、海外校とのネットワークを続ける取り組みを行った。イベントには、連携校及び他校で関心のある生徒が参加した。

（取り組み例）

- ・オンラインビブリオバトル（英語 日本語）《事例として紹介》
- ・英語ディベート

・ルーキー模擬国連大会・プラスチックボトルを考える会・全国高校生フォーラム司会担当（英語での開会宣言ののち、概要の説明、進行に努めた。）

《取り組み事例Ⅴ（抜粋）》

2020年12月25日に、本校図書委員会がホストとなって3校によるオンラインビブリオバトル交流会を行った。洋書部門、和書部門に分かれて、それぞれが持ち寄った本を紹介

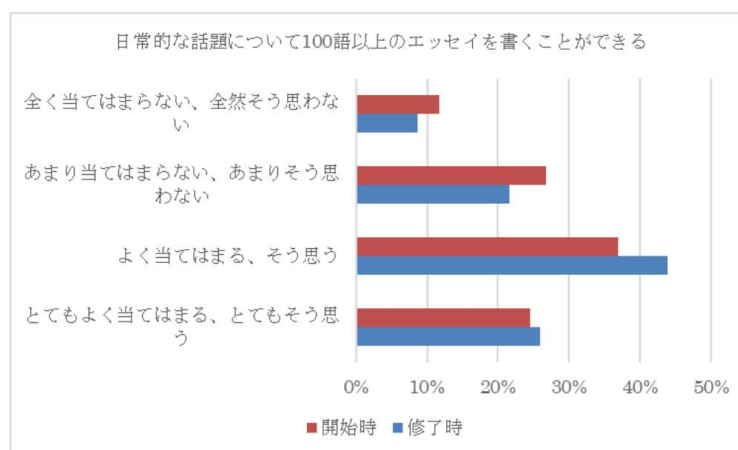
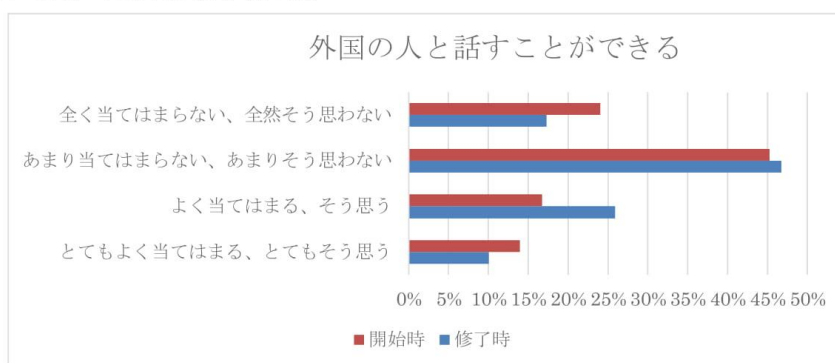
しあい、最も読みたいチャンプ本を決めた。また、同時に学校ごとに鑑賞会も開催し、大会の様子を見ることもできるようにした。

参加校：渋谷教育学園渋谷中学高等学校 渋谷教育学園幕張中学高等学校 早稲田渋谷シンガポール校

8 目標の進捗状況、成果、評価

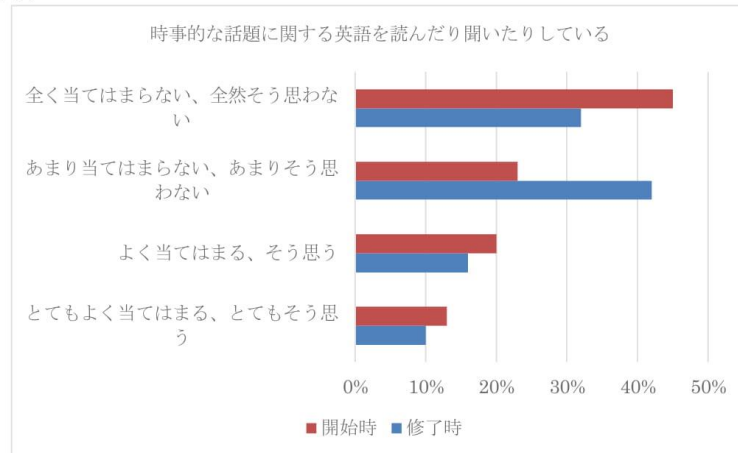
(1) 生徒には、授業アンケートとWWLアンケートの2種類を実施し、SGHからの連続的な変化を成果として分析する予定である。今年は、登校できない期間があったことから、ここでは、最も影響を受けたと思われる高校1年生の分析と卒業する高校3年生の3年間の分析を行う。アンケートは、地球市民に関するモチベーション（意欲）とスキル（英語への取り組み）、好奇心（主体的な取り組み）の3つの柱からなる。学年ごとの分析と過年度との比較を行い、成果を確認する。

高校1年生（WWL 四期生）の分析 項目 I 英語スキル
今年の高校1年生は、オンライン授業となった期間があったため、例年に比べ、インターネットを活用する割合が高いことが読み取れた。他方、開始時（6月）と終了時（3月）での比較では、話すこと、書くことで、自信を持つ生徒が増えており、プログラムの成果が読み取れるが、例年に比べ、話すことに自信のない生徒の割合が高く、中学3年生での海外研修が中止となった影響が読み取れる。



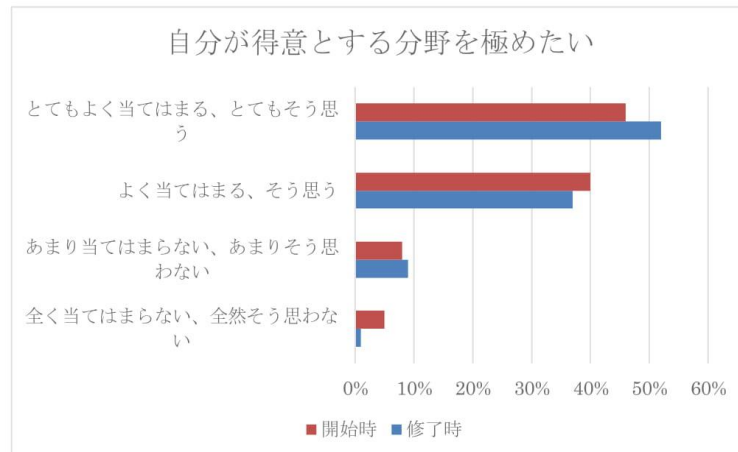
項目Ⅱ 好奇心

英語で情報を集めることについては、当てはまらないと答える生徒の割合が一定程度減少したものの、大きな変化となるまでにはいかなかった。今年は、日本語での活動が増えたこともあり、英語での活動が例年に比べ、少なくなったことが影響している。また、海外交流の機会も減少したこともあり、自分から進んで行うといった機会がなかったことも影響している。次年度は、生徒自身が活動したいと思える仕組みづくりが課題である。



項目Ⅲ モチベーション

自分が得意とする分野を極めたいと思う生徒が 90%近くいることから、例年に比べて、大きな変化はなかった。一方、海外で学びたい、海外で働きたいと思うと回答する生徒が少なく、コロナの影響が感じられる。学習活動が制限されたことが生徒のモチベーションに影響を与えたのか、分析を続けたい。



高校3年生(WWL 二期生・SGH 第五期生)の分析 3年間における意識変化

項目Ⅰ 英語スキル

学年全体の特徴として、自身の能力に対しての評価が控えめであることが多い学年であった。よって、緩やかな上昇にとどまっている項目も見られるが、一方で、高1の開始時と比較して、(2)洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる(36%→63%)、(3)英語の新聞を読むことができる(26%→55%)、の項目では、プラス30%以上の著しい伸びを見せた。また、(5)インターネットの英語サイトを利用することができる(38%→60%)、(7)地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる(33%→54%)、の項目ではそれぞれプラス約20%という伸びを見せた。一方話すことができるという項目で、高2から高3で減少した。(50%→46%)発話も規制されたことが影響していると思われる。

項目Ⅱ 好奇心

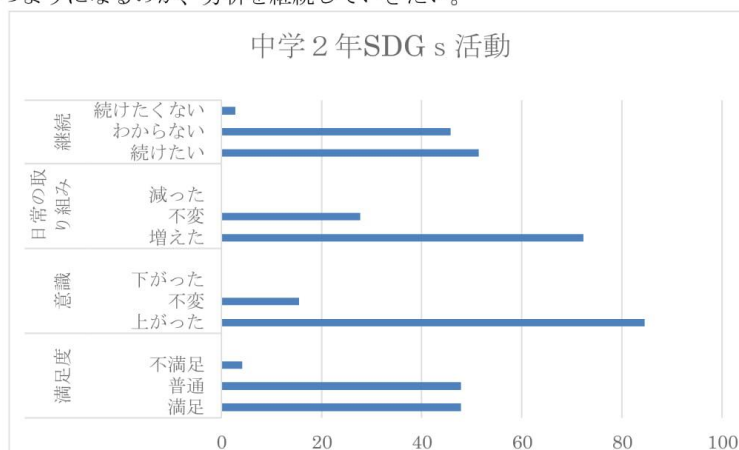
こちらも緩やかな上昇が見られる項目が多い。学年生徒の傾向として自分に対して厳しい評価をする生徒が多いため、全体として前向きな回答を示す割合が低かった可能性がある。(11)新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む(25%→45%)、(13)政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている(18%→34%)、(19)その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている(23%→42%)、の項目では約20%の上昇が見られた。学校での授業外にも、自ら「やっている」と自己評価できるほど、自主的にインターネット上で関連記事を探して読むなど、英語を情報を得るためのツールとして用いることができる生徒が多くなってきている。一方、上昇が例年に比べ、穏やかになっているのは、コロナに関するニュースが多数を占め、報道に関心を持ちにくい日常が影響したと思われる。

項目Ⅲ モチベーション

全体的な数値として高校1年開始時より50%を超えた数値がよく見られており、モチベーションをもって、様々な活動に取り組んでいることがわかる。特に、(21)自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい(88%→91%)という項目では、3年間常に90%近くの数値をキープした。(23)自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい(55%→60%)、(24)日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい(55%→60%)、(25)地球社会が抱える問題の解決に貢献したい、(28)将来留学したり仕事で国際的に活躍したいの項目は高校3年修了時に約60%が前向きな姿勢を見せている。しかし、留学に関しては、伸びたとまでは言えず、交流が進まない日常の影響を反映している。全体として、自分への評価はやや控えめであるものの、グローバルな世界でリーダーとして、自分の得意とする分野で活躍したいという、内に秘めた熱い情熱があることが分かるので、コロナの影響が収まることを期待したい。高校生の段階では、自分のキャリアに迷うこともあるのだが、本校では、(21)の数値にも見られるように、まずは自身の得意分野をじっくりと、コツコツと極め、そして世界に発信していきたいという考える生徒が多い。SGH、WWLの両プログラムが、一つのキャリア教育の一環として可能性を広げたと考えらえる。

中学2年生の分析

今年初めて、中学2年生で、SDGs についてのポスターセッションを実施した。事後アンケートからは、SDGs への意識変化や行動への意欲が読み取れる。高校へ進学後、これまでと異なる意識が育つようになるのか、分析を継続していきたい。



(2) 活動事例における生徒たちの活躍

① P & J project (Peace, Justice and Strong Institutions project)に関する活躍

<中学生>

- ・第1回 JAXA 「きぼう」プログラミングロボット競技会 (Kibo-RPC) 世界大会 優勝
(宇宙ステーション「きぼう」船内のロボットを、プログラムで遠隔制御する競技)
- ・東京都民安全推進本部主催「SNSトラブル防止動画コンテスト」 優秀賞
- ・ロボカップジュニア2020 サッカー(ライトウェイト) 関東大会優勝
(日本大会は中止)

<高校生>

- ・文部科学省 WWL2020 全国高校生フォーラム 総合司会
- ・2020 グローバル ユースリーダーシップ カンファレンス(18ヶ国の各代表160名によるオンライン国際会議) 日本代表
- ・会津大学、福島県、全国高等学校パソコンコンクール実行委員会主催 全国高等学校パソコンコンクール 「パソコン甲子園 2020」 プログラミング本選 第5位
- ・第20回日本情報オリンピック (JOI) 本選 金賞(1310名中、1位)、優秀賞(上位17名)
- ・第31回日本数学オリンピック (JMO) 東京地区表彰

② P & F project (Partnerships for the goals project) に関する活躍

<中学生>

- ・クエストカップ2021 全国大会 企業賞(三菱地所)

<高校生>

- ・第14回日本高校模擬国連大会にナイジェリア大使として出場 最優秀賞
- ・模擬 G20 Climate Change and the Future of Humanity サミット(18の国と地域からの405人、60チームによる世界高校生会議)

Most Outstanding Country Delegations - Argentina (最優秀賞)

Best Ministerial Award - Minister of the Environment and Sustainable (最優秀大臣)

賞)

・第4回全国高校教育模擬国連大会 全国63校、476名226チームの中から B議場の優秀賞(オーストラリア大使として)、C議場の優秀賞(ベトナム大使として)
・株式会社マイナビ主催 キャリア甲子園2020(全国6,870名2,009チームが参加)優勝

・孫正義育英財団 財団生に認定(昨年度、準財団生に認定(応募660人中44人採用)され、その活動実績を以て、本年度、正規の財団生として認定された)

・ブリティッシュ・カウンシル主催 駐日英国大使館・朝日学生新聞社後援 高校生日英エッセイコンテスト 2020

「危機的な気候変動を回避し、豊かで繁栄する社会を私たちはどのように実現できるのか」をテーマにした日英二カ国語のエッセイコンテスト 全国より173名の応募。選ばれた二名の優秀者の一人となり、小泉環境大臣と面会、懇談。

③ R & A project (Research and analysis project)に関する活躍

<中学生>

・2020年度 第24回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 中学生の部 観光庁長官賞 受賞 (16432作品の中、入賞7作品に選出)

・第18回 調べる学習コンクール in としま 豊島区长賞 受賞

<高校生>

・第16回 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト (國學院大學・高校生新聞社) 地域文化研究部門 佳作

・2020年度 第24回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 高校生の部 優秀賞・図書館振興財団賞(応募総数770作品の中から、全国第2位)

・第64回全国学芸サイエンスコンクール

自然科学研究部門 入選(427編の中、特別賞3編に続く上位10編)

人文社会科学部門 入選(942編のうち、特別賞3編に続く上位10編)

・東京家政大学生生活科学研究部 生活をテーマとする研究・作品コンクール優秀賞(上位3名)

④海外プロジェクト及び英語を活用する大会での活躍

<中学生>

・第10回全国中学生英語ディベート大会 優勝

・大学生ディベート大会 K-cup 2020 第3位

・Japan BP 2020 ノビス部門 チーム賞ベスト8

・大学生大会 Japan BP 2020 ノビス部門 ベスト8

・第3回日本中学生パラメンタリーディベート大会 優勝、ベストスピーカー賞第3位、第5位

・第10回全国中学生英語ディベート大会 優勝、ベストディベーター賞第1位

・筑波大学附属駒場中・高等学校 主催 Tsukukoma Schools Open 2020

ノービス部門 優勝、ベストスピーカー賞第1位、第7位

・アジア高校生リンクベート・ディベート・チャンピオンシップ 2020 ジュニア部門 ベスト4

・筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 ノービス部門 優勝

<高校生>

・第12回 IIBC (TOEIC) エッセイコンテスト 最優秀賞/日米協会会長賞(ダブル受賞)

・PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 2020 優勝

・第15回 全国高校生英語ディベート大会 オンライン東京都予選 優勝

・The International Public Speaking Competition 2021 日本代表選考 優勝 (2021年

5月に行われる世界最大規模のスピーチコンテストへの参加権を獲得)

- ・ WSDC 世界高校生ディベート大会 2020 EFL 国部門 第1位、ベストスピーカー賞第3位
 - ・ 第9回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 準優勝 ベストスピーカー賞 第1位、第3位、第8位
 - ・ 第10回日本高校生パラメンタリーディベート杯東京都大会 準優勝 ベストスピーカー賞第3位
 - ・ 第11回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール 佳作
 - ・ アジア高校生リンクベート・ディベート・チャンピオンシップ 2020 ジュニア部門 ベスト8
 - ・ 大学生ディベート大会銀杏 CUP2020 第5位、ベストスピーカー賞第10位
 - ・ 筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 オープン部門 優勝、準優勝、ベスト8、ベストスピーカー賞 第7位
 - ・ 日韓高校生ディベート大会 KJOSDC2020 ベスト8、ベストスピーカー賞 第1位、第4位、第8位
 - ・ 第9回 日本高校生英語パラメンタリーディベート連盟 新緑杯 第4位、ベストスピーカー賞第5位
 - ・ 大学生ディベート大会 K-cup 2020 第3位
(第5位、第6位、ベストスピーカー賞第1位、第2位、第9位も獲得)
 - ・ 第3回 P D A 中学生即興型英語ディベート全国大会 第4位
 - ・ 大学生ディベート大会銀杏 CUP2020 準優勝
(第4位、第5位、ベストスピーカー賞 第2位、第6位、第7位も獲得)
 - ・ 筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 オープン部門 優勝、(準優勝、ベスト8、ベストスピーカー賞第3位も獲得)
 - ・ フェミニズムオープン 2020 (大学生大会) ベスト8 新人ベストスピーカー賞第1位
 - ・ Yale-NUS 主催 第1回 Yale-NUS Pro-Ams ベスト8 (ベストスピーカー賞第14位)
 - ・ Asian Schools Online Debate Tournament 2020 ベスト4、
Novice ベストスピーカー賞第1位
 - ・ 大学生大会 Japan BP 2020 ノービス部門 準優勝、オープン部門 ベスト12
 - ・ 大学生ディベート大会 The Kansai 2021 ベスト新人スピーカー賞第5位
 - ・ WSDC 世界高校生英語ディベート大会 2021 日本代表選手選考試験合格
 - ・ Nagoya Debate Open 2020 ベストスピーカー新人賞 第5位 (第10位も獲得)
 - ・ Hong Kong Pro-Ams Online Debate Tournament(香港主催の大学生ディベート大会) ベスト12 (ベストスピーカー賞第7位、ベストスピーカー新人賞第4位も獲得)
 - ・ プレ・ジェミニ杯 Cup 2020 (大学生大会) ベストスピーカー賞 第5位
 - ・ ICU 主催 第17回エリザベス杯 (大学生大会) 新人ベストスピーカー賞 第5位
- ⑤その他、Liberal Arts 関連の大会での活躍
- <中学生>
- ・ 「映画感想文コンクール 2020 夏」優秀賞 受賞 (東京都2位)
 - ・ 読売新聞社主催 「第70回 全国小・中学校 作文コンクール」東京審査 最優秀賞、佳作
 - ・ 「五井平和財団主催 2020年度 国際ユース作文コンテスト (小中学生の部) テーマ 2030年からの手紙」優秀賞 (世界166か国から寄せられた9578作品のうちの2位に相当)
 - ・ 日本新聞協会主催 第11回「いっしょに読もう! 新聞コンクール」優秀賞 受賞 (東京都の応募総数は小・中・高あわせて10,178名で、表彰者は46名)

- ・板橋法人会主催「第八回 税をテーマとした川柳コンクール」 ジュニア部門百選 入賞 (ジュニア部門の応募総数は3,047句)
- ・全国納税貯蓄連合会国税局主催 中学生の税についての作文コンクール 渋谷税務署長賞
- ・第19回 鎌倉全国俳句大賞 佳作
- ・生命保険文化センター主催「第58回 中学生作文コンクール」都道府県別 佳作受賞
- ・第23回 長塚節文学賞 短歌部門 入選 (応募総数3174首)
- ・TOTO主催 「第16回トイレ川柳」 中学生・高校生受賞 (35,451句中上位20句に相当。ペンネーム はなこ「西校舎 一番奥は 僕の部屋」)
- ・金融広報中央委員会主催 第53回「おかねの作文」コンクール 特選 日本銀行総裁賞受賞 (1,723名中、上位5名)

<高校生>

- ・国際言語学オリンピック日本委員会主催 第2回アジア太平洋言語学オリンピック銅賞
- ・第27回関東地区高等学校小倉百人一首かるた大会東京都代表選出 (B級38名中8名) 令和二年度関東地区高等学校かるた団体戦 優勝
- ・毎日新聞主催インターネットによる高校生小論文コンテスト 佳作
- ・國學院大學・高校生新聞社主催 第24回全国高校生創作コンテス」 短篇小说の部入選
- ・京都文学賞実行委員会主催 第1回京都文学賞 中高生部門 優秀賞
- ・集英社主催 第一回高校生のための小説甲子園 東京ブロック代表
- ・全国高等学校文化連盟・読売新聞社主催 第35回全国高等学校文芸コンクール詩部門優良賞
- ・高岡市教育委員会、高岡市万葉歴史館、北日本新聞主催 第5回高校生万葉短歌バトル in 高岡 優勝
- ・文化庁、厚生労働省、宮崎県、教育委員会主催 全国高校生短歌オンライン甲子園 (全国高校生短歌大会、牧水・短歌甲子園、高校生万葉短歌バトルの優勝校が参加) 作品賞として小島ゆかり賞、伊藤一彦賞
- ・鳥取県主催 第2回万葉の郷鳥取県全国高校生短歌大会 (16都県から32校242チームの参加) 優勝、パフォーマンス特別賞
- ・國學院大學 高校生新聞社主催 文部科学省・全国高等学校長協会全国高等学校国語教育研究連合会・公益財団法人日本進路指導協会後援 「第24回 全国高校生創作コンテス」 現代詩部門」 佳作 (最優秀賞1名、優秀賞2名に続く5名)
- ・文化連盟賞 (第26回関東地区高等学校小倉百人一首かるた大会3位となり、全国高校生かるたグランプリに関東地区代表として推薦されたが、新型コロナウイルスの影響でグランプリ大会が中止となり、この戦績によって第44回全国高等学校総合文化祭の東京都代表に内定し、全国高等学校文化連盟会長より本賞が授与された。)

9 次年度以降の課題及び改善点

一年を通じて新型コロナ感染症に対する措置が講じられたため、活動に支障がでる事態となった。特に、学校交流活動では、相手国の状況が反映され、学校そのものが再開できない地域も多く発生した。オンラインの整備を進めた結果、後半には、オンラインでの活動を本格化できたが、再度の緊急事態宣言の発出により、見直しを迫られる事態となった。

次年度は、WWL 最終年度にあたる。当初の目的とした学びのオリンピック (仮称) 開催にむけて、準備をしていきたい。一方 Face to Face の関係性が、生徒たちの学びを深化させ、刺激を与えることがわかったので、引き続き、実施できるようにすることが課題である。

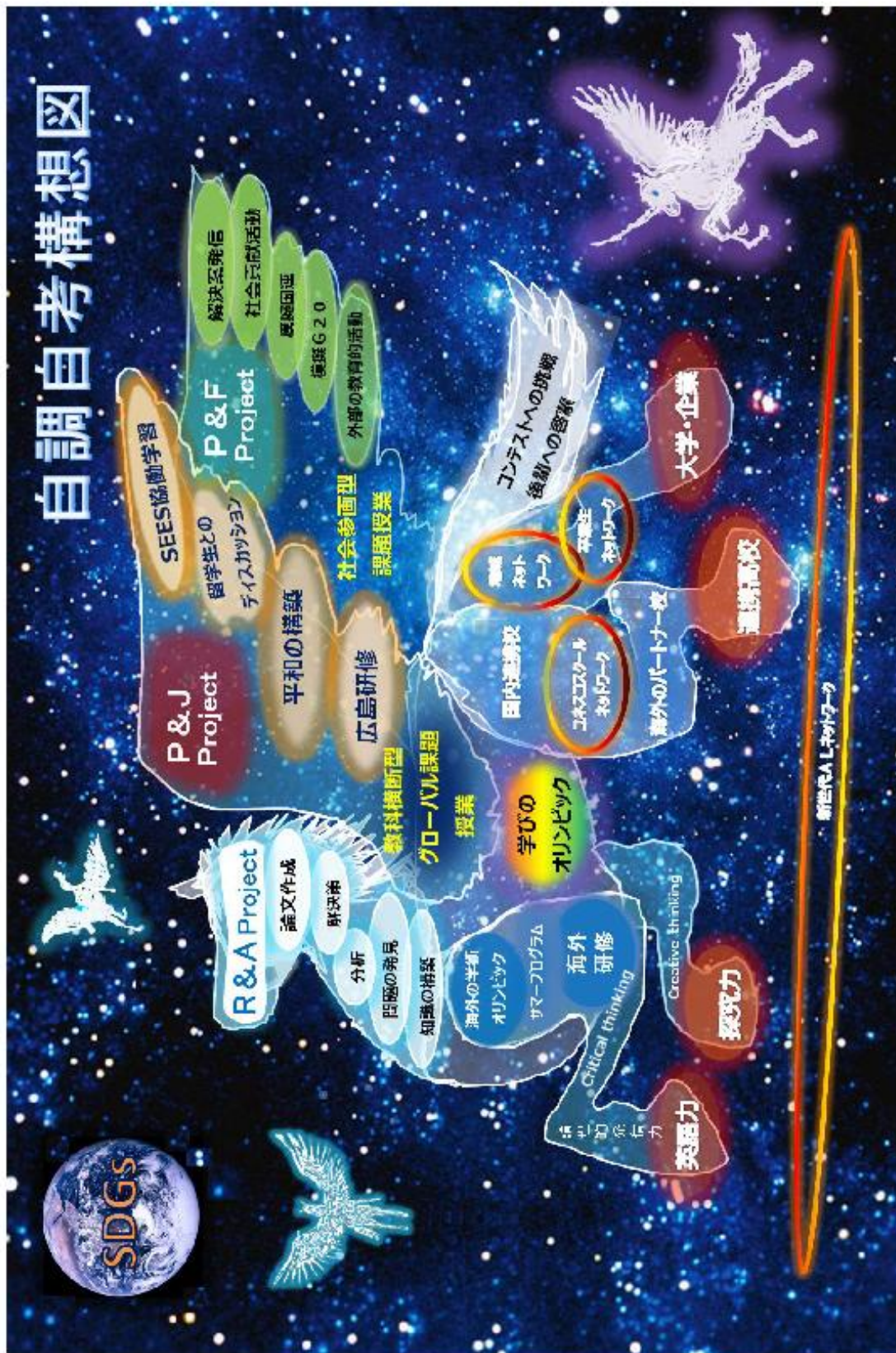
業務としては、高大連携における大学との連携強化や国内での連携校との交流は、引き続き課題である。各学校の学事暦をみながら、学習テーマをそろえ、活動することが弱かったのを改善していく予定である。

次年度も柔軟な実施対応が求められることとなるので、外部人材の登用をはかり、学習活動の深化をはかりたい。

オンラインを利用した会議では、時間帯によって、回線が不安定になる事態が発生した。原因究明をはかるとともに、設備の充実を引き続き図っていきたい。今後を見据え、持続可能な事業となるようはかることが課題である。

【担当者】

担当課	学校法人 渋谷教育学園	TEL	03 - 3400 - 6363
氏名	河元 保之	FAX	03-3486 - 1033
職名	事務長	E-mail	kawamoto@shibushibu.jp



IV 研究開発活動報告

1 Peace, Justice and Strong Institutions Project

平和な社会の在り方とその構築課題について、教科横断的な学びを通じて、近現代が抱えるジレンマについての理解を深める。戦争をタブー視せず、多様な文化、価値観に触れるとともに、理解、議論、発信へとつながる学びを展開した。またAIや宗教など、新しい時代で課題となる幅広い分野での学びを深めた。広島でのフィールドワークは実施できなかったものの、オンラインで広島女学院の生徒と交流会を開いた。教科での学びをもとに、アメリカの高校生に広島を紹介する冊子をチームごとに英語で作成した。完成した作品をウェブサイトに掲載し、連携校である、St. Stephen's Episcopal School (以下 SSES)の教員・生徒たちの意見や評価を得た。(対象：高校1年生)

国語科の取り組み : 比較文化論としての核

公民科の取り組み : ヒロシマから考える

情報科の取り組み : 広島を発信する

英語科の取り組み : Learning "Hiroshima"

広島 WWL 国内フォーラム

(1) 国語科(現代文)の取り組み：比較文化論としての核

ア 単元名 『黒い雨』とハリウッド映画 ～比較文化論としての核～

イ プロジェクトとの関わり

多様な文化・価値観との比較を通して、平和について多角的な理解を深める授業を行った。高校1年生の夏休みの読書課題として設定していた『黒い雨』(井伏鱒二)を軸とし、核兵器使用に関する描写を含むハリウッド映画と比較することで、核兵器についての被害者側の意識と加害者側の意識とが文化的な表現にどのような差異として表れているのかを考察する授業を構想した。

ウ 教材と教材観

➤ 『黒い雨』(井伏鱒二 1966 新潮文庫)

『黒い雨』は、広島への被曝体験をその悲劇が風化されつつある日常生活から掘り起こした作品である。本作はその内容上、「反戦・非核」という文脈の中で語られることが多いものではあるが、本授業においては、あくまで核兵器を取り扱った文学的表現を学ぶ一資料として扱う。

➤ 映像資料(映画5作品)

あえて娯楽性の高い作品も入れることで『黒い雨』との違いを意識しやすくすると共に、異なるジャンル・制作年度の作品を並べ、アメリカ映画の中にも違いが見つけられるよう配慮した。

①『渚にて』(1959)、②『未知への飛行』(1963)

冷戦期に制作されているため、核戦争の勃発が現実的な問題として捉えられており、核兵器を使用することに対する緊張感が伝わってくる。爆発の威力の強大さに加え、放射線被害という事後の影響への言及がある。

③『トゥルーライズ』(1994)

テロ集団に奪われた核兵器が悪用されるのを防ぐため、核兵器を輸送車ごと海に落とし爆発させるシーンがある。爆発の際に「It's show time!」というセリフがあったり、陸地からさほど離れていない距離での爆発に対し、閃光を見なければ害がないとも取れる発言がなされたりする。また爆発シ

ーンをバックに主人公のキスシーンが描かれるという演出もなされている。

④『ブローケン・アロー』（1995）

地下での核爆発が描かれるが、放射線による影響は地下での爆発であれば問題がないというように受け取れる。放射線よりも爆発の衝撃波による影響の方が前面に描き出されている。

⑤『ダークナイト・ライジング』（2012）

爆発間近の核爆弾を飛行機で海上へ運び、爆発させるという描写がある。陸地からの距離は定かではないが、陸上で爆発しなかったから全く問題がないとも受けとれる描写がなされている。

エ 学習の目標

(ア) 思考・対話能力の強化

- 様々な作品を分析的、批評的な態度で対象化し、そこに主体的に問題を見出し、自分なりの意見としてまとめることができる。
- 自分の意見を他者にわかりやすく伝えることができる。
- 自分とは異なる他者の考えを排除することなく受け入れて吟味し、自分の意見を相対化することができる。

(イ) 学習内容の理解

- 広島原爆について多角的な視点から考察を深め、多様性に対処する際の軸となる日本ならではの観点を獲得する。
- 文化的表現が、その文化に属する人々の意識と密接に結び付いたものであることを理解する。
- 実際に体験することと表象を介して知ることとの懸隔を実感し、異なる時間・空間を生きる他者と分かりあうための条件について考えを深める。

オ 学習指導の計画（全8時間）

事前 夏期休業中の課題で『黒い雨』を通読し、印象に残った場面をその理由と共にまとめた。

第1時 『黒い雨』の印象に残った場面・そこから考えたことを2分間のスピーチにまとめ、3～4人のグループ内で互いに発表し合う。

第2時 班ごとに優れた発表を行った1名を代表として選出し、その代表者がクラス全体に向けてスピーチを行う。

第3時 『はだしのゲン』などの漫画作品などの参考資料に触れ、日本における核表象への理解を深める。

第4・5時 核兵器に関する表現を含むアメリカ映画を鑑賞し、各自で気づいたことをまとめ考察する。

第6時 考察をグループ内で共有するとともに、キノコ雲のエンブレムを校舎の壁にあしらった米国の高校を伝える記事といった参考資料に触れ、日米の核兵器に関する文化的な表現の違いについて考察する。

第7時 映画『インデペンデンスデイ』の映像とシナリオを用いたグループワーク。

第8時 授業を通して、自分が理解したこと・感じたこと・考えたことを文章にまとめる。

カ 全体所見・生徒の反応

学習前は原子爆弾によって広島や長崎の人々がこうむった被害について、主題的に学んだこと、考えたことのない生徒が数多くいた。しかし、夏休みに『黒い雨』を通読し文章内の具体的な表現を通じて核兵器の被害を認識し、それをクラス内で共有したことで、意識に変化が見られるようになった。この導入を通して以後の活動に主体的に取り組むことができるようになったと考えられる。

ハリウッド映画での原爆投下に関する場面の鑑賞では、核兵器に関するリアリティに乏しい描写や、一つの「脅威」の記号でしかない核兵器の位置づけ等に衝撃を受けていた。他教科の取り組みをとおして、アメリカと日本では原爆投下に関する認識が異なっているということ自体は知っていたようである。しかし、映画という身近な娯楽作品を比較文化論的な視点から実際に分析する作業は新鮮だったと見られ、より実感がわいた様子だった。使用した側と使用された側との間の核兵器の認識という比較に加え、冷戦中と冷戦後とでアメリカ国内での核兵器の描かれ方が変化しているという通時的な比較にも目を向け、表現と社会的意識との関連性について理解が深まっていた。

本年度は例年と異なり、新型コロナウイルスの影響によって広島に行くことが難しいなかでの授業だった。しかし、実際に現地に行くことができなくとも、生徒は非常に熱心に授業に取り組み、それまでの価値観にとらわれず、核兵器や平和についてよく考えていた。最終的には、核兵器や平和についての課題を見出し、自分なりの意見を持つことができていたようである。

【教材】

高1現代文 『黒い雨』ワークシート 組 番 氏名

▼井伏鱒二『黒い雨』を読み、最も心に残った場面を抜き出してください。

【例】○ページ(新潮文庫版のページ数を基本とする)
□□「△△が××だった。」*本文の抜き出し

▼心に残った理由と、そこからあなたが考えたことを書いてください。

【理由】

【考えたこと】

▼次のアンケートに答えて下さい。
(1)あなたは、これまでに核兵器が登場する作品や、核兵器の存在が影響している作品(映画・ドラマ・アニメ・漫画など)を(意見など)ありますか？あったら作品名を教えてください。

(2)(1)で考えた作品を見たときに感じたことを考えたことがあったら教えてください。

高1現代文 『黒い雨』 1年 組 番 氏名:

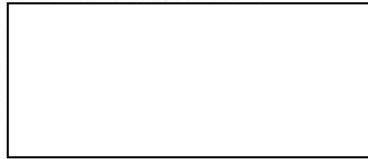
●感想・意見・反省など	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:	「黒い雨」発表 感想記入用紙
	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:	★発表者:	

●アメリカ映画における核兵器の表現

以下に挙げた映画の各場面を鑑賞し、核兵器そのものや核の使用に対する表現上の特徴について気づいたことや考えたことを空欄に記入しましょう。その際に、以前に授業で扱った『黒い雨』や補助資料を参考にして日本とアメリカにおける表現の違いに注目すること。

清にて(1959)
ON THE BEACH
監督：スタンリー・クレイマー

あらずじ：第三次世界大戦が勃発し、世界全土は核攻撃によって放射能汚染が広がります。北半球はすでに全滅。僅かに残った南半球の一部地域の人々が暮らすだけになっています。そんなある日、南国に飛来出来なくなったアメリカ原子力潜水艦がメルボルンに入港する。そこで船長がアリスという美しい女性をモロに出会い、しばしの休日を楽しむが、その地にも死の灰は確実に迫っていた……。



トゥルーライズ(1994)
TRUE LIES
監督：ジェームズ・キャメロン



あらずじ：秘密機関オメガセクターの凄腕諜報員ハリウッドスカの悩みは、妻ヘレンが浮気しているかもしれないという事。職務乱用で妻の調査を行うハリウッドが、ヘレンと共に、核武装したテロリストに捕らえられてしまう。



未知への飛行(1964)
FAIL-SAFE
監督：シドニー・ルメット

あらずじ：アメリカの軍事コンピュータが、誤ってソ連に対する核攻撃指令を誤してしまふ。命中を受けた核攻撃機は直ちにモスクワへ向けて発進。帰還可能ポイント＝ファイル・セーフを過ぎてしまふ。ソ連側の迎撃部隊も、爆撃機を撃墜することができず、ついに全ての手段は失われる……。



ブローン・アロー(1996)
BROKEN ARROW
監督：ジョン・ダワー



あらずじ：二基の核弾頭を搭載したステルス戦闘機の訓練飛行中、少佐ウィクター(トウヴァルタリ)によって機外へ放り出されるヘイル大尉(スライター)。全ては核を撃墜するためのウィクターの企みであった。砂漠に落ちたヘイルは公営監視員のテリー(マンス)の協力を得て、ウィクターと核の跡を追う……。



ダークナイトライジング(2012)
THE DARK KNIGHT RISES
監督：クリストファー・ノーラン



あらずじ：ジョーカーがゴッサム・シティを襲撃するもの、ダークナイトが死闘を繰り返し彼を撃破してから8年後、再びゴッサム・シティの破壊をもくろむベイン(ム・ハーディ)が現われ……。



あらずじと写真はyahoo!映画 movies.yahoo.co.jp より

【生徒からのフィードバック (例)】

● 黒い雨を表現する上での日本とアメリカの違い～まとめ～
 ことばの表現を参考にし、映画『インDEPENDENCE DAY』の各場面にあげたいセリフを考案してみました。

インDEPENDENCE DAY (1996)
 INDEPENDENCE DAY/DI
 監督：ローランド・エメリッヒ
 2016年7月3日、何の理由もなく世界中の空に雲を降らせた謎の巨大隕石が地球を襲撃する。交戦開始から30分経たず、アメリカ本土の大半が消失する。唯一の生存者は、アメリカから脱出した交戦を命じた米国軍の戦闘機である。が、地球からの脱出を断念し、人類の存続を賭して……。

(1) 隕石の落下に対する日本人のセリフを考案し、各場面での日本人の感情を表現してください。
 (2) 日本人のセリフを考案し、全米放送中に放送されたセリフを再現してください。

① (1) 隕石が落ちてきたら、全米放送中に放送されたセリフを再現してください。

② (2) 日本人のセリフを考案し、全米放送中に放送されたセリフを再現してください。

(3) エイプリルの夜、東京の空に巨大な隕石が落ちてきた。日本人のセリフを考案し、全米放送中に放送されたセリフを再現してください。

(4) 隕石の落下を避けて逃げることに、成功すること、成功しないこと、成功しないこと、成功しないこと、成功しないこと。

①
②
③
④

①
②
③
④

①
②
③
④

①
②
③
④

★核兵器に関する『黒い雨』とアメリカ映画との表現の違いについて考察してきたこれまでの授業を振り返って、理解したことをまとめ、感じたことや考えたことを書きましよう。(〇〇すべき) というように明確な「答え」が出ていなくても、いま抱えている「問い」をそのまま書き記しておきましょう。

正直日本人の一人としてこの授業の以前から原爆について
よく知っているし理解していると思っただけし、実際には
『黒い雨』を読んで本当に全然知らなかったのだと感じさせられた。
たしかに今でも教科書に記載しているように時系列順での時代
背景は学んでいたが『黒い雨』や翌日翌々日については思いもよらな
く全く無かった。読んでいくにつれて酷く心締めつけられた。
そしてリッツ映画六作についてだが他の人の感想にあって
日本人はパールハーバーについて学ばねばならないということもかよ
ふに落ちた。『黒い雨』を読んでからというよりも、私自身
アメリカは原爆の重みをまじ理解していないのかという半ば
呆れのような思いがこみあげたが、実際私たちがパールハー
バーについていれることもないし、たとしても歴史の授業で一分く
らゝ説明されるくらいだ。おしく、私が中学受験の塾に通って
たときに先生の授業が先生が日本軍の奇襲作戦について細かく
語りげに語られたくらいだ。パールハーバーと広島・長崎は時期
は違つが悲しいことに勝利した成功した戦争についてよ
ろりに思つてしまうものである。

実際問題、国際連合の安保理における常任理事国は今でも第三
次世界大戦の戦勝国側のメジャーな国々が占めており、戦争
を起すにはならないと一概に言っても人々の根底にある
戦争に勝つてやうなオラスイメンが失われることがない限り
今後戦争は起さうである。

今後私達が世界のみんなにロミオを伝えいくことも勿論非常
に大切なことではあると思う。しかしながら当時の日本の『罪』といふ
側面についても場合によってはそれ以上に学ばねばならないと感じた。

★核兵器に関する『黒い雨』とアメリカ映画との表現の違いについて考察してきたこれまでの授業を振り返って、理解したことをまとめ、感じたことや考えたことを書きましょう。(〇〇すべき)というように明確な「答え」が出ていなくても、いま抱いている「問い」をそのまま書き記しておきましょう。

黒い雨という作品は、今まで原爆、核兵器関連の作品を見たり、読んだりしたことがない私にとって、とても衝撃的なものだ。ただし、気分が悪くなる救いのない作品だ。読んでいる時むさむさ気分が悪くなる。たのびこれを実際に体験したとなると、気分が悪くなるどころでは済まないなと感じた。そのくらい、凄惨な事だ。たんならうと思ひ、一応、映画の方では、黒い雨で感じた惨たらしい兵器という印象からがらうと変わり、ただ大きな爆発をおこす兵器くらいしか描いていないものが大半であった。中には警鐘を鳴らすような描き方をしてるものもある。だが、それは昔の映画で、昨今の映画では原爆、核兵器人の危機感が薄れているような描写が多かった。このように、描き方一つで、凄惨な兵器からキスシンの指差となるようなコミカルな兵器ともなりうるのが、作品の良所であり、悪い所でもあると感じた。この原爆について学んでいくことも難しい問題だなと感じた。確かに人を殺すだけではない。後世に渡り、ておしめるより原爆は最悪の兵器だと思ひ。しかし兵器には焼夷弾や毒が入銃などたくさん種類がある。量にもよるが一回だけ使うのであればどれも原爆より被害は小さいであろう。これを原爆より弱い兵器、または被害が小さいから大丈夫などと言えらるのじあろうか。人の命を救って判断してもしいのたろうかという疑問がたたく人湧いてきた。これはどちらとも言えない答えの出ない問いなんたろうかと思ひ、また、戦争関連の作品を見るこたが多たので平和とはなんたろうかというのを考えさせられた。まずどこからが平和で、どこからが無秩序なのかという線引きがそもそも難しい。果たして一人の犠牲もなくして平和は成し得るのかというのかという疑問もある。世界で原爆がどう思われしているのかというので、日本人と同じ考え方をしている人はあまり多くはないというのがよく考えれば当たり前だ。前だけ、気づけなた。原爆には、戦争を終わらせたという側面がある。一方、たたく人の苦しみや悲惨さがあるで、そこを伝えるべきだと思ひ。それを伝えた上むなお恐ろしいものだと思ひないのであればそれはそれを意見であるし、私はそれを否定しない。大事なのは、過去におこた凄惨な出来事に自分が加害者が被害者に関わらず、目を向けてそれについて考えることだと思ひ。正直今の情勢を見ていると、世界平和なんて御伽話のように思えらるけれど、思わなければ何も始まらないし、原爆に関わらず、悲惨な出来事はもう起こて欲しくないで、平和になてほしいなど切に願う。

(2) 公民科（現代社会）の取り組み：ヒロシマから戦争を考える

ア 事前学習について

一昨年からはじめたWWLは、これまでのSGHの5年間の「ヒロシマから考える」取り組みを基に、新たな視点も加えて継承・発展させ、「ヒロシマから戦争を考える」とした平和学習を行った。英語の授業や国語（現代文）とも並行しながら現代社会の授業として展開することで、多角的な視点を加えて考察する機会が増え、生徒にとって意義が大きいプログラムとなっている。

現在の国際情勢はヒロシマから考えるための生きた教材であり、議論が活発に行われるよう授業を工夫した。今年度は広島研修に伴うフィールドワークが新型コロナウイルス感染対策から中止となり、生徒各人がどう考えるのかを模索しながら授業を組み立てていった。

広島への原爆投下だけをテーマとするのではなく、1学期の『2050年の世界』の授業においては、アメリカ合衆国トランプ大統領の選挙戦・米中覇権争いなど時事問題を取り上げることや、前年（中学3年次の公民の授業）の日本の安全保障政策（集団的自衛権）や憲法改正議論などとも結び付けて、「戦争」とは何かという広いテーマについて考えられるように配慮した。また、国連を中心とした「核兵器禁止条約」の採択、英語表記された「ヒバクシャ」の存在が世界に紹介されるなど、人類社会の前進が見られたことにも注目をさせることに留意した。

前年（中学3年次の歴史の授業）で取り組んだ、第二次世界大戦と日本の十五年戦争については「なぜ戦争に向かったのか」を多角的に考えた経験を踏まえ、WWLでは「戦争の加害と被害」という視点から考える授業に取り組んだ。ABC兵器の非人道性、安全保障と核の抑止という観点から考えを深めていった。原爆関連のDVDはNHKスペシャル『証言と映像でつづる原爆投下・全記録』、NHKアナザーストーリー『オバマ大統領～広島への地へ歴史的訪問舞台裏～』を視聴した。また、情報の授業においてNHKスペシャル『“ヒロシマの声”がきこえますか～生まれ変わった原爆資料館』を視聴する機会も設けた。

イ 生徒が考えるヒロシマから戦争を考える授業の取り組み

「核兵器の使用を禁止している一方で、核を保有しているのはなぜか」といった問題を提起した。ここであえて「安全保障の理想と現実」という2つの視点や立場から議論を交わした。また今年度は世界情勢の大きく変化したため、過去に行っていたSGHプログラムを修正することとなった。

(ア) 事前の「ヒロシマから戦争を考える」ための学習内容と、生徒が主体的に学ぶ授業プログラムの報告

戦争に対する理解、国際法上禁止される兵器、戦後の核開発と軍縮、現在の状況を整理した。これは、前年までの反省として、被害者視点に偏った研修になっている点を修正し、多面的に学べるようにした。

- ① 議論難民を出したくない。お客さん（部外者、関心がない）になる生徒が出ないことを目指し、全員が意見を言える授業にするよう配慮した。
- ② 熱い議論ができるようなグループ分けを行いたい。お互いの立場がかみ合わない方がよく、お互いに正当性を主張することができるようにする。いくつかの案の中から、原爆投下直後の広島市民の立場、原爆を投下したトルーマン大統領や小型核兵器の使用をほのめかすトランプ大統領

の立場、国連安全保障理事会常任理事国 5 か国の NPT の立場の 3 グループに分かれた。1 時間でグループの主張を調べ話し合いまとめさせた。

- ③ 1 クラス約 40 人なので、生徒に希望を聞き核廃絶・核使用・核抑止のグループ（各 1 名）に分かれ、自分の立場を発表し議論を行い、互いの立場について批判的に問題点を指摘した。

(イ) 実際の授業を通じて

この議論から各立場によって「核兵器を廃絶すべき」、「核の抑止力は必要」、「積極的に保持し使用すべき」という意見に分かれ、日本政府としてはどの立場に立つべきかを考えることにもつながった。クラスによって、またグループによってもアプローチが異なり、議論の方向性も異なることがあった。しかし、8 つのグループが、「主張」と「議論」と「まとめ」という 3 段階を経ることで、多角的な視点を持つことができたと感じている。現段階では日本を取り巻く東アジア情勢から、アメリカとの同盟関係を中心とした核抑止論を支持する生徒が多かった。

高校 1 年現代社会「ヒロシマから戦争を考えるための議論をしよう」

核使用論により平和を維持する VS **核廃絶論により平和を維持する** VS **核抑止論により平和を維持する**

討論：自分の意見や立場を主張し妥協しない対話

議論：相手とのズレ（論点）を明確にする対話

交渉：接近・妥協・合意へ結びつけるための対話

I：核兵器に関する主張…◎ 3 分間で自分の考えを整理する

討論で有利な論理を組み立て、現実の政治を念頭に、人間の本質を理解しながら主張を考える

II：各立場 1 分間で、自分の考えを堂々、相手に説得するように投げかける
聴く側は、相手がどのような主張をしているか記録に取り、次の討論で反論するための論理の矛盾や主張の弱点を集める

➡ 3 分間で元々考えていた持論（否定意見）も含めて、反論の論理を組み立てよう

III：各立場 1 分で、上記 I で行った相手の考え方への反論（論理の矛盾や主張の弱点）をする

➡ 聴く側は、相手が自分の主張のどの部分に対して反論・否定しているか記録を取り、3 分間で討論のための主張や反論の準備をする

IV：7 分間で三者間での討論へ

自分の意見の正当性を主張しつつ、相手の考えを論破する（どちらともいえないグレーゾーンには近づかない）

➡ 相手の意見を待たず自己主張をする（ひるまない）、D 言葉でディフェンス、反論の反論で相手を圧倒、第三者の時は両者の足を引っ張ろう

V：三者間での討論から浮かび上がった「議論すべき論点」を絞りこもう

➡ お互いを称え合いながら将棋の「感想戦」を行い、あの言葉は響いた、いい反論だった、ここがかみ合わなかったなど

VI：議論の先に、問題解決の交渉の余地はあるか（接近・妥協・合意）？

解決できないとすれば最大の壁は？人類が克服すべき問題は？

(ウ) 中間テスト：オバマ元大統領の広島スピーチを題材に「ヒロシマから戦争を考える」

令和2年度2学期中間テスト【高1現代社会小論文テスト】
10月20日(火)2限45分担当:大貫・筒井・真仁田

次の文は、[オバマ米大統領](#)が現職のアメリカ[大統領](#)として初めて被爆地・広島を訪問し演説した内容である。

「核なき世界」の実現に向け、「1945年8月6日の朝の記憶を薄れさせてはなりません」と訴えた。英語全文と朝日新聞による日本語訳は次の通り。

([朝日新聞デジタル](#)「オバマ米大統領広島演説全文」2016年5月28日から引用し一部改編した)

【設問】文中の下線部の「道徳上の革命」を「恐怖の論理」を乗り越えて、「核なき世界を実現する」ことは可能か、それとも不可能か。

可能だと考える場合はその理由と実現までの過程を論理的に、不可能だと考える場合はその理由とどう克服すべきかを論理的に述べること。

「ヒロシマから戦争を考える」の授業や議論、教科を横断し学んだことなどを生かし、自分の意見を主張すること。その際に、論文のタイトルを必ず書くこと。

※解答用紙はA4用紙1枚

2学期中間テストより…生徒の解答と採点者のやり取りと評価

令和2年度2学期中間テスト【高1現代社会小論文テスト】10月20日(火)2限45分解答用紙

・注意：裏面には書かない。最後の行まで書く必要はない。電子辞書等は使用不可だが誤字脱字は減点しない。

◎小論文のタイトル:

倫理・負国・大國の争奪が核廃絶の道を閉ざす

証明問題の方向性が
ある。

「核なき世界を実現することは可能か否か」を論じなさい。

私はこのように述べる。三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

第一に、核兵器の存在は、科学技術の進化により、倫理感が後進国に比べて劣る国々には、たとえ核兵器を持たないとしても、核兵器の保有に追いつかれてしまう。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

また、核兵器の存在は、核兵器保有国の利益を優先させるため、核兵器保有国は核兵器の開発・増強を続ける。これにより、核兵器保有国は核兵器の保有を維持し、核兵器の保有競争はますます激化する。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

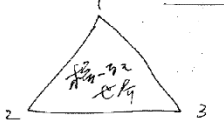
以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。

以上三つの要素、大國の争奪、核兵器の存在、核廃絶の道が、核なき世界を実現するに必要である。



→使用後は
ラセルや3Dプリンターが
科学者の責任の押し付け合い
原子力禁止運動が
学界、市民の注
意を引く
50年前の欧州
核軍縮条約の
成功
60年前の核実験
禁止条約の
成功
超大国の
核軍縮
に反対する
国々も
核兵器の
使用を
止める
べきだ
と主張する
核兵器の
使用を
止める
べきだ
と主張する
核兵器の
使用を
止める
べきだ
と主張する

- 【所見】
- A 問いに対して：核なき世界を目指すことは可能か不可能か、明確に論じられている → ○ △
 - B 広高授業活用：過去の学びや、現社・現文・情報等の授業を活用し論じられている → ○ △
 - C 問題発見指摘：現実の核問題を掘り下げ、どのような原因があるか指摘できている → ○ △
 - D 個性的な主張：人類社会の未来に向けた、自分自身のメッセージを発信できている → ○ △
 - E 建設的解決案：現状の問題を改善して解決に導く過程を、具体的に提案できている → ○ △
 - F 論理的な思考：論理の展開が現実的考察に基づいており、文章の構成も整っている → ○ △

(3) 情報科の取り組み：広島を発信する

ア 本科目の目標

情報の授業では、情報社会に主体的に参画するための資質・能力を育成するために、情報技術の活用を通じた学習活動の中で、問題の発見・解決に向けて情報と情報技術を適切かつ効果的に活用する狙いを定めている。さらに社会生活の中で情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任についても考えていくことを念頭に置いている。

イ プロジェクトとの関わり

情報科では WWL コンソーシアム構築支援事業プログラム、2年目の取り組みにおいて、Project Hiroshima (核兵器、平和、歴史、文化などの観点から広島について広く深く学ぶ) に加わり、公民科、英語科、国語科との教科連携を図り、本科目の授業において「広島を中心とした平和学習のまとめ」ホームページを2学期に完成させた。

本校では例年、高校1年次の10月に校外研修行事として広島を訪れている。今年度はコロナ禍の影響もあり10月の研修実施は見送られたが、この研修の事前学習として生徒自ら主体的にテーマを選定しホームページとしてまとめた。この授業を通じて、これまでに培ってきた情報発信力や情報モラルの知識を応用させ、情報活用の実践力を発揮する機会を与えることができた。なお、情報モラル教育については、各教科・行事・校外研修などそれぞれの機会と場面において中学1年次より発達段階に応じた指導を継続している。

ウ 学習指導計画

本科目は実習が多いため、情報科と数学科の教員でチームティーチングを行っている。ホームページを作成するにあたり、基本的な知識や用語については授業プリントにまとめて授業を進める。検索エンジンやブラウザ、便利な検索術、サーバーやインターネットの仕組みなどを理解させる。情報源がインターネットからの情報に限らないように、本校図書館と連携してレファレンスツールと参考図書(辞書・事典サイト「ジャパンナレッジ Lib」、朝日新聞データベース「朝日けんさくくん」、読売新聞データベース「スクールヨミダス」を含む)を授業で紹介し、いつでも活用できるようにしている。同時に、制作物をまとめる上では著作権についての考え方も重要で、情報モラルの観点から、ルールの説明や参考文献のまとめ方なども理解を深めさせ実践していくことが大切である。

ホームページの作成においては、HTML言語を理解させて、ソースの基本となる代表的な「タグ」を用いながら、今後も応用が利くように学習を進行している。ファイルの種類や拡張子の違いについて理解させ、文化の発展をささえる著作権の概念、ホームページでの表の作り方と画像の貼り方などを授業で説明して実践させることを繰り返し、最終的には各々のページにリンクさせて「学習のまとめ」のページを制作した。

■レファレンスツールの一例



■授業プリントの一例



エ 22期生 広島を中心とした平和学習のまとめ

広島の地域周辺に関するテーマを各自が選定し、インターネット、文献、学習関連動画などから調べ、HTML言語を用いてホームページをまとめた。平和学習について、調べたこと、感想などをプランニングシートにまとめ、Project Hiroshimaとしてふさわしい内容をホームページに表現して興味関心を高めることができた。



広島を中心とした平和学習のまとめ

地学によるヒロシマ分析

広島市内の被爆建物



核なき世界へ

原爆の軌跡

ヒロシマ過去と現在



原爆の仕組みから平和を考える

広島の実地調査

地図から消された島 大久野島

オ 取り組みを振り返って

協働型探究活動による、SDGs 達成を担う次世代地球市民の育成—— 本テーマにおいて情報科では知識・発信・行動を目的とした Project Hiroshima の連携授業を展開した。ホームページ作成を理解しつつ、事前に調べた内容や情報を組み込んでまとめ学習を遂行した。平和学習はもとより、今後予定されている広島研修の先駆けとなる資料が完成し、WWL コンソーシアム構築支援事業プログラムの2年目としての学びを実践することができた。

(4) 英語科の取り組み：Learning “Hiroshima”

ア 学習の流れ

- SADAKO[日本: 被害者]:第二次世界大戦での「被害者としての日本」を学習
- Singapore[日本: 加害者]:第二次世界大戦での「加害者としての日本」を学習
- 広島 Brochure Project:広島ブローシャの作成・発表（要約レポート作成含む）
- Non-verbal Communication:プレゼン方法の研究（Steve Jobs 氏のスピーチを活用）

イ SADAKO・Singapore

(ア) 学習指導計画

1学期の段階で、Democracy（民主主義）や Globalization（グローバル化）を扱っていたこともあり、広島プロジェクトへの導入は円滑に進めることができた。夏休み明けの最初のタイミングで、SADAKO を生徒全員が英文で通読し、日本が原爆によって受けた被害の大きさに思いを巡らせた。またこの「被害者としての日本」についての学習は、国語科で「黒い雨」、社会科で「核兵器」などを扱うことで、並行して教科横断的に学習しているものではあったが、英語科でも改めて原爆による放射能の被害を受けた少女“SADAKO”について扱うことを通して、生徒の「被害者としての日本」への当事者意識の醸成を図った。

その上で、「加害者としての日本」の学習へと移行した。日本からのみの視点では、ともすると「唯一の被爆国」として被害者視点で捉えがちである。原爆ではなく、水爆実験で被害を受けた地域は日本以外にも存在することも踏まえ、それ以外の視点を得るため、次の2点を主軸に置いた：①原爆投下が、米国も含めて、世界各国でどのように扱われているか。②被害者ではなく、加害者としての日本。ただし、「加害者としての日本」については、日本の教科書にはあまり記述が多くないこともあり、英語科で昨年度から導入している教材を踏襲することとした。具体的には、以下に示す教材群（※）を用いて学習を行った。

※英語の教材群（シンガポール等、「加害者としての日本」の側面に触れる）

(イ) 教材と教材観

a How the Hiroshima Bombing Is Taught around the World

＜内容＞日本・米国から離れ、第3国において（ヨーロッパ・アフリカ・南米・アジア等10カ国）、原爆投下がどのように教えられているか（4国は空欄としてどの国か議論して推測させる）

b Textbook Approach, The Atomic Bomb: Hiroshima and Nagasaki

＜内容＞米国教科書における原爆についての記述の変遷（終戦直後は中立的な立場での記述が一般的だったが、特に21世紀に入って、より深く価値判断に踏み込んだものが増加してきた）

c What Japan Did, Part 1: Sook Ching Massacre (Singapore)

＜内容＞シンガポール歴史教科書（国定）における、日本軍の行為の記述。Understanding Our Past: Singapore: from Colony to Nation (excerpted)より。

d What Japan Did, Part 2: Pearl Harbor (US) / Propaganda

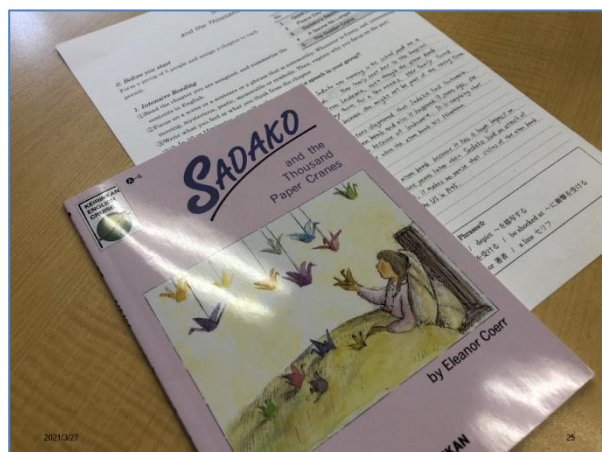
＜内容＞真珠湾攻撃の概要。パールハーバーの受け止められ方（“Remember Pearl Harbor”）。当時の米国の戦争プロパガンダ広告※それ以外の、日本も含めたプロパガンダ広告も紹介

こうして、「日本人には被害者・加害者のいずれの側面もある」ことを学習した。本年度は戦後75周年という区切りの年にあたることもあって、ここで改めて原点に立ち返るという意味も込めて、高1学年全体の大テーマである「**真実に迫る**」ことをベースに置きつつ、本年度の広島プロジェクトのメインテーマとして「**なぜ広島・長崎に原子爆弾が投下されたのか**」を設定することとした。その調査にあたって、生徒には以下の参考資料を配布した。広島プロジェクトに先立って、生徒は基礎知識として下記の資料の要約レポートを作成・提出した。またその際、情報収集の方法や客観性の担保などの指導も盛り込んだ。

※ 追加配布資料

- 世界史の教科書・資料集の抜粋
- 「なぜ米国は2発の原爆を日本に投下したのか」 立命館大学名誉教授 藤岡 惇
- “The decision to use the atomic bomb” (February 1947) By Henry Lewis Stimson

SADAKO の教科書



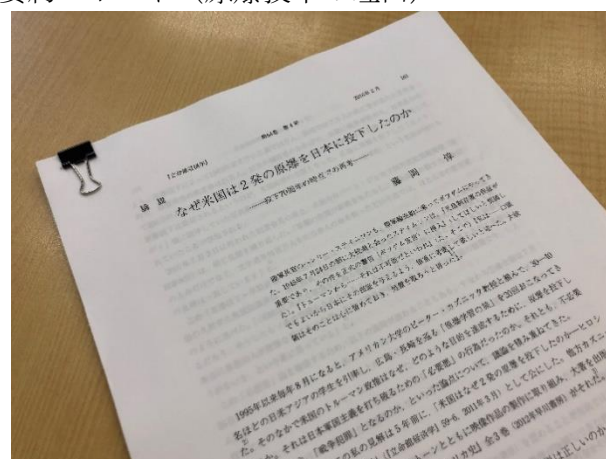
教材群（シンガポール等）



オンライン動画



要約レポート（原爆投下の理由）



ウ Hiroshima Brochure Project

【Hiroshima Brochure】

(ア) 学習の狙い

米国の高校生に向けて、発信したい内容を考え、発表する。本来であれば、広島研修旅行（10月中旬、2泊3日）で実際に現地を訪れるため、その経験を生かしてのブローシャ作成が前提とされるが、本年度は新型コロナ蔓延のため、広島を訪れることは叶わなかった。学校での学習内容をベースに実施した。

(イ) 実際の内容

- a 授業の 16 時間を使い、広島と戦争に関する話題について、米国フロリダ州 St. Stephen's Episcopal School (以下 SSES) の高校生に向けて、英語や他教科で学んだことを元に、生徒が 5,6 名で構成される各グループ単位で、アメリカの高校生に広島を紹介する教科書 (ブローシャと呼ばれるパンフレットのような形式) を作成。(内容はすべて英語で、分量は PowerPoint スライドで 5~6 枚ほどである。) またプロジェクトの集大成として実施する、5 分間の英語プレゼンテーションの準備を行う。
- b プロジェクトの終盤では、1 班 10~20 分のアドバイスを、東京外国語大学メンター様 (大学生・院生) 7 名から頂いた。公平を期すため、メンター様の担当する班は固定せずに、回ごとに入れ替わる。
- c 本年度に関しては、新型コロナウイルスのため、東京外国語大学メンター様は各回とも Zoom にてオンラインで授業や発表に参加して頂いた。
- d 発表のジャッジもメンター様に担当して頂いた。発表後はメンター様から生徒に直接、質疑応答をして頂くことで英語のやり取りを実施。発表内容の評価については主観を排すため教員は担当しない。
- e 先にも述べた通り、新型コロナウイルスのため、ジャッジは発表当日に Zoom にてオンラインで生徒のプレゼンテーションを視聴し、その後は評価シート (Feedback Sheet) を記入・返信して頂いた。

10 月	5~6 人班で、ブローシャ (=パンフレット) のテーマを決める。 *本来であれば 10 月中旬に広島研修が行われるが、新型コロナウイルスのため今年度は実施せず。
10-11 月上旬	テーマが設定できた班から内容のアイデア出しを行い、ブローシャを作成していく。東京外国語大学の留学生がメンターとして付き、英語にて a) アイデア出し、b) テーマ設定、c) デザイン d)、英文添削やプレゼン指導を実施する。
11 月下旬	プレゼンテーション・セッション。ブローシャの良さがうまく伝わるように、各自プレゼンテーションを用意。評価 (ジャッジ) には、東京外国語大学の留学生があたる。
12 月上旬	各グループのブローシャをオンラインで SSES と共有し、SSES の教員と生徒にブローシャを評価してもらい、全ての作品の中から優秀作品 (上位 2 点) を決定。(今年度は新型コロナウイルスのために、毎年行われていたフロリダ研修が実施できなかったが、SSES 側のご提案でプレゼンテーションを評価してもらえることとなったため。) その結果、B 組 3 班が最優秀作品賞に選出された。
3 月下旬	最優秀作品賞に選ばれたグループ (B 組 3 班) が、本校を代表して広島県教育委員会主催 WWL 国内フォーラム (2021 年 3 月 27 日実施) に参加し、動画発表・質疑応答を実施した。

(ウ) 総括

本 Project とは、本校の姉妹校であるフロリダの Saint Stephen's Episcopal School (以下 SSES) の要請により、本校の生徒が「日本の生徒の視点から見た歴史の教科書を作成する」ということをその主な目的・成果としている。作成した教科書は “Brochure” (ブローシャ) と呼ば

れ、パンフレットのような形式をとる（PowerPoint で作成）。例年であれば最優秀賞を受賞した生徒のグループが、同姉妹校（SSES）を訪問して実際にブローシャを説明する流れとなっているが、本年度は新型コロナ蔓延により生徒は渡米の機会に恵まれなかった。

渡米こそ叶わないものの、それでも姉妹校（SSES）からは例年通りに教科書を作ってほしいとの要請を頂いたこともあって、本年度に限っては、生徒が作成したブローシャ及びそのプレゼンテーション動画をオンラインでSSESと共有し、その中から優秀作品（上位2点）を選定してもらうという極めて異例の流れとなった。例年であれば、校内で東京外国語大学のメンター様をジャッジに招待して選抜してもらうのだが、本年度はこうして図らずしも全グループのブローシャをSSESにて読んで頂く機会に恵まれた。（なお、本校においても、東京外国語大学のメンター様をジャッジとしてのプレゼンテーション発表は実施。）

その結果、次のグループ（B組3班）が、SSESの教員・生徒から圧倒的な高評価を得、最優秀賞を獲得した。本年度は、「なぜ広島・長崎に原爆が投下されたのか」をメインテーマとして、各グループがそれに関連したサブテーマを設定してブローシャの作成に取り組んだのだが、当該グループが取り扱ったテーマは、主に「真珠湾攻撃について」であった。

具体的には、以下の4点において調査・比較を実施：

- (1) クラスメートに「原爆」と「真珠湾」の認識についてアンケートを実施、
- (2) Googleでのそれぞれの単語を検索、
- (3) 原爆に関するイベントを開催し、在日外国人の方と意見を交換、
- (4) 日米の歴史教科書を比較。

主な結果は、以下の通りであった：

- (1) 原爆に関する文学作品を読んだことがある人は全体の8割であったのに対し、真珠湾攻撃については1割に留まった。またそれぞれの出来事について連想される単語を思いつく限り挙げてもらったところ、原爆の方が多かった。
- (2) 英語圏では検索ヒット数に差はほとんど無かったが、日本語で検索すると「原爆」は「真珠湾攻撃」の約7倍のヒット数が得られた。
- (3) 日本の教育は原爆による被害を主張する傾向がある。
- (4) アメリカの教科書は過程を細かく記載しているのに対して、日本の教科書は出来事を重要視する傾向が見られ、その過程について細かく記載はしていない。

この結果を受けての、考察・結論は以下の通りとなる。

日本とアメリカでは教育の内容に差があり、特に日本国内における原爆投下と真珠湾攻撃における情報量の差は大きかった。これらの違いによって、人々の間での平和や戦争に関しての認識の違いやバイアスが生まれていると考えられる。当初の仮説の通り、日米間では教育内容に大きな違いがあり、そのことが人々の考え方に違いを生み、そのギャップが現代

の国際社会の問題につながっている。そのギャップを埋めるのではなく、その違いを理解することが大切である。その認識の差を埋めるためには、実際に対話を通してお互いの意見を交流することが重要である。

* なお、この最優秀作品を作成したグループ（B組3班）は、後の2021年3月27日に実施された「広島WWL国内フォーラム」に参加した。詳細については、「広島WWL国内フォーラム」のセクションを参照。

<実際のブローシャ>

1

The Difference of Awareness between the US and Japan about Pearl Harbor and Atomic Bombs

2

Hiroshima Brochure Project

We create brochures for American high school students as reference material, on the topic of **“Why atomic bombs were dropped in Hiroshima and Nagasaki.”**

3

About Pearl Harbor

About Atomic Bombs

4

How do people perceive the Atomic Bombs?

Each foreigner had different perspectives on Atomic Bombs:

- “I think it’s a symbol of liberation from Japanese colony but it’s too cruel”
- “My grandma said she wept for joy when she heard the atomic bombs were dropped on Japan.”

We think that the difference of perspectives is caused by school education.

5

Questionnaire Survey of Pearl Harbor and Atomic Bombs

Q. Do you know the background of the attack on Pearl Harbor ?

Q. Have you ever seen or read literary work the main subject of which is ...

	Atomic Bombs	Pearl Harbor
Yes	87%	62%
No	13%	38%

6

Q : Please tell us the words which you think are related to the Pearl Harbor and atomic bomb as many as possible.

Pearl Harbor	Atomic Bombs
No.1 Surprise attack (7 people)	No.1 Hiroshima & Nagasaki (8 people)
No.2 Pacific War begins (4 people)	No.2 Mushroom Cloud (6 people)
No.3 Remember Pearl Harbor	No.3 Hiroshima Peace Memorial (4 people)
No declaration of war (3 people)	No.4 Little boy & Fat man (3 people)
Others : Arizona, Isoroku Yamamoto, Elm no Zoo	Others : Cruel, Atomic bomb disease, Black Rain, Hladshi no Gen, ...
total : 34 words	total : 67 words

7

Google Search Result of Atomic Bomb and Pearl Harbor

Search Term	Results	Time
attack on pearl harbor	About 22,500,000 results	0.86 seconds
the atomic bombs	About 21,500,000 results	0.90 seconds
真珠湾攻撃	約 2,000,000 件	0.57 秒
原爆	約 14,200,000 件	0.54 秒

Little Difference (between English terms)

More than seven times (between Japanese terms)

8

The Difference Between the Textbooks of Both Countries

	Comprehension check or the theme of discussion	Amount of text	Contents
American textbooks	exist	PH 7 sentences AB 12 sentences	process events
Japanese textbooks	unexist	PH 1 sentence AB 2 sentences	

American textbooks promote students reflection more than Japanese ones.

PH=Pearl Harbor
AB=Atomic Bombs

The difference of sense of value or education against history between U.S.A. and Japan.

9

Bridge the Gap



10

Realize and Recognize the Differences



Discussion



Background of history

その他の優秀作品 (第2位を獲得したもの)

1



2

"The Diplomatic Defeat"
-Timeline of Japanese Diplomacy-

Detail is what students have basically wanted for the task was to have more visual resources illustrating the timeline of events and to have more information on the background of the events.

1931 Manchurian Incident

1936 Anti-Comintern Pact

1937 Sino-Japanese War

1941 Oil Embargo

1941 Hull Note

3

What led Japan and the world into WW2?

The decision between the government and the Army

Why has this decision occurred?

At the time of Russo-Japanese War, Japanese organization of the military was the Ministry of Foreign Affairs, War and Navy, and the members of this committee were not able to make a decision.

In 1920, the Japanese government was supposed to take the responsibility of taking the decision. However, the successful businessmen and the political party led the government to decide. The government was not able to summarize all the opinions and information to form one strategy.

This made the Japanese unable to be out of control, and led the world into the 2nd World War.

4

12 American soldiers

Why were the 12 American soldiers...?

What happened to the 12 American soldiers...?

What was the result of the 12 American soldiers...?

5

Paper Lantern

What is the story about...?

Why is it important...?

What is the message...?

6

To pass down the atomic bomb to our future generations

Why is it important...?

What is the message...?

What is the goal...?

ジャッジのコメントシート

SKG Hiroshima Brochure Project 2020

Oral Presentation Evaluation Sheet Class B

Judge (signature): **Tiffany Tang**

Ord. #	Group #	Content Organization	English		Attitude	PowerPoint slide	SUM	Comment
			Proficiency	Fluency				
1	5	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	10	I thought this is an interesting topic! In my opinion, shopping street is one of the many cultural uniqueness of Japan. It's true that number of people visiting shopping streets are dwindling amongst Japanese people; but to foreigners, there is so much to explore! I think the presentation was brilliant, easy to understand, good deliverance, and smooth. I appreciate the practice and research regarding this topic. As the next generation of young Japanese, it's important to preserve traditional values in modern times. Great work!	
2	2	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	17	Good job! The overall presentation was easy to follow, there was good teamwork, eye contact. This is a relevant topic, especially when vaccines have just started to roll out in Japan. I thought you could use some comparisons in the presentation for us to see how Japan could have managed the situation differently.	
3	4	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	5 4 3 2 1	10	That was a neat presentation! I thought the video in the beginning really helped to understand the context of the presentation. This is a difficult topic but I applauded you for the great work in sharing your ideas. The child military	

コメントシート同拡大版

I thought this is an interesting topic! In my opinion, shopping street is one of the many cultural uniqueness of Japan. It's true that number of people visiting shopping streets are dwindling amongst Japanese people; but to foreigners, there is so much to explore! I think the presentation was brilliant, easy to understand, good deliverance, and smooth. I appreciate the practice and research regarding this topic. As the next generation of young Japanese, it's important to preserve traditional values in modern times. Great work!.

エ Hiroshima Brochure Project Follow Up : Non-verbal Communication

(ア) 学習の狙い

Hiroshima Brochure Project では内容の充実したプレゼンテーションが見られた。その一方で、3 学期の Conflicts においてもプレゼンテーションを実施することを見据えて、更なるプレゼンテーション能力の強化に取り組んだ。具体的には、「聴衆に訴えかける効果的なプレゼンテーション」を目指し、Steve Jobs のスピーチやリーダーシップ論、非言語コミュニケーションなどの資料を用いて学習に取り組んだ。

(イ) 実際の内容

a Steve Jobs Commencement Address in 2005 Stanford University

<素材> Stanford News

(<https://news.stanford.edu/2005/06/14/jobs-061505>)

<内容> スタンフォード大学を卒業する学生に向けたスピーチ：言葉遣い・英語の流暢さなどプレゼンテーションの見本となる映像

b Inspired Leadership

<素材> Reading with Ted Student Book 2

(<https://www.amazon.co.jp/Reading-Ted-Student-Book-2/dp/130526570X>)

<内容> Martin Luther King Jr.などにみられるリーダーとしての資質について：有名な“I have a dream”のスピーチに遠方から集結した大衆心理を探る

c Non-Verbal Communication

<素材> 東京農工大学 2015 年度入試問題より

(出典：Andrew B. Newberg and Mark Robert Waldman, Words Can Change Your Brain, A Plume Book, 2013, pp.44-45)

<内容> 非言語コミュニケーションが人に与える影響について：非言語コミュニケーションの専門家 Paul Ekman 氏 及びスタンフォード大学の研究結果

(5) 広島WWL国内フォーラム

令和3年3月27日(土)、広島県におけるワールド・ワイド・ラーニング(WWL)コンソーシアム構築支援事業 国内フォーラムが、オンラインにて開催された。国内フォーラムとは、生徒実行委員会の高校生が中心となって企画・運営するフォーラムのことである。広島県ALネットワーク校及び国内のWWLコンソーシアム構築支援事業の拠点校等の高校生を対象とした、「平和」をテーマとした探究活動の成果等を発表する場である。また、「平和」についての考えを交流することで新たな探究に向けた知見を得るとともに、国内外の多様な他者と平和構築に向けて具体的な行動を起こす場とする。なお、この国内フォーラムは、令和3年7月に開催予定の高校生国際会議への中間地点という位置付けで実施された。



* 参加チーム

学校名：渋谷教育学園渋谷高等学校 チーム名：渋谷スクランブルズ (B組3班)

* 発表テーマ

The Difference of Awareness between the US and Japan about Pearl Harbor and Atomic Bombs

■ 出場した生徒のコメント

新しい学年を目前にした3月27日、ついに私たちが高一の二学期から取り組んできたプロジェクトに一区切りがつけました。English Aの広島ブローシャ・プロジェクトの延長線上で取り組んだ、WWL国内フォーラムへの参加です。このフォーラムでは、WWLに指定されている高校の生徒たちが、自分たちの考える「平和」の実現方法について発表をしました。私たちは日米の歴史認識の差に着目し、その発表テーマを「**Bridge the gap**」と設定しました。また、今回はオンラインでの開催であったので、事前に収録した動画を流し、それに対し質疑応答をする形式がとられましたが、本番では沢山の質疑が飛び交い発表者・視聴者ともにより深く「平和」の意味を考える事ができました。発表の準備をするに当たっては資料作成や字幕作成など、慣れない作業に戸惑う事もありました。しかし、学年集会で動画を流ささせていただいてアドバイスを貰ったり、白鳥先生に発音やプレゼン資料の訂正をしていただいたりした事で、私たちは本番に向けて準備を進める事ができました。ありがとうございました。厚く御礼を申し上げます。

2 Partnerships for the goals Project

SDGs が策定された経緯を理解し、貧困、健康、ジェンダー、水問題、気候変動、イノベーションなどをテーマとして、その要因について、教科の枠を超えて学んだ。その上で、世界がこのSDGsにどのように関わっているのか、企業、大学、機関の取り組みを調べた。また、社会貢献活動についての理解を深め、世代を問わず、個人の行動がSDGs達成に影響しているという自覚を育んだ。今年度は実際にボランティア活動ができない期間もあったため、講演会やワークショップを紹介し、オンラインでの参加を呼び掛けた。(対象：中学2年生 高校1年生 高校2年生)

公民科・英語科の取り組み：2050年の世界

英語科の取り組み：Wars and Conflicts

Social Justice

家庭科の取り組み：こどもの権利

中学2年生の取り組み：SDGsについて考えよう

高校2年生の取り組み：Service Learning

特別講座：気候正義

(1) 公民科（現代社会）・英語科の取り組み：2050年の世界

中学までの学習内容を中学までの地理・歴史・公民の学習内容を、「これからの世界を考えるために必要な知識」と位置づけ活用するために、『2050年の世界：英「エコノミスト」誌は予測する』を共通テキストとして用いた。人口動態の激変が産業及び社会構造にどのような影響を与えるのか、また新たな科学技術（テクノロジー）のめまぐるしい進歩により人間社会がどのように変わるのかを、書籍資料、新聞記事、ドキュメント番組を活用し時代の情報を集め理解し、議論を重ねながら授業展開をした。多様な価値が溢れる社会における正義の議論もサンデル教授のテキストを活用し議論を深めた。

特に、経団連が推進する「Society 5.0 for SDGs」を取り上げ、AIやIoT、ロボット、ビッグデータの活用など、革新技术を活用した社会の到来を予測する授業を行った。ゲノム解析など生命倫理とも結び付け、倫理的な課題や社会課題の解決についての議論を重ね、中間テストの小論文のテーマとして取り上げ、生徒自身が自分の言葉で考えを主張する機会を設けた。

※英語科では、公民科で学習したトピックに関する新聞・雑誌記事（英文）を授業教材として取り上げ、読解力を養うとともに内容に関する更なる調査を行い、それをもとにプレゼンテーションやディベート、エッセイとして完成させた。

ア 公民科の取り組み：「2050年の世界」を生きる

(ア) 『2050年の世界』

a 国際秩序のゆらぎ

『2050年の世界』の中で、国際政治や秩序についてどのような変化が起こるのか取り上げた。19世紀のイギリス、20世紀のアメリカ合衆国という覇権国家による国際秩序と、21世紀に入りグローバル化とともに多極化する世界、テロとの戦いといった不安定要因、トランプ政権の大統領選挙（自国優先主義のポピュリズムと分断する社会）を取り上げた。国際秩序が混沌とする世界の情勢として、米中の覇権

争いを取り上げ、特に情報通信分野の主導権争いを取り上げた。

b 社会課題を考える

新型コロナウイルスの感染拡大により日本のみならず世界がどのような状況にあるのか、緊急事態宣言下の自宅学習期間を利用しリサーチに取り組ませた。また、対面授業では2050年における少子高齢化と科学技術の進歩について考える機会を設けた。トピックとして「AIとの未来...AIは天使か悪魔か」、「Society 5.0 for SDG s」を取り上げ、中間テストは「コロナ禍と世界」をテーマに小論文を課した。

c 「SDG sを自分ごとに」

2050年の人口動態の変化、産業構造の変化、グローバル化する世界の不安定化などの課題や問題に対して、「Society 5.0 for SDG s」で掲げられているAIなどの革新的な技術を用いた解決を話し合った。生徒自身が17の目標から解決したいテーマを選び、同じテーマを選んだ生徒がチームを組み、問題の原因となっていることを話し合い、具体的な解決策をクラス内で提案するプレゼンを行い、アイデアを共有した。2学期にカンボジアの社会課題解決のための事業プラン作成に取り組んだ。

22 期現代社会:SDG s (Sustainable Development Goals)を 行動に移そう！

17 のSDGのゴールの中で、**自分**が関心を持つもの、取り組めることはなんだろう？

- SDG sの行動理念は、“**no one will be left behind**”（誰も置き去りにしない）
- 渋渋の伝統的のスローガンは、**Actions, Not Words!**（言葉より行動を！）



序文：SDGsを自分ごとにしよう

「持続可能な開発目標(SDGs)」は、2015年9月に国連で採択されましたが、その決定プロセス自体がとてもユニークなものでした。3年をかけて世界中で政府・国連・市民社会・企業・研究者・女性・若者などのさまざまな立場の人たちが協議を重ね、世界から1,000万人の人々がオンライン調査を通じて声を届けることで成立した「みんなのための・みんなで支える」目標なのです。ですから、SDGsは政府・国連に加えて、企業・自治体・個人など誰もが参加できる枠組みになっています。つまり、世界中の一人ひとりが主役なのです。

今世紀に入って気候変動が猛烈なスピードで深刻化して人々の暮らしを直撃し、貧富の格差が広がり、紛争の数が増え、難民・避難民の数が第2次世界大戦以降、最高の水準になっています。このままではこの美しい地球を子・孫・ひ孫の代につないでいけない、という強い危機感のもと生まれたSDGsは、すべての国連加盟国が約束した、経済・社会・環境の側面を包括的に推し進めながら、2030年までにあらゆる形態の貧困に終止符を打つという非常に野心的な「世界レベルの社会契約」です。目指すべき到達点から逆算して、あらゆるレベルのアクターが行動を起こさなければ、とても達成できるものではありません。私がいろいろな機会をとらえて「SDGsを自分ごとに」と強調しているのは、このような背景があるからです。

SDGsの実践には、「ザ・正解」というものはありません。しかし、SDGsに向きあうと、課題同士、担い手同士のつながりへの意識が深ま

り、ものごとを有機的につなげながら統合的に思考する力や、想いとリソースをもった人を業界の垣根を越えて結びつけてより良い方向を目指すプロデュース力が鍛えられます。

さらに先進国から途上国まで、すべての国が普遍的に取り組むSDGsは、いわば世界共通の物差しです。ゴール達成に向けたすべての活動が、この物差しに沿って評価され、優良事例や教訓を世界に向かって発信し、共有しあえる仕組みになっています。また、SDGsには民間部門や地方自治体が世界レベルの議論に直接つながることのできる「入り口」の役割もあり、やる気のある団体を巻き込んでいく推進力があります。もちろん子どもだって参加できます。教科書に載っているから、試験に出るから学ぶのではなく、自分自身がアクターになって未来をつくるために学ぶことで、学びの面白さがグンと増すのではないのでしょうか。

難民・避難民の権利の保護に長く携わってきた私にとって、人権に根差した「誰も置き去りにしない」というSDGsの考え方は難民をはじめとする取り残されがちな人々を包摂しようというもので、ぜひ強調したいポイントです。

未来の子どもたちが歴史を振り返ったときに、SDGsをポジティブな遺産として感じてもらえるよう、将来世代の芽を摘むことなく多様な人々が自分らしく暮らしていける社会を、ぜひ一緒に実現していこうではありませんか！

国連広報センター 所長
根本かおる

1. SDGsの3つのブロックから優先順位が高いと思う課題(1~17のゴール)を選び掘り下げよう!

1~6のゴール=生きる権利を守る: 貧困、飢餓、健康と福祉、教育、ジェンダー平等、安全な水とトイレ(WIL)

7~12のゴール=都市化と産業社会へ: エネルギー、働きがい、産業基盤、不平等、まちづくり、つくと使う責任

13~17のゴール=グローバルイシュー: 気候変動・海と陸の豊かさ・平和と公正を・パートナーシップで目標達成を

⇒ A 自分が注目した課題は何? B 問題とその原因は何? C 改善すべきことは何?

A 1~17の目標から3つ(数字で) ⇒ _____ . _____ . _____

特に興味があるのは(数字で) ⇒ _____ 選んだ理由: _____

B 問題点は⇒ _____

C 改善すべきこと⇒ _____

2. 上記1の解決策について考え、つなげて、発信していこう

⇒ A 目標(スローガン) B 行動計画はこれだ C どんなインパクトを与え変化を生むのか?

A 具体的目標(スローガン) ⇒ _____

B 方法: 行動事業計画等⇒ _____

C どんな変化が生まれるのか⇒ _____

3. 三人寄れば文殊の知恵作戦(チームでアイデアを拡大していこう)

☆同じブロックや番号を選んだメンバーで集まり、それぞれのアイデアを付箋に書き込み、イーゼルパッドに貼ってみよう

※クラス内のアイデアやメッセージをつなぎ合わせ形にしよう! 学年の、学校の、日本の、世界のアイデアを発信しよう!

⇒

22期高校1年 組 番【氏名】

※3人で1チームを作り、イーゼルパッド模造紙にアイデアを書いた付箋を貼っていった。

「超高速TED」と呼ぶ1チーム3分のプレゼンテーションを行った。

この取り組みから、2学期にWWLコンソーシアムの活動で「ミエタ社」と協力し、カンボジアにおける具体的なSDGs活動の事業プランに取り組んだ。

d 1学期中間テストより…生徒の小論文と採点者のやり取りと評価

2020年1学期「現代社会」22期生小論文課題 1年

◎新型コロナ・ウイルス感染症の拡大は現代社会にどのような影響を与えたのか、事例を含めあなたの考えを述べなさい。

小論文のタイトル：アジアの新興国の経済が新型コロナ感染症によって受けた影響

東南アジア・南アジア・西アジアなどの発展途上国および新興国では、石油資源を利用した産業や、輸出向けの製品をつくる輸出指向型経済など、外需に大きく影響した、不安定でありながら勢いのある産業体制が成長してきた。しかし、これらの国々は今回の新型コロナウイルス感染症拡大の影響で大打撃を受けた。アジア地域は、急速な人口増加と技術の習得によって様々な面で今後台頭してくると言われている。しかし、今回のような事態がまた起こると、近未来に起こるはずのアジアの台頭の歴史も、短期間で終わってしまうのではないだろうか。

今回経済で大打撃を受けた国の1つがアラブ首長国連邦などの中東原油産出国である。感染拡大防止による需要の低下で、原油価格は5月には、1バレルあたり40ドルまで暴落した。アラブ首長国連邦は、1960年代前半から原油が産出され、インドなどのアジアを中心に外国人労働者が増え、現在は人口の8割を占めている。彼らは自国民に比べて収入の格差が多く、特に貧しい出稼ぎ労働者は今回の事態で生活困難となった。しかし政府も、8割を占める彼らと無視しおけるにはいかならず自国民の権利を侵す、かつ外国人労働者の環境を改善すること。一歩おくれればアラブ首長国連邦としての成立もあやしくなる。

もう一つ、経済で大打撃を受けたのが、タイなどの東南アジアだ。タイの観光業はGDPの2割を占めることとなり、また主要な輸出産業も活動自粛が呼びかけられた影響で1月～3月のGDP伸び率は8年ぶりに低い水準となった。1960年代に日本自動車メーカーがタイに進出したのをきっかけに、安い人件費を求めて多くの外国企業が投資・進出したことで、東南アジアでは、習得した技術によって製品を輸出向けにする、輸出指向型の経済が続いた。しかし、外需中心の経済のため、不安定要素が多かった。1997年には、アメリカ政府がドル高政策を行なったのをきっかけに、ドルに依存していた東南アジアは輸出困難となり、アジアの通貨が連鎖的に暴落した。アジア通貨危機が起こった。1997年や今回の事件で、東南アジア経済の不安定さが浮き彫りになると、今まで投資していた外国企業が立ち去り、誰にも助けられぬまま経済が崩壊する可能性もある。

上の2つの例のように、外需に大きく影響し、実質的には不安定であった経済は、今までは他国からの期待で急速な成長が見られたが今回の新型コロナ感染症拡大によって、その不安定さが明かになり、見直しが必要となった。アジアの経済が、その安定性を手に入れる1つの策は、地域の統合かと思う。現在でも、中東ではOPEC、東南アジアではASEANなどの共同体が存在するが、それらの経済的つながりを強め、周辺地域に広げること、それによって安定性が増える。少しの安定性は確保できたはずだ。この体制によって得た経済的利益を、とばさず国内の貯蓄にまわし、民間の投資もその貯蓄で主にまかすれば、こうした安定性も見込める。これらによって、不安定要素の多い完璧なアジア経済の台頭を実現できるだろう。

対岸の火事
地理の教科書の
モリカセーとか
歴史的視点
おもしろいgood!
移民を受け入れるのも
あるかもしれない
大変
シカポーも同様
どうですか？
アジア通貨危機！
IMFの介入
地域共同体
連携して
内需拡大を
目指す必要がある！

外需 → 内需 (セーフティネット) → 先進国へ
経済の経済!

・社会的関心 (新型コロナ・ウイルスの影響を追いかけることができるか)	⇒	◎	○	△
・調査の活用 (具体的なトピックへの理解と問題点の指摘ができていますか)	⇒	◎	○	△
・問題の解決 (問題の発見→原因の追究→問題の影響→問題の解決策提示)	⇒	◎	○	△
・個性的意見 (自分独自の視点で、意見をしっかりと主張できているか)	⇒	◎	○	△
・メッセージ (社会をより善くよくするメッセージが明確に示せているか)	⇒	◎	○	△
・論理的主張 (問いと仮説を立て、文章構成が論理的にまとまっているか)	⇒	◎	○	△

所見 経済の過去から新しい視点から問題を捉える原因、解決策を指摘している (2点)

イ 英語科の取り組み : The World in 2050

(ア) 学習プラン

①新型コロナ後の世界:

新型コロナ蔓延を受け、感染症について総合的に学習

②Unit 5: Democracy:

中国の台頭を受け、民主主義の限界について検証・考察

③Unit 8: Globalization:

グローバル化は 新型コロナ蔓延の元凶と言えるかを調査

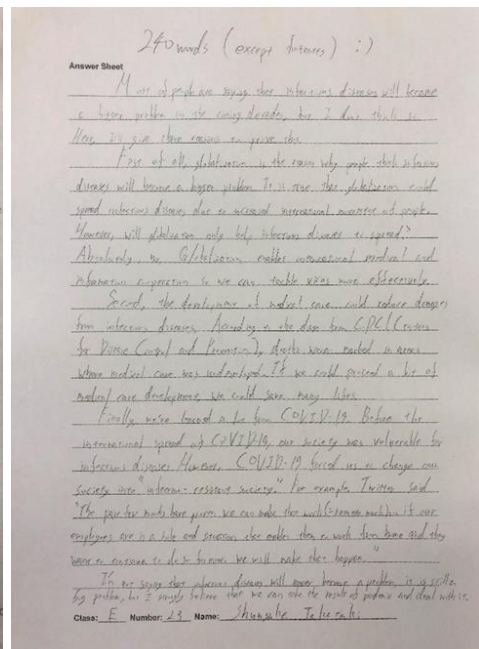
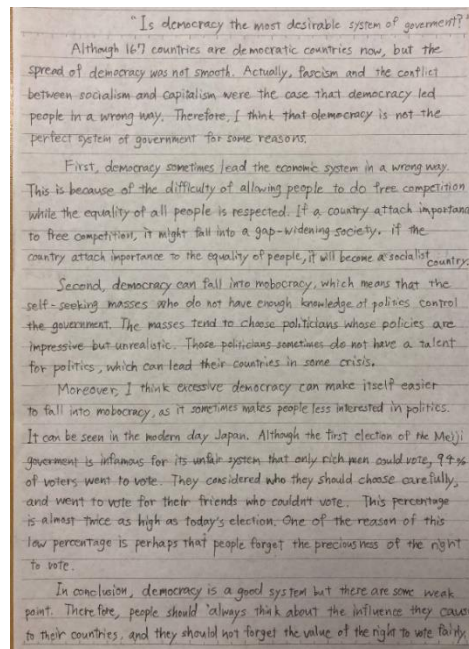
④Unit 9: Humans or AI:

テクノロジーの進展という角度から 2050 年の世界を想像

(イ) 学習指導計画

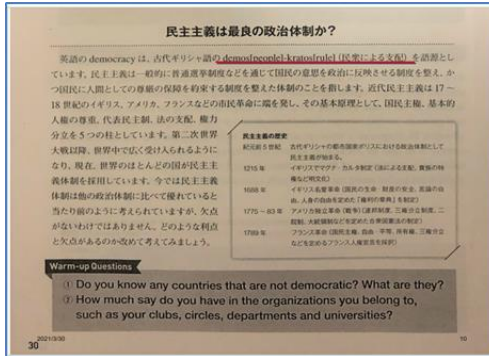
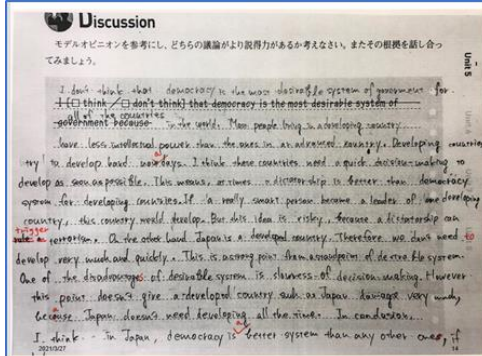
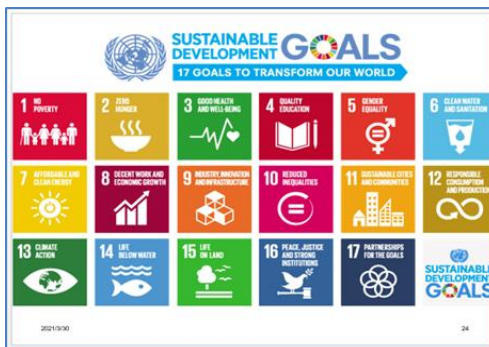
4月以降、緊急事態宣言の発令される中、学校はオンライン授業によるスタートとなった。1学期は例年、「2050年の世界」に想像を巡らせ、来たる将来を見据えることを授業の柱としているが、今年はいったいコロナ禍の状況を受け、感染症の実態も含めて生徒にとってより身近な観点から「真実に迫る」ということを高1学年全体の大テーマと位置付け、具体的には“Agree or disagree: Infectious diseases will become a bigger problem in the coming decades”[賛成か反対か: 感染症は今後の数十年でより大きな問題となるだろう] (実用英語検定1級のエッセイ問題より抜粋)」というテーマのもと、生徒各自に英文エッセイを仕上げさせることで、1学期の集大成とした。

生徒の英文エッセイ事例



コロナ感染症への対処方法を検証するプロセスで、英語の教科書“Take a stance”の本文をじっくりと通読しながら、生徒・教員が一丸となってDemocracy（民主主義）やGlobalization（グローバル化）のプラス面、マイナス面を多角的に考察する機会を持つことができた。特にコロナ禍において、迅速な危機対応で中国がその存在感を増す中、果たして本当に民主主義は限界を迎えていると言えるのかを生徒各自が在宅の時間でじっくりと考え抜いたこと、また新型コロナ蔓延の元凶ともされるグローバル化がもし仮に存在しなかったならば、今この世界はどうなっていたと思われるか、という点にも想像を巡らせたことは、生徒が今後の世界を生き抜く上での根本的な物事の見方にも一定の影響を及ぼすような貴重な学習体験となったようである。更に1学期終盤には、人間とAIの関係を扱った教科書の本文を扱うことで、「テクノロジーの進展」というまた別の角度から「2050年の世界」を捉え、見据えるに至った。

オンライン授業からの抜粋



(2) 英語科の取り組み : Wars and Conflicts

ア 学習プラン

①Unit 11: Government:

Conflicts の前提として、様々な政府の在り方を検証

②Conflicts プロジェクト:

身近な Conflicts を題材として自分なりの解決策を提案

③Unit 14: Immigration :

Conflicts との兼ね合いから、移民受け入れの是非を検証

④Wars and Conflicts :

1年間の学習の集大成として、振り返りのレポートを作成

イ 学習指導計画

2学期の広島プロジェクトの後続プロジェクトとして、3学期は主に Conflicts (紛争・対立) に焦点を当てた。Wars & Conflicts (1): Wars、及び (2) 広島プロジェクトで扱ったのは、人類史上最大の国家間の殺戮である第2次世界大戦、そしてその悲劇であった。一方、冷戦の終焉・グローバル化の進展等の理由により、世界の安全保障の課題は、(主権) 国家間の覇権競争・イデオロギー闘争 (民主-資本主義陣営 vs 社会-共産主義陣営) といった「国家・陣営間の戦争」から、国家・国境線という枠組に関わらない・国家内外を問わない「異なる文明 (・文化) や民族間の衝突・摩擦」に移行しているのが実態である。

ウ 学習の狙い

こうした背景をベースとしつつ、高1学年全体の大テーマと位置付けられている「**真実に迫る**」を追求する目的意識から、身近な Conflict を取り上げその真実に迫り、その上で考えられる自分たちなりの解決策を提案する、という枠組みを設定した。また Conflict の定義については、当然ながら「紛争」を第一に想定するものであるが、そこから派生して自分たちの身近にある「対立」について取り上げることも可能とした。その意図としては、自らの生きるこの時代に実際に存在し、自らに関わる課題として Conflict を捉えることが挙げられる。また、解決策を模索させることで、生徒の主体的な提案・提言を促した。

エ 実際の内容

1. 授業7時間を使い、5分間の発表の準備を行う。
2. 「8-4. Hiroshima Brochure Project」と同様、PowerPoint プレゼンテーションを用いての発表形式を踏襲。発表のジャッジも東京外国語大学メンター様が担当し、発表後は質疑応答を実施。

【生徒発表内容】

テーマ例は以下の通り。取り扱った Conflict は国内外の多岐にわたる。

- ・ロヒンギャ難民問題 ・東京オリンピックを開催するべきか
- ・日本国内の外国人労働者問題
- ・エジプトとエチオピアの、ナイル川の水をめぐる問題
- ・コロナ禍で経済と安全のどちらを優先するべきかという問題
- ・コンゴ共和国における紛争問題 ・少年兵に関する問題
- ・飲食店支援の在り方について

Conflicts プロジェクトにおいては、2学期終盤にかけて取り組んだ Follow-

up の学習成果からか、プレゼンテーションの仕方に顕著な上達が見られた。外大メンター様との質疑応答も、広島プロジェクトを凌駕するハイレベルなものも多く見られ、それに対して生徒もグループで一丸となって応答をしていた。

授業及びプレゼンテーションの様子



Conflicts のプレゼンテーションスライドの例

「ロヒンギャ難民」の問題に取り組んだグループの発表資料

Problems of Rohingya

-conflict between ethnic groups-

Team 2 Moeka Washino Eri Igashiki Ryoya
Kubo Ryusaku Bo Genki Kawamata Jin Tanaka

About Rohingya

- group of muslims
- In 1826, many Rohingya migrated to Rakhine
- In the pacific war, Rohingya fought against the buddhists
- In 1971, large number of refugees flooded in to Myanmar
- Now, Rohingya isn't recognized as citizens of **any** countries

The area Rohingya are living in Myanmar

What did the government of Myanmar do to solve the problem?

Myanmar → Bangladesh

700,000

Other countries' and regions' reflection to Rohingya

It is "ethnic cleansing"!!!

Oh, yes!!!

We don't think so...

How to solve Rohingya issue

UK and Japan should be responsible for Rohingya issue.

we should conduct international educational activities to make people aware of the current situation of the Rohingya.

Conclusion

Support

Support

4人のような扱い

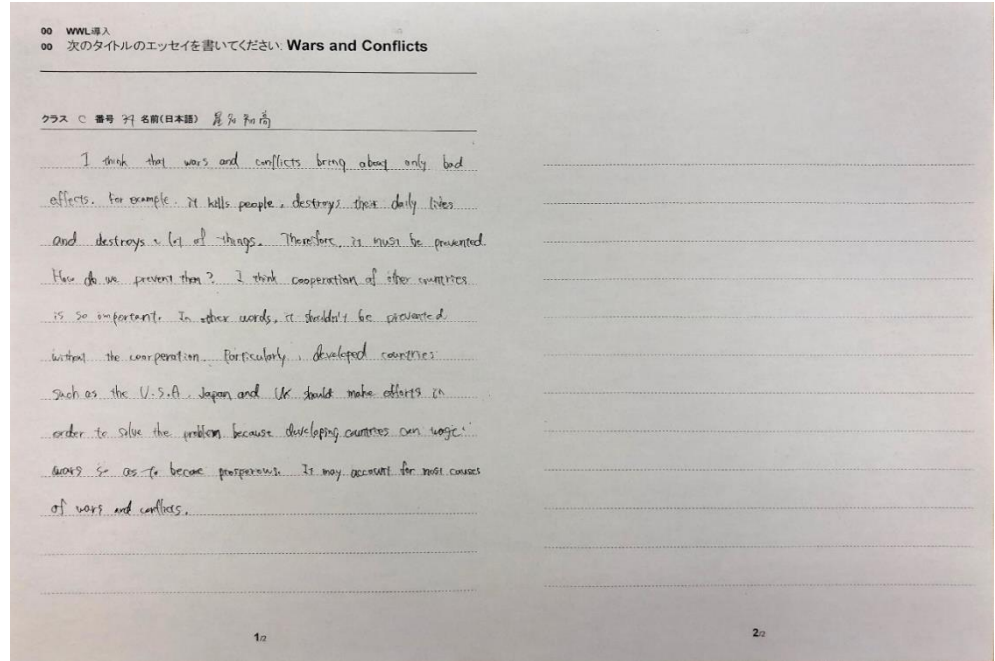
VOLUNTEER

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

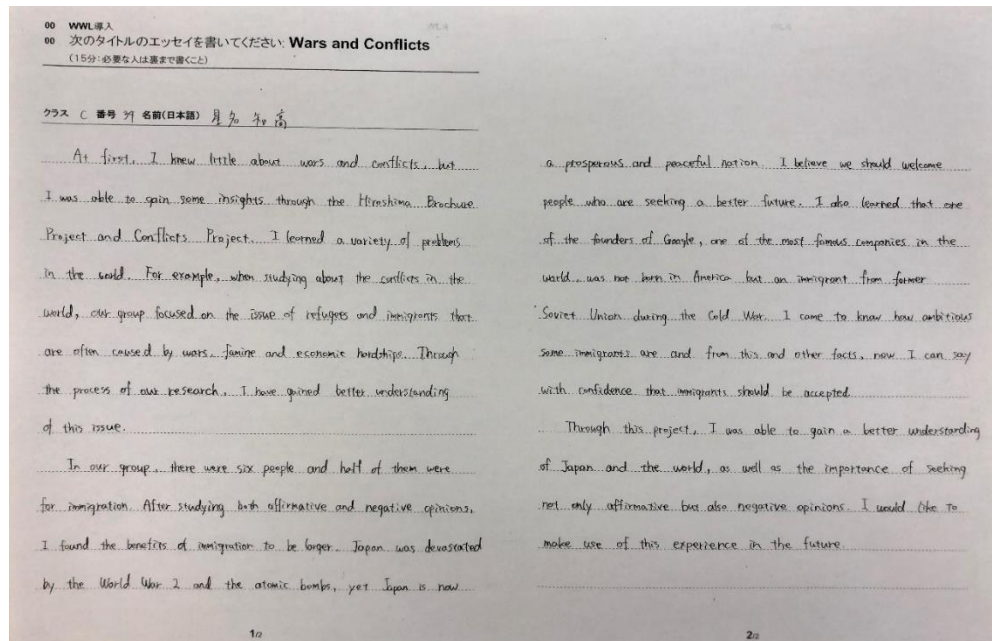
Wars and Conflicts Essay

- ・制限時間 15 分以内に各自 Wars and Conflicts という題で辞書などを使わずにエッセイを書く。
- ・4 月当初に同じ題で書いたエッセイと比較し、1 年間の成長を確認する。

① 高校 1 年最初の授業で書いた作文



② 高校 1 年最後の授業で書いた作文 (①と同一生徒)



(3) 英語科の取り組み：Social Justice

ア 学習指導計画

国際社会における諸課題は、歴史的・文化・地理的背景等、複雑な要因が絡み合って発生している。高校各科目での学びによる幅広い知識の深化と共に、教科を横断した知識をつなぐことで更にそれらの学びを深めた。

なお、コロナによる登校制限が1学期にあったことと、今年度より高2カリキュラムを変更して本活動が充当される時間帯を週3時間から2時間に減少させたことから、昨年度よりテーマを絞る中で、スピーキングを含めた英語の4技能をバランスよく伸ばさせながらテーマについて主体的に関わっていけるように、また過去年度の反省を受けて授業内容を精査し、授業設計の改変・精緻化を行った。

イ Poverty and Hunger（1学期後半：8時間）

グローバル化に伴う世界の状況を学び、世界が直面する様々な問題を人権という切り口から学ぶ。多くの問題にかかわる経済格差、貧困について、家庭科の授業と連携して、人権の中でも子どもの人権に焦点を当て、経済格差、教育格差、貧困など様々な要因が絡み合っている実情について理解を深め、世界にある様々な問題が自分たちの生活と密接に関わっていること、自分たちで主体的に関与していける問題であることを気づかせる。

(ア) Poverty and Hunger

以下の3つの素材を通じて、貧困・飢餓についての概略と基本的英語語彙を得ながら、英語の4技能をバランスよく習得していった。

1. リスニング&リーディング（テレビニュース映像）：

ニジェールの子供の貧困

2. リーディング：

Save the Children

（途上国の子供の貧困問題に取り組む非営利団体）

3. ライティング&ディスカッション：

一日\$1.25未満で生活する人々の、世界地域での割合分布（世界銀行データ）／日本国内の相対的な貧困層に関して議論

※教材：Global Issues Towards Peace（南雲堂）Unit 4

(イ) Coffee Chain Game

コーヒーについてのアクティブラーニングを通して、フェアトレードについて学ぶ授業である。

まず、コーヒーが生産されてから消費者に飲み物として届くまでの流通経路（サプライチェーン）を書いた紙を、正しい順番がわからないようにしてからグループに与え、順番を考えた。この活動で、コーヒーが生産されるまでにたくさんの過程があることを理解した。

次に、グループのメンバーを農家・輸入業者・加工業者・小売りなどの各セクターの役に割り当て、500円に想定されたインスタントコーヒーのビン(500g)1つについてそれぞれ1ビンあたりのどのくらいの利益が欲しいかを考え、自分の役の立場で希望する割り当て金額を決め、グル

ープ内で交渉、自分たちの取り分ができるだけ多く、しかし実際のトータルの価格は500円になるようにまとめていった。生徒は、最終的に決定した価格を黒板の表に書き、教員が実際の価格を発表し、その差に生徒は驚くことになった。

生徒はこの一連の活動から、不当搾取が行われる経緯や交渉における力関係について体験するとともに、価格決定過程において交渉力や発想力などを鍛えた。

- (ウ) Watching YouTube Videos: The Economics and Ethics of Coffee / Fairtrade
 実際にコーヒーを取り扱っている取次業者の声にも触れながら、フェアトレードという美名のもとに隠れている農家にはなかなか金が行かない状況や、農家側のコーヒーの質を向上させることによる経済的メリットなど、フェアトレードの現実について認識、考察した。

【動画画面キャプチャ例】

Average income of coffee farmer in Mexico



- (エ) Time used on an average weekday

発展途上国の子ども達の生活について知り、その原因を考える授業である。

まず生徒は、自分の11才と現在の1日の時間の使い方を、0:00-24:00の円グラフで想像する形で、軽く確認した。その後、4人のグループで、4種類の児童労働についての文章（エルサルバドル・インド・ドミニカ共和国・タイの11・13歳）を分担して読み、自分の担当文章について1人2分程度で英語により説明し、他の生徒は、聞きながらメモを取り、最初の24時間と比較した。その内容の重さから、授業が終わった後は、教室に暗雲が立ち込めたような雰囲気になったが、それだけ深刻な問題として、真摯にこの状況に立ち向かった様子を感じ取られた。

- ウ Water (1・2学期:12時間)

現在の世界の喫緊の課題である、「水」「エネルギー資源」を取り上げる。高校2年生は理科や社会で選択科目が増え、各生徒は家庭科、化学・生物・地学、地理・世界史等の授業を通じて、より専門的に、各授業で違っ

た角度で学習する。その様々な知識を総合することこそが地球社会が抱える問題を解決する糸口となることを気づかせる。

(ア) Drinking Water

以下の3つの素材を通じて、水問題についての概略と基本的英語語彙を得ながら、英語の4技能をバランスよく習得していった。

1. リスニング&リーディング (テレビニュース映像) : ガザ地区の下水と真水の現状
2. リーディング : 世界における真水を得る困難と、人口爆発状況における水の重要性
3. ライティング&ディスカッション : デンマーク・フィンランド・スイス・スペイン・メキシコ・韓国・日本の水道料金の比較 (OECD, “Water - The right price can encourage efficiency and investment” (2010)) と原因の考察

特に3においては、水資源が貴重なものと国民に感じさせるために国策として意図的に水道料金を高く設定しているなど国ごとに水に関する政策の考え方が異なる実態を認識したり、平均賃金を提示することで単に国ごとの経済力が数字に反映されているといったデータを解釈する上での批判的思考力も養成していった。

※教材 : Global Issues Towards Peace (南雲堂) Unit 3

(イ) Water Resources in Crisis in Five Minutes

水問題についての概説がまとまっている和文サイトの英訳 (機械翻訳をベースに教員が調整) を元に、どのような問題群が存在しているか、リーディングを通じて概略を確認した。章立ては次のとおり。

A. Water Scarcity

1. Status Quo
2. The Cause
3. Future Projection
4. Water Scarcity and Food Security

B. Clean Fresh Water

5. Water Supply & Purification Facilities
6. Ground Water Contamination

C. International/Transboundary Water-Related Problems

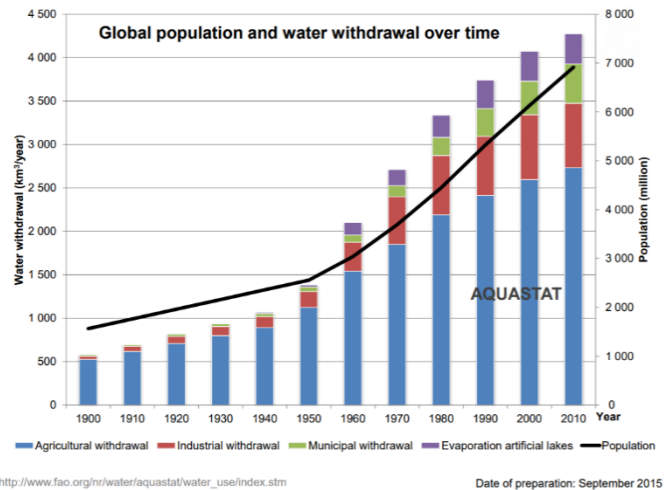
7. Conflicts over Water Resources
8. Virtual Water

【教材引用】

2. The Cause

The most significant factor is the rapid increase in the use of water to support our lifestyle. In particular, water consumption to increase food production has tripled over the past 50 years.

In addition, overall water demand is three times as high as it was 50 years ago due to industrialization and the material improvement of life in the developing world. Water consumption is increasing at twice the rate of population growth.



AQUASTAT - FAO's Information System on Water and Agriculture
http://www.fao.org/nr/water/aquastat/water_use/print1.stm
 (accessed on Oct 4, 2020)

(ウ) Presentation: Introducing Two Topics

(イ)の8つの話題の中から興味があるごとに4人のグループを作り、その話題について、他の生徒と共有したい、興味深い事実・統計に関する英語記事・動画等を2つ探してきて、3分互いに紹介をするプレゼンテーション活動を行った。扱う内容レベルが高かったため、習熟度上位クラスでは、グループで調べて作ったプレゼンテーションを、グループ以外のメンバーで作った「発表用グループ」のメンバーに紹介する形で3分話す形（ジグソー法）、習熟度下位クラスでは、グループ全員が必ず話をする形でクラスの前で発表する形というように、英語レベルに応じて適切な発表が出来るように工夫した。

【生徒発表原稿例】

Current status ~in the World~

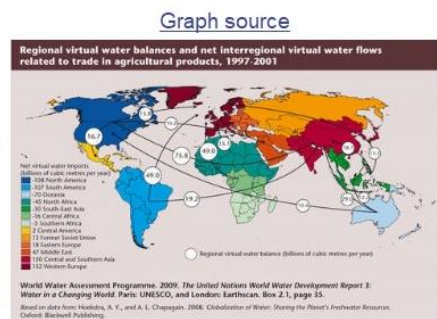
★ The flow of virtual water in the world's commodities accounts for about 40% of total water consumption.

★ About 80% of these virtual water streams are related to trade in agricultural products.

★ Meat production requires 8-10 times more water than grain production

Quote here for the current state of the world.

From developing countries ⇒⇒
 ⇒⇒ For China and Europe.



(上のスライドとは別の発表原稿)

The third cause comes from the change of our lifestyles into more modern ones.
 Water consumption has seen a sharp increase due to the rising demand for food and the industrialization of our economy.

As the population in the world steadily rises, food consumption also rapidly increases. Because water is necessary to grow crops, the withdrawal of water from lakes and rivers is becoming more extensive than ever. The global demand for water for agricultural purposes is actually estimated to rise a further 19 percent by 2050.

In addition to this, people are consuming food that requires particularly large amounts of water to produce. For example, according to the LA Times, the amount of water needed to produce a single hamburger is an astounding 660 gallons, or 2500 liters. Most of this water is used to produce beef, which needs 1799 gallons to produce a single pound of it.

Furthermore, industrialization and urbanization have grown the demand for industrial and domestic water tremendously. According to the high school times, the consumption of both will increase by 50 percent by 2025.

As you can see, from such political, environmental aspects, as well as from modernization, water around the world is being heavily contaminated and overused, making this an issue we must address immediately.

<https://www.wri.org/blog/2020/02/growth-domestic-water-use>

<https://www.theconsciouschallenge.org/ecologicalfootprintbibleoverview/water->

[food#:~:text=The%20water%20needed%20to%20produce,forbillion%20people%20projected%20in%202050.](https://www.theconsciouschallenge.org/ecologicalfootprintbibleoverview/water-food#:~:text=The%20water%20needed%20to%20produce,forbillion%20people%20projected%20in%202050.)

エ Energy (1・3学期:13時間)

(ア) Drinking Water

以下の3つの素材を通じて、エネルギー問題についての概略と基本的英語語彙を得ながら、英語の4技能をバランスよく習得していった。

1. リスニング&リーディング (テレビニュース映像): 地球温暖化の被害と対策の具体例
2. リーディング: 地球温暖化の概略/UNFCCC (機構に関する国際連合枠組条約)
3. ライティング&ディスカッション: 20世紀の世界の平均気温と、2001-10年の平均気温の比較データ (National Oceanic and Atmospheric Administration (2010); 2008年の0.49°Cを除いて0.5°C以上上回る) を見て、原因と自分たちに出来る対策を議論

※教材: Global Issues Towards Peace (南雲堂) Unit 2

(イ) Energy Mix: Reading (Definition) & Videos

- ・ Energy Mix (エネルギーミックス) の定義的説明のリーディング
- ・ 再生可能・不可能エネルギーの概説の YouTube ビデオのリスニング

(ウ) What is the best energy mix?

ドイツ・インド・中国・日本・アメリカ・ロシア・イラン・ブラジルの中から、グループごとに担当国を選び、2019年段階での各国のエネルギー源 (Statistical Review of World Energy (2020)) を提示した。そのうえで、「自分の担当国の2050年における理想的なエネルギー割合」をグループで考え、提言の形でクラス全体に発表した。

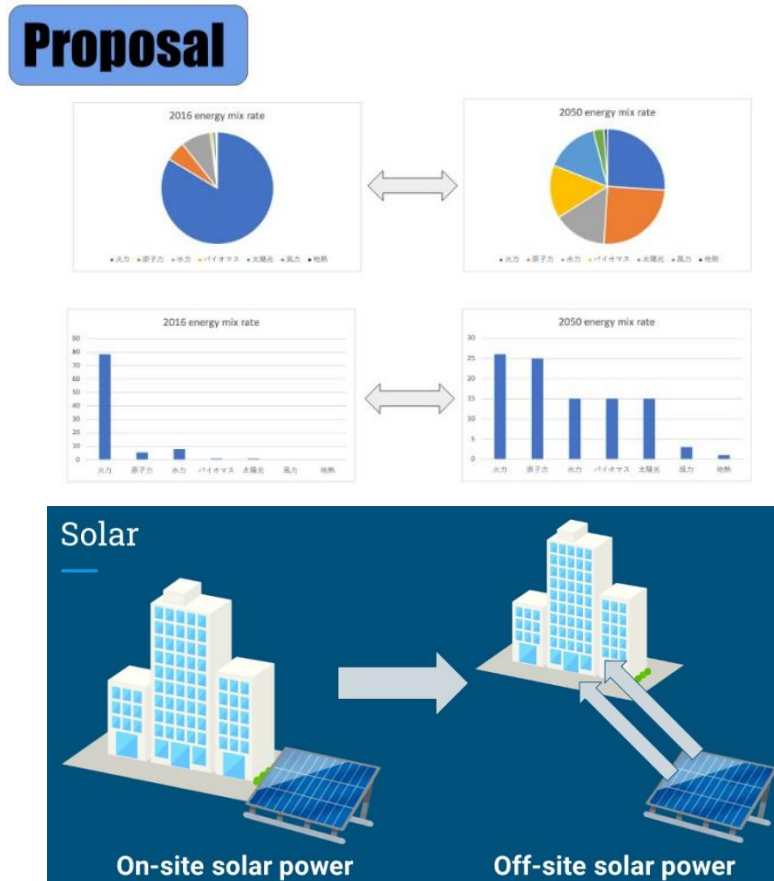
- ・ 事前の研究では、次のような要素を考慮するよう助言した。

現在のエネルギーミックスとその背景にある政策／地理（含む：利用可能な天然資源）・経済（産業）・政治（地政学）／将来の予測（経済発展・社会構造・推定エネルギー需要）

・また、発表の設計として、次の点を考慮するよう助言した。

その提言のエネルギー割合に向けてどのような過程を経て進めていくか／どのように地球環境危機への対応に貢献できるか／想定される欠点・障害／実行可能性

【生徒発表原稿例】



（上のスライドとは別の発表原稿）

We propose sugar cane power generation as the main source of electricity for Brazil in the next generation. There are three reasons for suggesting sugar cane power generation. The first is that it is eco-friendly. Unlike burning fossil fuels, the carbon dioxide emitted by burning sugar cane originally existed in the air, so the amount of carbon dioxide in the atmosphere does not increase. Second, sugar cane production is active in Brazil. Brazil has the highest sugarcane production in the world, and its vast land and climate are suitable for cultivation of it. Third, sugar cane has many uses. The sugar cane extract that is not used for power generation can be processed into sugar or bioethanol. We aim to make sugar cane power generation tenfold by 2050. Since the amount of sugar cane power generation is proportional to the area of sugar cane land, it is necessary to make the area of sugarcane cultivated land by 10 times. The area of agricultural unused land in Brazil is about 450 million ha, and the current sugar cane cultivation area is 8.6 million ha, it can

be said that the cultivated land is sufficient. The problem here is the shortage of workers in cultivated land, but the gross income from the expanded sugar cane cultivation is predicted to be about 400 million real which is comparable to the total gross income of the current major crops in Brazil. Therefore, the funds to hire labor are abundant.

(4) 家庭科の取り組み：子どもの権利

教科目標である「共に生き、共に支える社会の実現」について、保育領域の「子どもの権利と福祉」を通して授業を行った。

まず、乳幼児期の養育環境が心身の発達や人格形成に大きく影響を与えることを学習した上で、英語科と連携して子ども達が受けている様々な人権侵害の実情を知らせた。『児童の権利に関する条約』と共に「無戸籍児」「子ども貧困」「子ども兵」「児童労働」「児童婚」や「女子差別」等の資料を配布し説明した後、それぞれの問題の背景には多様な価値観や宗教・風習があることも確認した。

例年は、ここから各々が興味を持ったものについて調べ、それをもとにグループでディスカッションした後、グループ毎に周囲に発信したいことを1つ選びクラスで発表してきたが、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、1人ひとりが興味を持ったことを1つ調べて、感じたことをまとめることを夏休みの課題とし、学年で共有するため、2学期の最後に問題点や感想がしっかりと書かれているものを冊子にまとめて全員に配布した。

ア 学習の狙い

現在、世界（日本も含めて）で人権侵害を受けている子どもたちの様々な問題は、その国の宗教や習慣とも深く関わっているため、単純に善悪を決めるのではなく、その国や民族の価値観を認めた上で、何が問題でそのことから何を考え、どのような行動しようと思うかを個々に考えさせたい。また、同じような環境で学んできた同級生たちの考えも多様であることを知る機会にしたい。

イ 学習計画

①子ども達が健全に育つための環境を学ぶ。（4時間）

②子ども達が持っている権利を知る。

子ども達を取り巻く環境の問題点を探る。（2時間）

③夏休みの課題（課題プリント）

課題内容

乳幼児期の養育環境は、心身の発達や人格形成に大きな影響を与えます。しかし、子どもたちは自ら自分の養育環境を整える力は持っていません。そこで、子どもが生存と発達を保障され、不当な取り扱いから保護され、自分らしく生きる基本的人権を実現するために、1989年の国連総会において「児童の権利に関する条約（子どもの権利条約）」（教科書P56参照）が採択されました。これは、子ども自身の最善の利益を考慮して、親や社会が果たすべき義務を国際的に約束した画期的な内容の取り決めであり、日本は1994年にこの条約を批准しています。

課題の用紙に次にあげる子どもたちへの権利侵害問題について、6つの事例の中から1つを選び、キーワードの中の言葉を1つ以上使って実情と問題点を簡潔にまとめ、感想を書きなさい。なお、説明に使用したキーワードにはアンダーラインを引いて分かるようにすること。

事例： ・無戸籍児 ・子どもの貧困 ・児童労働

・子ども兵士 ・女子差別 ・児童婚

キーワード： ・生存権 ・発達権 ・教育

・遊び（遊ぶ） ・基本的な生活習慣

・社会的な生活習慣 ・劣悪な環境 ・悪循環

夏休みの課題 (生徒レポート)

「児童婚」について

事例	<p>児童婚 (18歳未満で結婚すること)</p>
実情	<p>世界全体で起きている問題だが、年々その数は減少傾向にあるものの、アフリカだけは年々増えてきている。 18歳前に結婚した女子は世界で推定6億5000万人いると言われる。今年年間1200万人は結婚している。世界全体の44%が南アジア、18%がサハラ以南のアフリカの女子。過去10年で見ると15%も減少、約2500万人の児童婚を防げた。 減少しているのは女性の就学率の上昇、児童婚の違法性とその弊害への認知が主な理由。減少してきているにもかかわらず20%は児童婚を強いられている。 児童婚の対策を何もしなければ2030年までに1億5000万人の女子が児童婚させられると推定されている。 アフリカの半数が18歳未満の結婚を容認する例外が所在する。</p>
問題点	<p>アフリカの児童婚の数が年々増加している</p> <p>経済的理由、構造的な理由、社会的要因など</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 貧困である、人身取引による女性の金品と交換、口利と共生活費を得ている (No.1要因) ② 結婚に対する教育の欠如、児童婚の慣習が根付いていないと認識が足りない ③ 古くからの慣習で18歳未満で結婚することによって前より元々限られている。 <p>女性に児童婚に得る利益の、教育を受けることで貧困の連鎖を断つことに繋がることを両親や地域の人に理解してもらう。(=悪循環を脱し、省思した生活環境を改善する)</p> <p>(アフリカで行われている支援)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・女性を学校へ通わせさせる ・家族への経済的支援 ・成人後の結婚で得られる利益への理解を深める ・児童婚禁止の法や政策の整備
感想	<p>日本に住んでいる自分にとっては本当に縁遠い話に思っていたけれど、世界でこうした問題が日常的に起きていること、苦しんでいる自分と同世代の女性に起きていることと共感と理解に気づくことも、こうした問題を解決へと導く第一歩に繋がるのだと思えた。</p> <p>簡単に解決できる話ではもちろんない、自分が直接的に苦しんでいる人への支援は限られているにせよ、一人一人の意識やこうした問題への危機感を持つことが大切なのではないかと思う。たとえ一人誰かの声は訴えられ、やむを得ない共感者を得、規模を拡大させることで国を動かす、世界を動かせるのだと思う。無知であることが実は最も残酷な行為ではないかと考えさせられる。</p>

(5) 中学2年生の取り組み：SDGsを理解しよう

ア 目的・意義

現在、グローバルな人材を育成する上での重要なキーワードとして、SDGsがある。中学2年という時期に、まず「SDGs」というキーワードを通して世の中を知る。さらに、知ることにとどまらず、行動するという体験することを目的とした。そのときに、できるだけ校外の団体と協力して行動するという目標を入れた。

各自が興味をもつゴールを選び、興味に応じた班で活動し、最終的に、ポスターセッションという形で活動報告をした。コロナ禍ということ、2度目の緊急事態宣言ということがあり、校外の団体との協力は難しい部分もあったが、その中でもできることにチャレンジすることができていた。これまで知らなかったこと、興味関心がわかなかったことにも関心を広げることができ、視野を広げることに役立った。今後の活動の幅を広げるきっかけになったと思う。

イ 活動の流れ

- ① 7月下旬に17のゴールの中からランダムに1つ割り振って、そのゴールについて調べてくるという課題を夏期の課題とした。
- ② 2学期の総合の授業で、同じゴールについて調べた生徒5・6人で班を作り、1枚にまとめる作業を行う。各ゴールを2班ずつ担当し、冊子の形でまとめた。完成した冊子を各自で読み、自分の興味関心が高いものを選び、興味関心に合わせた新しい班を結成した。
- ③ 9月下旬から、新しい班員とともに、「渋渋生にできるSDGs」「中学生にできるSDGs」「家庭でできるSDGs」のいずれかをテーマとして活動を開始した。
- ④ 11月7日には(株)キリンHDとシーセフ(NGO)の方に来ていただき、「企業として、NGOとしてのSDGsの活動」についての講演と質問会を開催した。
- ⑤ 3学期には、これまでの活動をまとめ、ポスターセッション形式での発表を行った。同時に、2分のPR動画の撮影もおこなった。

ポスターセッション風景



生徒作品：SDGs についてのまとめ

3 すべての人に健康と福祉を

【めざすこと】
あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を促進する

【行動指針】
妊産婦や乳幼児の健康、感染症の抑制、すべての人が医療保健サービスにアクセスできるようにする
世界では...

日本
・母子手帳
・母子健康手帳
・乳幼児健診
・妊婦健診
・産後ケア
・産後ケアセンター
・産後ケアセンター
・産後ケアセンター
・産後ケアセンター

5秒に7人の割合で死んでいる

【問題点】
1. 感染症
2. 妊産婦の健康
3. 乳幼児の健康
4. 産後ケア
5. 産後ケアセンター
6. 産後ケアセンター
7. 産後ケアセンター

【問題点】
・産後ケアセンターの不足
・産後ケアセンターの質の低下
・産後ケアセンターのアクセスの悪化
・産後ケアセンターの費用の高騰

36.5億人

What can we do for the earth?

2017年
出生 210億2000万
収入 → 210億4000万円
9000万足りません

7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに

2030年までに 安く安定している 持続可能なエネルギーを 全ての人に普及させる目標

GOALを推進する上での問題点

- 世界の多くの国々が化石燃料を消費している。
- 再生可能エネルギーのコストが高い。
- 再生可能エネルギーの発電は天候などに左右されやすい。(供給が安定しない)

自分の行動や思考でGOALにつながることを

- 電気・エアコンの節約
- 発展途上国への寄付
- 再生可能エネルギーを使うこと

国や企業などの具体的な活動

省エネ設計の住宅の普及
省エネ効果のある技術の導入
二酸化炭素を吸収する技術
太陽光発電設備の設計、施工

再生可能エネルギーを導入している企業への補助金
エネルギー事業について相談できるサイト
再生可能エネルギー事業の支援

5 ジェンダー平等を實現しよう

目指すこと
男女の性別の役割としてのジェンダー平等
全ての女性・女児が力を持つ

マークの意味
♀ = ♂ 男女平等

ジェンダー平等のための国 具体的な活動

<日本>
・候補者男女均等法
・女性の政治家への相談窓口

<海外>
・女性の国会議員の人数を男女均等割合として、女性議員全体の半分に増やす

企業 具体的な活動

<インド>
・女性の管理職の割合を上げる(28%)

<ナグランド>
・企業内保育施設を開設

<日本企業>
・国際女性の日(8月)にメッセージ発信

自分たちができること

- ・自分自身もジェンダー平等を推進する。
- ・声をあげ他人をハラスメントする
- ・固執的な考えに縛られない

Q ジェンダーギャップ指数って?
A. 国連の持続可能な開発目標(SDGs)の1つであるジェンダー平等の達成度を測る指標です。健康の4分野(4項目)で男女間の格差を測ります。

順位	国名	スコア	国名	スコア
1	アイスランド	94	フランス	88
2	フィンランド	93	韓国	87
3	スウェーデン	92	中国	86
4	アイスランド	91	韓国	85
5	アイスランド	90	日本	84

【問題点】
・自分が母親に育てられた記憶や、アニメなどで父親は働き、母親は育児をしている場面を見ることが少なくなっている。
・1日産後ケアセンターで産後ケアセンターと見分けがつかない。
・男性のランドセルの色の違いなど、偏見がまだまだある。

ジェンダー平等は、SDGsの中でも最大の課題である。皆さん是非ジェンダー平等について考えてください。

10 人や国の不平等をなくそう

概要
国や性別、年齢、人種、障害の有無などから起る不平等を解消し、すべての人々のエンパワーメント(力を与えること)を促進することで、国や人種を問わず関係なくすべての人が平等になるようにする目標。

ロゴの意味
中央に「10」があり、四方に矢印が伸びていて、国などに関係なく人々が平等になれるようにするという意味がある。

この目標の具体的な活動例

フェアトレード
発展途上国の商品を通じて経済を改善することで、発展途上国の生産者や労働者の生活改善を目的とする活動の仕組み。
主な製品は、コーヒー、カカオ、電気など。
フェアトレードの基準を満たした商品には「フェアトレード認証ラベル」が付く。
例えば、コーヒーでは、右の図のようになる。

障害者雇用促進
日本では、障害者雇用促進法という法律が定められ、目的は、障害者の雇用の促進、障害者の雇用の安定など。これでは、障害者の雇用も促されている。これにより、多様な人材が活躍できる。

今、私たちができそうなこと

- ・障害者を支援する。障害に誇り
- ・「アフリカは貧しい」などの固定観念を持たず、
- ・事故に気づいて、正しい知識を持つ。
- ・フェアトレードの商品を購入する
- ・見守りに参加する。

12 つくる責任 つかう責任

目指すこと
持続可能な生産と消費のパターンを確保する

現状
大量のプラスチック資源を使い、世界の製品生産消費は増加傾向にある。資源の枯渇、気候変動、海洋汚染、廃棄物の増加が問題となっている。

課題
プラスチックの削減、リサイクルの促進、資源の効率的な利用、製品のライフサイクルの延長。

行動指針
主に
・天然資源の持続可能な管理と効率的な利用
・包装廃棄物の削減
・化学物質の適切な取扱い
・3R推進
・有害廃棄物の処理の工夫

具体的な活動
① 個人企業
・余分なものを購入しない
・リサイクル・エコフレンドリーな製品を選択する
・多量包装の製品の削減
・リサイクル製品を買い、製品の品質を高め、製品の寿命を延ばす
② 企業
・製品のライフサイクル全体を通じて、環境負荷を減らす
・多量包装の削減
・リサイクル製品を買い、製品の品質を高め、製品の寿命を延ばす
・積極的に呼びかけを行う
・リサイクル製品の導入を促す

「つくる責任、つかう責任」に伴う課題
・発展途上国は、これまで以上に、生産と消費による環境負荷を増やしている
・「つくる責任、つかう責任」を遂行する上で大きな障壁になるのは、課題が多い

14 海の豊かさを守ろう

概要
海洋と沿岸の生態系を持続可能な形で管理し、海洋汚染の影響を軽減する。

現状
海洋と沿岸の生態系は、気候変動、海洋汚染、過度の漁獲、気候変動の影響を受けている。2025年までに25%の海洋生物が絶滅する恐れがある。2030年までに25%の海洋生物が絶滅する恐れがある。

プラスチックごみ削減の取り組み事例
「Next Wave」
プラスチックごみの削減への取り組み
・プラスチックごみの削減
・リデュース
・リユース
・リサイクル
・株式会社イノベーション
・株式会社イノベーション

私たちにできること
・プラスチックごみを減らす
・プラスチックごみを適切に処理する
・プラスチックごみをリサイクルする
・プラスチックごみを燃焼する
・プラスチックごみを埋め立てる
・プラスチックごみを燃焼する
・プラスチックごみを埋め立てる

ポスターセッション用ポスター

紙資源で海を守ろう!

30 班
前田、相田、三上、山崎、橋本、林

2025年までに世界中の海洋汚染を防止し、大幅に削減
2020年までに、海洋及び沿岸の生態系を保護管理し、回復させる

プラスチックの影響
年間800万トンの海洋ごみが発生!
(= 300トン×2700隻ある!!)
プラスチック製レジ袋の分解に100年以上
絶滅危惧種を含む700種の生物が傷ついたり、死んだりしている。
※ 世界の92%が海洋プラスチックの原因
日本の近海には世界平均×2.7倍のマイクロプラスチックがある!

紙資源の功果
・自然資源枯渇の抑制
・地球温暖化の防止
・水質汚染の防止
・企業のイメージ向上
・おしなはれイノベーション

スターバックスの取り組み
・紙ストローの提供
2020年1月から開始
年間約2億本のプラスチックストロー削減!!
・紙コップの提供
2020年11月から開始
年間約6100万杯分のプラスチックコップ削減!!
・FSC認証紙または再生紙を使用

私たちに出来ること、まとめ
・マイパッケージ紙の容器などを使用

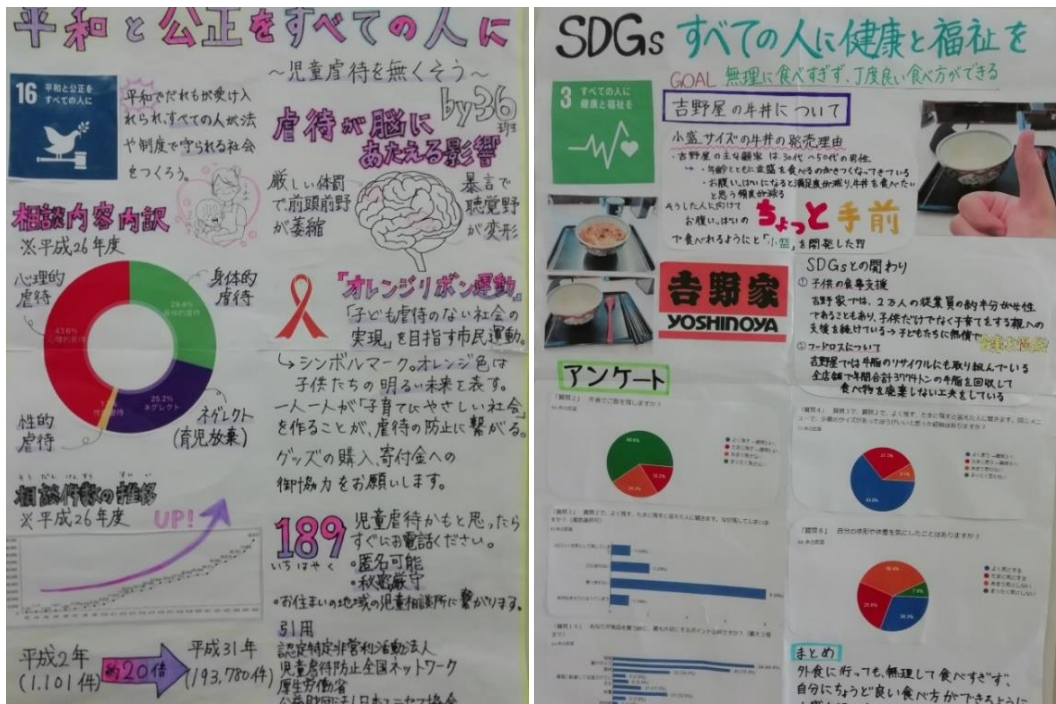
働きたいも経済成長も

私たちは特に働きたいについて考えました。

【働きたいの定義】
働くことによる得られる経済的価値、働くことの意義、働くことによる成長、働くことによる健康、働くことによる社会貢献、働くことによる自己実現、働くことによる生活の向上、働くことによる社会の発展、働くことによる未来の希望、働くことによる夢の実現、働くことによる理想の実現、働くことによる人生の充実、働くことによる人生の意味、働くことによる人生の価値、働くことによる人生の誇り、働くことによる人生の尊厳、働くことによる人生の自由、働くことによる人生の責任、働くことによる人生の義務、働くことによる人生の権利、働くことによる人生の自由、働くことによる人生の責任、働くことによる人生の義務、働くことによる人生の権利

【KIRIN】
学校に導入されたKIRINグループの方のお話を伺いました。
KIRINグループでは、2019年の「働き方改革」を機に働く「場所」と「時間」の自由度を上げることを目的としました。
例) プラスチックストローの禁止
・現在、紙ストローに切り替えています。
・紙ストローの導入により、プラスチックストローの削減に貢献しています。

【サイボウズ】
働きたいのある会社として有名なのサイボウズ株式会社にメールで問い合わせました。
サイボウズでは長期的な視点で働き方改革による働き方の改善を進めています。
働き方改革は、働き手にとってだけでなく、企業にとってもメリットがあります。
100人から10000人の働き方改革が、企業にとっても大きなメリットがあります。
働き方改革は、働き手にとってだけでなく、企業にとってもメリットがあります。
働き方改革は、働き手にとってだけでなく、企業にとってもメリットがあります。



ウ 振り返り

プログラム終了後、生徒アンケートを実施し、振り返りを行った。

SDGsに関する興味関心が高まったことがうかがわれ、高校での学びにつながることを期待される。一方、コロナ禍ということがあり、企業などの外部との連携が取りにくい状況であった。ZOOMなどを活用しインタビューをしている班もあったが、満足がいく活動までいけない生徒が半数以上になってしまった。中学2年生という、活動のスタート段階と考えると、満足しすぎないこともポジティブにとらえたい。

一部の生徒は、個別のボランティアや校外での活動、PR動画の発信を計画しており、今後の活動が楽しみである。

(6) 高校2年生の取り組み : Service Learning

内容とねらい：上記の学習と並行し、1年間かけて、授業で学んだ **Global Issues** の解決につながる活動を各人で計画、実行する。地球規模の大きな問題の解決には個々で行っている活動や一人ひとりの発想を総合させることが重要となるので、そうした活動を通して得た考えを他者に発信することでこのプロジェクトは完了する。この経験を通して問題意識を高め、将来、各分野でリーダー的な立場になった時に解決したいという気持ちを育てる。今年度は、コロナの影響で実施に至らなかった活動もあるが、活動予定の取り組みを他の生徒と共有することで完了とした。

【生徒のレポート】

Activity Participated as a facilitator in MG7
Date 9/6
Place Online

1 Why I chose this activity

This event is held annually by the Shibushibu debate club and this year I decided to participate as a facilitator since I joined as a normal participant the previous year. Last year, we discussed plastic waste and how we as students can help to make a difference. I enjoyed discussing with students from different schools and therefore I decided to help out as a facilitator this year.

2 What I did

Last summer, I joined as a facilitator in an event called MG7, where we invited around 40 people to join us in a discussion about internet defamation. This event is held annually by the Shibushibu debate club at school. However, because of the pandemic this year, the event was held over ZOOM. As a result, it enabled us to discuss with students from the USA and China as well as Japan. As the facilitator, I led the discussion at the start to be the ice-breaker and later continued to pose questions to help the discussion move forward.

My team first decided to look at the problem in the status quo by listing famous examples of how people have been harmed through internet defamation. We came to the conclusion that anonymity that has the benefit of allowing discourse can also become the reason why people willingly leave hate comments. The vague law on internet defamation also hinders people from recognizing the seriousness of this issue.

We came up with two ways to help solve this problem. Firstly, nothing can be solved without raising awareness of the problem. Therefore, my group decided that classes about online defamation should be mandatory for those from elementary school to high school. As anyone could become a victim or a perpetrator, educating children from a young age and sharing information on ways to protect yourself online is essential. Secondly, our group decided that taking away anonymity from the internet will take away the unique part of internet discussions. Instead, companies should take away the system of allowing people to delete their comments or tweets. Hateful comments will remain as empirical evidence in court and people will become more likely to think twice before writing hate comments.

3 What I thought/found / How I felt

The internet is useful in the way that it holds a place for everyone to voice their opinions equally and has spurred movements such as the BLM and the #Metoo movement. However, it has also become a place for people to shame others and has even driven people to suicide.

Through this event, the biggest question I faced was where to draw the line when it comes to freedom of expression and hate comments. However, to create a healthy place for discourse, I came to the conclusion that it is justifiable to restrict some parts of freedom of speech. This experience allowed me to see this problem of internet defamation from various aspects as I discussed with people from different backgrounds. For example, it was very interesting to hear a girl from China state that Japanese people care a lot more about their privacy compared to the people she knew. This allowed my group to realize that creating a system online where people are forced to use their real name would most likely be met with more criticism than it would in her country. All in all, this discussion was a great experience and it reminded me of the importance of always reaching out to find people who have different views from myself.

Activity Child poverty
Date Aug 18, 2020
Place Children's cafeteria in Shiki City, Saitama

Why I chose this activity

I have a strong interest in poverty because when I went to Vietnam, I saw a family who lived in a small and tattered house. The house didn't have a door, window, toilet, and bath. I was very shocked. Then, I came to think that I want to contribute to poor people all over the world in various ways. Firstly, I decided to volunteer in Japan. Surprisingly, 1 out of 7 children suffers from poverty in Japan. Therefore, I volunteered at the children's cafeteria.

What I did

I volunteered at a children's cafeteria named "Shiki no mainichi kodomosyokudou" in Shiki City from 3 PM to 7 PM on August 18th. First I received some explanation about attitude. For example, "Please treat the children who come here as brightly as possible" and "Don't ask in detail about the circumstances of their house". First, I cleaned the tools and desks used by the children. Then, I brought the food for distribution to the cafeteria. There was one man beside me as a volunteer. He seemed to volunteer there for many years. Next, the meals were arranged on the desk and prepared for immediate distribution. At 5 pm, the children came with their parents or alone. They were all acquainted with the dining room manager. They talked intimately and I felt that the dining room not only served food but also was a comfortable place for everyone. I also greeted them cheerfully and provided them with food. A total of 12 groups of customers came on that day. According to the dining room manager, before the spread of Covid-19, more people would come as usual.

What I thought/found / How I felt

I was looking forward to joining this volunteer activity before carrying it out. However, when I was actually participating, it was so difficult to communicate with children because I didn't know what I should talk about. Therefore, I learned that volunteering needs communication ability. Then, what I felt most strongly through this volunteer was that material support was not the only thing needed to solve the poverty problem. In other words, people need not only material support but also mental care. Children whose parents both work might be eating alone every day, but in the children's cafeteria, they can eat, study, and play with friends. I think the people who gathered at the children's cafeteria wanted food and interaction with others. In short, the children's cafeteria is a place that gives us the satisfaction that we can't buy with money.

In addition, there were impressive words that the dining room manager said to me during that volunteer meeting. The phrase is, "The most important thing for volunteers is to continue." I think this phrase means any support is meaningless unless it continues. I thought that solving the poverty problem would require long-term support, no matter how trivial. Also, I am very sorry I could only go to volunteer once.

Due to the spread of Covid-19, many people are unemployed in Japan. And Covid-19 brings bad effects on the world. Poor people are hard to eat every day. Moreover, it is becoming difficult to receive medical services. Poverty makes their life hard and their minds broken. It may also threaten human rights. Whether we live in a remote location or we are a student, I hope we have the means to help them. Finally, I have learned that there is a lot of knowledge and feeling that can be gained by experience. From now on, I would like to not only say that "I want to solve the poverty problem", but also actually go to the field and experience a lot.

Activity Supporting a medical facility activity
Date In 2020 (I don't know the exact date and time because of COVID-19.)
Place Japan Heart Children's Medical Center (Kandal, Cambodia)

1

Why I was going to choose this activity

I found a notice about supporting a medical facility activity planned by Japan Heart, which is an international medical organization, and I felt it must be a great experience for me. I have been interested in medicine, and I also like activities that bring me into contact with people. I thought that by learning about the medical situation in other countries, especially developing countries, I might be able to understand what I should do in Japan.

2

What I would have done

There are two main activities that I would have done. The first is to do with the environment of the medical center, such as cleaning and taking care of children. Students aren't allowed to do any medical treatment, so we would have been assigned to clean the center at least. Also, teenagers like me would need to be there for children because they would be anxious before their surgery. The other has to do with the medical environment. I would have taken a tour of the operating room and have cleaned medical equipment. I was going to be taught how to put on a gown and how to wash scissors, as much as I could.

3

What I would have thought/found / How I would have felt

During the pre-training, I studied the history, language, and culture of Cambodia. I learned that Cambodia lost a large number of doctors under the Pol Pot regime, and even today, the medical system is still not in place, so I wanted to help in any way I could. So, actually, I'm very sorry and frustrated that I can't go there because of COVID-19. If I had done the activity, I could have learned a lot. Through interacting with local people and doing the best I can do there, I would have felt that I have to turn my eyes to other countries and need to find something I should do from now on.

(7) 特別講座：気候正義

岩波書店のご厚意により、京都大学大学院地球環境学堂教授 宇佐美誠氏をお招きし、2020年9月30日、10月7日の2回にわたって「気候正義～新しい社会のあり方について考える～」と題して、講座を開いた。高校2年生から中学3年生までの64名（他、卒業生1名）が参加して行われた。なお、この過程は岩波ブックレット『気候崩壊 次世代とともに考える』として出版された。

ア 事前勉強会（9月25日）

高校2年生の有志が、中学3年生の参加者を集めて事前勉強会を自主的に開催した。気候変動の基礎的な知識・データ、京都議定書やパリ協定などの国際的な取



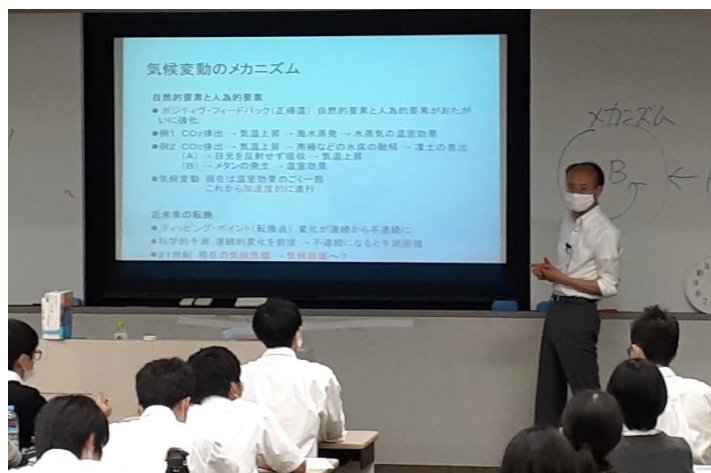
り組みの経過、「気候正義」という新たな倫理と equality（平等）・equity（公正）の観念の差異についての確認をした。

イ 宇佐美教授の講義

①第1回講義

（9月30日）

気候変動は、人類の健康や安全に深刻な悪影響を与えつつあるが、日本では、この問題への関心は高いとは



言えず、不正確な認識も多い。まずは基礎的な知識と事実を確認することが本時の目的であった。

気候変動については、国際社会は、改善に向けて取り組んできたが、現実には悪化しつづけてきたという特徴を持つ。

地球の平均気温は、産業革命前（1850～1900年の平均気温）と比べて、すでに1.2℃も上昇し、異常気象と呼ばれるものの3分の2が気候変動の影響

がある、とされる。人為的な原因によっておこる気温上昇が、自然的要素を刺激して、さらなる気候変動を出来するという現実と、それによって併発される健康被害と経済への悪影響について論じられた。また日本の中の気候変動否定論について言及し、その認知的な誤りと倫理的誤りが指摘された。

②第2回講義（10月7日）

気候変動が提起している倫理的な問題に目を向けるのが本時の目的であった。温室効果ガスを大量に排出してきた先進国と気候変動の悪影響がいつそう深刻に表れる途上国との関係、また現代に生きる我々と長期的な悪影響から逃れられない未来の人々との関係が、この問題を考察する根底にあり、それらの関係がいかにあるべきなのかについて論じられた。続いて産業革命以来の大量排出に、誰がどんな理由で責任を負うべきかについても確認された。この際に気候変動に対して捉えられてきた対策（緩和策・適応策）についても指摘され、気候変動に関する社会的な施策を、倫理的に意味づける作業（「気候正義」）が展開された。最後に若者世代の活動に対する期待が表明された。

ウ フィードバックミーティング

11月20日から断続的に都合のいい日集まり、90分ほどで講義を振り返った。一つのグループは5人以内、感想から提言まで自由



由に討議し、その結果を文章にまとめてもらった。以下はその結果の一部である。

【5班】

私たちの班では、先進国と途上国での排出量分配の正義について考えました。そもそも気候正義という学問を作り、温暖化防止を訴えているのは過去の産業革命時代から温室効果ガスを排出し続けてきた先進国です。それゆえ今から発展したい途上国とは視点が合わない。そこでまず「途上国を全て先進国にしてから対策を始めたら途上国先進国の考えの相違は生まれない」という意見が出ました。他にも現実的な取り組みを考えていた頃、現状として先進

国は途上国に支援をしているもの実際はその国に合った、いわば望まれた支援をできていないのではと考えました。かつて先進国に植民地化された国が独立してからの自治に苦戦している様に、先進国の視点からみた『適切な支援』というものはその国の持続的な発展を妨げ得るものです。そのため、まず途上国に住む一人一人が自国で感じている課題や意見を自由に発信できる場を、SNS を用いてつくり、意見を国の上の立場の人たちに届け、それを国際的な場で発信することが必要だと考えました。今も国際的な議場でも先進国のような発言力の強い国とそうでない国、途上国の中でも政治的に不安定な国がありますが、国力や立場にとらわれない SNS を用いれば先進国と途上国の考えの相違がわかりどのように排出量の分配をすればよいのかの助けとなると考えました。

【7班】

フィードバックミーティングでは、気候変動解決に向けた具体的な案や、懸念点などが活発に議論された。まず初めに問題になったのが、倫理的に解決すればいいのか技術的に解決すればいいのかということである。そこで話題になったのは人間の性格である。人間は欲望と倫理観のどちらを重視するのか。…人間は欲望によって成り立っていて、将来の世代のことまで考えられないから倫理的な解決は難しいのではないかという意見が大多数で、「それが出来ないから人間なんだよね」という発言もあった。そこで問題になったのが、どのように利益を出しながら環境問題を解決するのかである。これについては様々な意見が飛び交い、娯楽の方向で利益を出すという奇想天外な意見や、教育から変えてしまおうという意見も出された。その他にも、環境問題に興味のある人たちが、簡単に行動に移せる道のりの整備をすることにより、もっと環境問題に対する熱が上がるのではないかという意見も出た。発展途上国としてはどうすべきなのかについても、効果的利他主義の観点も踏まえながら数分ではあったが、議論がされた。

【9班】

「漠然とした危機感はあるけれど、解決策となると難しい」

ミーティングのはじめ、そんな声が上がった。複雑で大規模な問題である故に、自分自身が行動で何かを変えられるとは思えない。具体的に想像できないから後回しになる。議論の中で日本の受けた被害は実際どのくらいか調

べたところ、2018年は世界で一番甚大だったという調査結果が出てきた。しかし私たちは全員それを知らず、猛暑や豪雨など、日本への影響と気候変動とが結びついていないことに気づかされた。

…次に、危機感を持ったら行動できる環境が必要だという意見が出された。…実現するうえでは、教育とメディアが要になるという見解で一致した。一人の生徒が通っていた海外の学校では環境問題が必修科目だったそうで、日本の義務教育での必修化を検討した。そこで一案として、切迫した現状を効果的に伝えるため、気候変動が引き起こす災害のシミュレーション映像をみせることが挙げられた。加えて、自分自身の行動によって問題を改善できるという実感の大切さが話題になった。ここで挙げられたのは、以前実際に社会に働きかけたことが実現して嬉しかった、という体験談である。これをもとに、学校教育の中でそうした成功体験を積む機会を提供する必要性を論じた。

しかし将来世代の教育にのみ集中して世代交代を待つには時間がない。そこで、全世代に影響を及ぼすものとしてメディアが言及された。講義で紹介された、環境保護の時流に乗ったビジネスの成功例に強い興味を持った生徒がおり、そういったロールモデルの提示はよい作用を生みそうだ。…また講義での『火事はすでに起きている』という言葉が心に残っているという生徒もいた。メディアには、印象的かつ具体的な情報を的確に伝えていくことが求められる。

続いて、個人だけでなく企業に環境を意識した活動を動機付ける方法を思索した。一企業だけでなく産業そのものの構造を大幅に転換することや、経済的なメリットを提示することが挙げられた。後者について、ESG投資の話題からSDGs推進企業への印象として聞かれた意見に「実際何をしているのかわからない、疑念を抱く」というものがある。対して実際の取り組みを知った企業、ハイブリッド車のマークをつけた運送トラックには好印象を抱くという意見もあった。したがって、企業は環境保護の活動を分かりやすく宣伝することで更なる利益に得られるのではないかという考えに至った。

なお、そうして自発的に促すだけでなく、外からの強制力によって企業や個人の変革を助けるという主張があった。行政が環境に負荷の大きい活動にペナルティを設けるといった例が挙げられたが、強制的な活動は自発的な活動よりも続かないことが問題である。…つまり重心をボランティアあるいは私

的な活動に置き、それを公的な力でサポートするということだ。但し、いかなる場合でも、権力を以て人々に影響を与えるならば必ず正義論が関わってくることを忘れてはならない。

自分の毎日の行動が CO2 排出にどのくらいつながっているのかをみる英語のアプリがあるとのこと。その日本語バージョンがつかれないだろうか？という話も出た。

エ 総括

今回の講義の意義は、気候問題という自然科学的な視点だけでなく、正義という倫理的な視点を含む総合的な問題へと、われわれをいざなったという点だ。したがって、われわれが作りあげてきた経済を中心とする世界の構造と、欲望を含むわれわれ人間の本質に肉薄している。この意味で、2022年から設置される「公共」という科目の意図、つまり「人間と社会の在り方についての見方・考え方を働かせ、現代の諸課題を追究したり解決したりする活動を通して、広い視野に立ち、グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の有為な形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す」ことを、まさに体現していたと自負している。

方法としては、講義の形式はとりながらも、従来型の大人が子どもたちに説く形ではなく、ともに考えていくスタイルであり、質疑応答では、ボイテルスバッハ＝コンセンサス（圧倒の禁止の原則、論争性の原則、生徒志向の原則）を採用していた。さらに講義後にフィードバックミーティングを設定したことで、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）を得ることができた。

際だった特徴としては、その論理性が挙げられる。人々の感情を受け止めつつも、グローバルな問題に関して、立場を超えて連帯するためには、論理性が何よりも大切となるからだ。また自然科学の知見の拡大に対して、専門家ならぬ「公民」が、どのような判断を下すのかが、民主政治の基本となるがゆえに重要であり、従来の文系と理系の隔てられた壁の中で、あるいは専門家同士のテクニカルタームの中で、埋没しない開かれた議論が要請される点も考察できた。

フィードバックミーティングに立ち会って興味深かったのは、行動についての考え方だった。SNSなどによって、世代間に分断されることなく、また

一時の流行ではなく、世界的課題を共有し行動しつづける姿勢は問われて続けていこう。

このような姿勢が生まれるためには、政府やメディア、NPOなどの活動も必要だが、教育現場の責務はあらためて重いと痛感せざるを得ない。授業や行事などで「種まき」と同時に良き土壌になるためには「地ならし」も大切である。問題意識の共有を前提として、討議・発信・行動が促される、具体的方法としては、スピーチやディベート、グループワーク、ボランティアが「習慣」として行われる環境が、整備される必要があるだろう。本校においては、今回の講義に先立って、自主的に事前学習会を開催したことは、その成果であったと思われる。

3 Research and Analysis Project

中学高校の6年間における学びのプロセスを構築し、それぞれの段階で、問いをたて、それに基づいた研究を重ね、発表する機会を設ける。高校では、2～3年にわたる長期な研究に取り組み、フィールドワーク、アンケート、実験を行い、論文を作成する。作成過程においては、問いの立て方、調査の方法を幅広く学び、また卒業生の支援をうける機会を設け、スキルを身につけることができた。優秀論文発表会を実施し、下級生とともに、自分たちの学びを共有した。

(対象：中学3年生 高校1・2・3年生)

国語科の取り組み：ディベート

公民科の取り組み：問いをたてる

中学3年生の取り組み：奈良研修プロジェクト

自調自考論文：Write for the future

(1) 国語科の取り組み：中学国語科ディベート

本校の国語科では、中学の授業を「現代文」「古典」「表現」（週2時間ずつ）に分けて実施している。表現の授業では、意見文やスピーチ、プレゼンテーションやディスカッションといった表現活動全般を取り上げている。その中でディベートは毎年実施しているが、言語力、論理性の育成のみならず、論題の背景にある問題を分析し、解決に向けて必要なことを調査し、論証するといった総合的な力を高めることができる。本稿では3年間の集大成として、中学3年のディベートについて述べる。

ディベートの論題は大まかにいって「事実論題」・「価値論題」・「政策論題」の三つに分けることができるが、授業で扱うのは政策論題が多い。政策論題は長年にわたり議論されてきたもの以外にも、私たちの社会が抱える今日的な課題も含まれるため、授業で政策論題として取り上げることで、現代の私たちが抱えている問題に目を向け、未来を考える契機とすることが可能になる。実際の授業では以下のような流れで進めていく。

ア 学習のねらい

- ◆ 私たちの社会が抱える課題や、その背景に潜む問題に目を向け、現状を正しく分析する。
- ◆ 論題の実施に伴うメリット・デメリットを考え、その発生過程、重要性を明らかにする。
- ◆ 主張を支える客観的根拠を考え、必要なデータを揃えて論理的に筋の通った論を構築する。
- ◆ 自分の考えを聞き取りやすい速さ・大きさと伝え、相手の発言を正確に理解する。

イ 授業プラン

〈第一次〉問題分析の観点・意見構築のための視点を確認する（2時間）

中1・2の授業でもディベートを取り上げているので、これまでの内容を確認しながら「どのように問題を考えていくのか」、「論を構築するために何が必要か」等を再認識する。

先述の通り、政策論題になりうるものは、今の私たちが抱えている問題が背景にある。何が問題なのか、どのような状態が私たちの理想なのかを確認した上で、その解決のために必要なこと、逆に政策を導入することで生じるマイナス面に目を向けていく。以下は授業内で扱うプリントの一部を抜粋したものである。

○論題からどのように考えていくか	
<p>【問題解決型議論】 →問題の深刻さを訴える (現状では危険だから変えなければならない!)</p> <p>問題点の指摘(深刻さ) ↓ 原因は何か ↓ 解決策(実行可能な、現実的な政策か) ↓ 問題を解決したことによるメリットは、現状改革により生じたデメリットを上回るか?</p>	<p>【比較優位型議論】 →新たな政策によるメリットの大きさを訴える (現状は問題ないが、変えると大きなメリットが!)</p> <p>改革案の提示 ↓ メリットの大きさ(意義) ↓ メリットが現状では得られない ↓ メリットは改革案によって得られる</p>

議論には二つの方向性(プラン導入によって問題を解決する/現状では問題ないがプランを導入することで大きなメリットが生まれる)があるので、それぞれの観点から論題を捉える。次に、議論をする上で必要な定義づけをし、プランについて考える。そこまで出来たら、実際にプラン導入によるメリット・デメリットを考えていくことになるが、最初の段階では立場を決めず、それぞれの立場から論題を分析するようにしている。そうすることで、論題を自分とは異なる視点で捉えることができ、多角的な分析や意見構築が可能になる。

〈第二次〉論題決定・論題分析(4～5時間)

ディベートのチームと対戦日程、各グループが担当する論題を決定する。論題は以下の一覧から選ぶ、もしくは自分たちで政策論題を考えるということにした。

ディベート論題候補一覧

- * 日本の大学は9月入学制へ移行するべきである。
- * 日本国は原則全ての職種において外国人労働者を認めるべきである。
- * 日本政府は、全ての男性の正規労働者に、その子どものために育児休業を取得することを義務付けるべきである。
- * 日本は死刑制度を廃止するべきである。
- * 日本は積極的安楽死を認めるべきである。
- * 日本は飲食店における喫煙を全面的に禁止するべきである。
- * 日本は東京オリンピック・パラリンピックを中止すべきである。
- * 日本は刑事事件の被害者の実名報道を禁止するべきである。
- * 日本は消費税を20パーセントにするべきである。
- * 日本は自動車運転免許の年齢上限を定めるべきである。
- * 日本は裁判員制度を廃止するべきである。
- * 日本は捕鯨を禁止すべきである。
- * 日本は地方公共団体の多選を禁止するべきである。

論題の決定後は、〈第一次〉で確認した流れに沿って論題を分析し、メリット・デメリットを考え、それを支える根拠や重要性についてまとめていく。

〈第三次〉ディベートの実践・振り返り（5時間）

肯定・否定側に分かれてディベートをし、その日の担当以外の人たちはジャッジとして参加する。ジャッジは話し手の印象に左右されることなく、反論の有無と妥当性を検証し、現状を変えるに値するメリットが存在するのかを判断するようにする。

4時間で全グループがディベートを行い、最後の1時間は振り返りをする。自身やチームの取り組みを客観的に振り返り、良かった点・改善すべき点を明らかにすることで、今後の糧とする。また、他者の意見・考えを聴くことで、自身の考えを深める。言語技術の優劣やディベートの勝敗に拘泥することなく、その先（メリット、デメリットを踏まえた上で、私たちはどうしていくべきなのか）に目を向けるようにしたい。

〈発展〉ディベート大会（行事）

クラスのディベートを通して代表2名を決める。各クラスの代表者が集まってチームを作り、本校の「中学国語ディベート大会」（学校行事）に参加する。

なお、過去3年の論題は以下の通りである。

- ・ 日本の学校は9月入学制に移行するべきである
- ・ 2030年までに一部の企業の管理職のうち女性の割合を30%以上にするべきである
- ・ 日本は外国人材の受け入れを拡大すべきである

これらの問題の背景には解決すべき問題や、プラン導入による利点がある。クラス代表による優れた議論として範を示すことはもちろんだが、適切な分析・議論を展開することで、背景に存在する問題・利点を学校全体で共有することが可能になる。

今年度は9月入学制だったが、これはコロナ禍において実際に政府内で議論されたものである。現状を変えるに至らずということで否定側が不利な側面もあったが、プラン導入によるメリット・デメリットを多角的に分析し、私たちの社会について深く考えることができていた。

ウ 実践を通しての振り返り

ディベートは、自分たちの立場の優位性を客観的資料・証拠に基づきながら議論することであり、その議論がディベートの第一義であることは論を俟たない。ただ、その枠組みを超えた、私たちの社会はどのような問題を抱えているのか、その解決のためには何が必要なのか、様々な立場を包括したうえでどのような社会を目指していくのかといった、課題発見・問題解決の視点が重要である。ディベートで身につけた問題分析の観点、議論の手法は、私たちの社会・未来を考えていくための武器となりうる。授業を通して、論拠を伴った議論の構築、自分の考えを適切に伝える言語技術の習得に加え、社

会が抱える問題を明らかにし、解決策を考えていく姿勢を養うことが肝要である。

【生徒の反応】

先述の通り、ディベートの終了後にプリントを使って全生徒が振り返りをした。その中で、「今回のディベート全体を通じて、これはいいと思ったこと、印象に残ったことを具体的に示しつつ、自分の学んだことを総合的にまとめましょう」という項目を設定した。そこで書かれたものとして、ディベートの進め方やチームワークの重要性など、様々な内容があったが、以下のような感想を書いた生徒もいた。

生徒の感想より

定義と相手の主張を比較して矛盾を見つけることが大切だと思った。プランを実行することによって生じるメリットとデメリットの重大さを比較して主張したら、より勝ちやすくなるだろう。(中略)あと、気になったことはオリンピックの熱中症の話だ。なぜ中止にするという議論をするのかを考えたときに、明らかにコロナによる経済関連が話題となるため、ふさわしくないと思った。議論する背景には現状の問題があるので、それを考えるとよいと思った。

ディベートは、社会でとても役に立つと思った。冷静な議論を行うことで、よりよい方向を目指していくというのは、これからもやっていくことだと思うので、その感性を今回のディベートで少しは磨けたかなと思う。(後略)これは生徒の振り返りの一部ではあるが、議論の手法や考え方に加え、問題の背景や実社会に目を向けることができた好例である。授業を通じて、こういった力を含めた総合的な力を継続して高めていきたい。

(2) 公民科の取り組み：未来を考える特別授業

高校1年現代社会の授業の取り組みと並行して、日本経済新聞社と連携し希望者を対象とするワークショップに取り組んだ。一つは「問いをデザイン」すること。新聞記者の方の「問い」を立てることの意義や、批判的に考えるプロセスを共有した。もう一つは日本経済新聞の高校生向け特別版の編集者との企画から、紙面で紹介されていたユニリーバ社に協力いただいた「ほしい未来を考える」機会を設けた。どちらも、日本経済新聞社のwebページ上で記事として詳しく紹介されている。

ア 問いのデザイン 「答える力」から「問う力」へ（高校1年生希望者 参加40名）

「問いのデザイン for School」問いへのJourney～1人で行くか、みんなで行くか

<日経記者より渋渋のみなさんへのメッセージ>

初めまして！僕の仕事は「問う」ことです。ホームレスにも社長にも、警察官にも裏稼業の人にも、様々な国籍の人々にも、ありとあらゆる人に質問をしてきました。いや、質問しかしてきませんでした。今回、皆さんの前でお話&ワークショップの機会を先生方にいただきましたが、一番伝えたいことは、こちら。「子どものように問いまくろう」です。問いに正しい、正しくないはありません。でも実は「良い問い」というのは存在します。良い問いは、多くの人が答えたくなる問いです。とてもシンプル。でも結構奥が深いです。まずは自分のリミッターを外してたくさん問いを出す練習をしてみましょう。「1人で問う」と「みんなで問う」ことを通じて、良い問いについて一緒に考えたいと思います。

<当日の進行>

9月28日（月）15時15分に1年D組に集合⇒15時30分～17時30分頃

i：自己紹介、アイスブレイク

ii：問いについてのレクチャー

iii：問いのブレスト

iv：ふりかえり

2つのワークショップに共通するのは、生徒自身が主体的に取り組む姿勢が必要不可欠であり、自分の意見を主張することが目的であり正解を求めるものではないことであった。生徒は外部の方から、積極的な取り組みを求める働き掛けもあり、自分の考えをはっきりと言うことがスムーズにできた。コロナ禍の影響もあり、外部での活動が制限される中でワークショップに取り組めたことに喜びを感じられていた。



問いのコツ教えます
学校って何？を探究する出張授業

渋谷教育学園渋谷中学高等学校での出張授業の様子

「生徒が『良い問い』を立てられるようになるには、どうしたらいいでしょう」。学生に役立つサイトをめざすU22に最近、学校の先生からこんな相談が寄せられるようになった。探究学習や調べ学習など、生徒がみ



ずから課題を見つけて掘り下げるカリキュラムの広がりがあるようだ。問いを立てるのが仕事である新聞社の記者として、何かヒントを提供できるかもしれない。こうした思いから、U22は「問いの道場 for school」を開講。学校現場への出張授業を実施した。

「問いの道場 for school」は9月末に渋谷教育学園渋谷中学高等学校（東京都渋谷区）の高校1年の生徒約40人に対面で、10月下旬に自由学園（東京都東久留米市）の中1～高3の約40人にオンラインで実施した。今後も同様の取り組みを展開していく予定。まずはウォーミングアップとして、「問い」をたくさん出す練習。いのししが街中に出没して暴れているという設定で架空の記者発表資料を用意し、模擬記者会見を開いた。「けが人は？」「いのししの大きさは？」など、基本的な情報を確認するための問いから、「なぜ市街地にいのししが現れたのか」「今後の対策は」「過去にも同様の被害はあったのか」といった原因を追究するものや比較を伴うものなど、あつという間に多様な問いが集まった。

模擬会見の前に、問いのタイプを説明した。英語の疑問詞の頭文字を取って「5W1H」というが、問いは2種類に分けられる。「When（いつ）Where（どこ）Who（だれ）」の確認系と、「What（なに）How（どのように）Why（なぜ）」の探究系だ。このポイントを生徒らに意識してもらうことで、抜けもれなく問いを立てる練習になる。場が暖まったところで、本題に移った。

今回は両校とも、「学校」をテーマにした。学校から連想することから、問いのかたちで生徒らに付箋やノートにどんどん書きだしてもらった。ハル・グレガーセン著「問いこそが答えだ！ 正しく問う力が仕事と人生の視界を開く」（光文社）に書かれた手法なども参考にした。あつまった問いの例「なぜ学校では鉛筆を使うのか」「なぜ教室の窓に網

戸がないのか」「友人は多い方がいいのか」「すべての学びは先生から教えてもらうものなのか」「なぜ学校で女子はスカートなのか」「なぜ教壇があるのか」「なぜ小学校が6年、中学が3年、高校が3年という分け方なのか」5分程度の中に20個の問いを1人で出せた生徒もいた。実際の取材でも、たくさんの問いをつくっておくことで、テーマに広がりを持たせることができる。次は3人ほどのグループになってもらった。それぞれの生徒が出した問いの中から、「これをもっと深めてみたい」という問いを1つだけ選んでもらう。数十個の問いの中からたった1つを選ぶのは、ハードな作業だ。あえて1つに絞るのは、良い問いとは何かを生徒らに考えてもらうためだ。なにが良い問いなのかについては、様々な考え方があがるが、ここでは「良い問い」の定義を「みんな（＝多くの人）が考えたい問い」としておいた。自分ひとりだけの問題意識はもちろん大切。ただ、グループの中で話し合い、メンバーから「一緒にこれを深掘りしたい」と共感を集めるような問いは、良い問いである可能性が高い。

ワークはさらに続く。「良い問い」を1つ選んだら、それに対してWhy（なぜそう思ったのか？なぜそれが大事だと思ったのか？）を5回繰り返して、問いを[ブラッシュアップ](#)していく。

■問いが深まる過程を楽しむ [問いから発見に至るプロセスを楽しむ](#)

厳密にWhyに答える形になっていなかったり、5回繰り返すのが難しいといった声も生徒からあがった。大切なのは、表面的な形式ではなく、問いがどんどん深まっていく過程で学校に対する見方が



新しくなっていくこと。問いから発見へのプロセスの体験だ。

それぞれの学校のグループワークの一例を見てみよう。〈渋谷教育学園のグループワークの一例〉「どうして学校には昼寝の時間がないのか？」why→眠くなる欲求にはあがえないから why→結果的に授業を聞けなくて非効率 why→時間をもたない why→せっかくハイレベルな授業を受けられるのに why→自分の意思に反して学びたいことが学べないから 「そんなに授業中、寝ているの？（笑）」と先生方からさかさツッコミが入ったが、「昼寝」という意外なテーマを考えた女子生徒は大真面目で、「時間や場所にとられる対面授業って非効率な面がある気がする」と話した。[コロナ禍](#)でオンラインなど新しい授業の形がでてきて、学校での時間の使い方に疑問を持つようになったという。

<自由学園のグループワークの一例> 「なぜ学校では年齢で区切られるのか」 why→好きなタイミングで学校に入ってもいいと思うから why→みんなが同じように成長するわけじゃないから why→年齢でわけなくてもお互いを高め合えるから why→同じ年齢だと共通点が多いのかもしれない why→（年齢が混ざってれば）いろいろな価値観を知れていいことがあるかもしれない 学校では同じ学年の生徒らで過ごすことが多いが、その「常識」に素朴な疑問をぶつけている。

こうした問いをきっかけに、「学校がない時代はどうしていたのか」「日本の生徒は学校に何を求めているのだろう」など、様々な角度から考えを巡らせていた。各グループの「問い」と「発見」には、ある傾向があった。はじめの問いの段階では、「なぜテストがあるのか?」「なぜ受けられる科目は決まっているのか?」など、学校について日々不満に思っていることが目立った。しかし、問いを[ブラッシュアップ](#)した後の発見は、「学校は幸せを求めるところ」「芸術は人生を豊かにするもの」など、ポジティブな表現に変わっているものが多かった。今回の取り組みに参加した渋谷教育学園には、全生徒が自分なりの問いを持って論文を書くという独特のカリキュラムがある。社会科教諭の大貫礼史さんは「社会がどんどん変化するなかで、世の中で一般的に言われている常識に疑問を持つ力はいつそう重要になる」と指摘。「知識と問う力の両方がそろふことで、生徒たちは世の中の問題を自分ごととして考えることができるようになるはずだ」と話した。自由学園も今年度から探究学習を授業科目として設定した。生徒が自分で興味のあるテーマを定めるという。自由学園副学園長・最高学部（大学部）特任教授の成田喜一郎さんは「学園もいままさに、様々な改革の最中。（問いの道場の中で出た）生徒らの問いや発見からヒントをもらうことができた」と感想を述べた。[学習指導要領](#)の改訂によって、高等学校の「総合的な学習の時間」が2022年度から「総合的な探究の時間」に変わる。「学習」ではなく、あえて「探究」という言葉が使われたのは、複雑化する社会において、生徒による主体的な課題設定が求められるようになるからだ。問う力が今後さらに重要になるのは間違いなさそうだ。

イ ほしい未来をつくろう (中学2年～高校1年 希望者 80名参加)
 11月26日(木) 15時15分～17時 Zoomを利用したオンライン・グループ・ワークショップ



事前の行ったアンケートから、自分が興味のあるテーマごとにグループをつくり、企業からのミッションにプレゼンテーションで答えるワークショップを実施した。

学年を超えたグループの中で、真摯に議論を行い、自分たちの未来について深く考える機会となった。

その様子は、日経 HR web ページに掲載された。

【日経 HR web ページより一部抜粋】

渋谷教育学園渋谷中学高等学校×ユニリーバ

中高生が「ほしい未来」について考えた

SDGs×教育 [キャリア教育特別授業](#) 2020.12.15

企業や大学、自治体が取り組む国連の「持続可能な開発目標 (SDGs)」は教育現場にも浸透しています。学校教育に SDGs を取り入れた事例を紹介する「SDGs×教育」。2 回目は、渋谷教育学園渋谷中学高等学校の特別授業「ほしい未来をつくろう (特別協力: ユニリーバ)」です。SDGs への取り組みに力を入れるユニリーバと中高生と一緒に「ほしい未来」について考えました。

SDGs への取り組みは 140 年前から

2020 年 11 月 26 日、放課後に開催された特別授業には、中学 2 年～高校 2 年合わせ

て約 70 人の生徒が集まりました。特別授業の話を生から聞き、自ら手を上げた中高生



たちです。SDGsの17目標の中から関心のある目標別にグループに分かれ、企業から出された課題にグループで取り組む1時間半です。

特別授業はユニリーバ社のプレゼンテーションから始まりました。ユニリーバ社は世界最大級の消費財メーカーとして「ラックス」「ダヴ」「リプトン」などのブランドで知られ、約190カ国で毎日25億人が同社の製品を使用しています。



ユニリーバ社は1884年に高品質で低価格の石鹸を発売したのが始まりです。この石鹸は、英国に手洗い文化を根付かせ、清潔を暮らしの"あたりまえ"にしていきました。約140年前からすでにSDGsの考えの根本であるサステナブル（持続可能性）を企業経営に取り入れていたのです。

2010年には「ユニリーバ・サステナブル・リビング・プラン」を導入しました。「10億人以上のすこやかな暮らしに貢献」「製品ライフサイクルからの環境負荷を1/2に」「数百万人の経済発展を支援」の3つがプランの柱です。



それぞれの柱について、ビジネス成長とサステナビリティを両立する具体的な戦略と数値目標を策定し、SDGsが世に出る5年も前に発表しました。

「この経験からユニリーバの当時のグローバルCEOが国連に招聘（しょうへい）され、SDGsの草案作成にも携わりました」とアシスタントコミュニケーションマネジャーの新名（しんみょう）司さんは胸を張ります。「このプランの下、サステナビリティを戦略の中核に組み込んでいるブランドは、その他のブランドに比べて77%速く成長しました。サステナビリティに本業として取り組むことは企業の成長を促し、価値を高めるのです」

中高生の視点×ビジネスの視点

ユニリーバ社のプレゼン後はグループディスカッションです。ユニリーバからの課題は「ほしい未来をつくらう」。「気候変動」「ごみ問題」「ジェンダー平等」など



の関心のあるテーマごとに11チームに分かれ、高校生をリーダーに中学生と学年混合チームで課題に挑みます。各チームにはユニリーバ社員や渋谷教育学園の先生、日経HR社員がファシリテーターとして参加し、「ほしい未来」をつくるために話し合う生徒たちをサポートしました。

気候変動やごみ問題のチームでは、「森林破壊につながるような商品は買わないようにしている」「シンガポールには廃棄物を適切に処理する人工島がある」などの意見がありました。エシカル消費（倫理的消費）経験や海外の最新事例をあげるなど、日頃から環境問題への関心が高いことがうかがえました。

ジェンダー平等のチームでは、「女子はリボンやスカート、男子はネクタイやパンツと決まっているけど、着たいものを選べるようにしても良いのではないか」と自分たちの制服に言及していました。「吹奏楽部の男子はいつも重たい楽器を運んでいる」といった声も。男性だから、女性だからという決めつけ、ステレオタイプに対する違和感を口にする生徒など、日頃の学校生活で感じるジェンダー観に疑問を抱いている意見が多くありました。

議論のあとは各チーム2分のプレゼンタイムです。SDGsをキーワードに「いまの生活が未来にどう関わっているのか」「ほしい未来をつくるために日々できることは何か」について思いを共有しました。この特別授業の発起人、渋谷教育学園の真仁田智先生、筒井優希先生は「本校では、中学の総合学習の時間で「SDGs」を学んでいます。総合学習で得た知識を先進的な企業とのディスカッションを通じて、「実践できる」ように考えてほしいと特別授業の狙いを語ります。その狙い通り、ユニリーバ社員からビジネス視点のアドバイスを受けた生徒たちの発表は、「中高生の視点×ビジネス視点」の新しいアイデアに溢れていました。

『未来を知る最良の方法は、未来を創ることだ』というピーター・ドラッカーの言葉があります。先が見えにくい世界だからこそ、未来は自分たちの手で変えられます。そのことに気づき、変化を起こしていただけることを応援しています」（新名さん）叶えたい未来を想像し、アクションを起こす重要性を生徒たちは感じたことでしょう。今回の特別授業はSDGsの中でも環境問題への関心が高い生徒が多いと思いきや、ジェンダー論に興味・関心が高い生徒も多く、多様な視点から議論が進みました。中にはプラスチックを減らすために活動する学生団体を立ち上げたメンバーもいて、イベント終了後にも自分たちの活動を熱く語ってくれました。中学2年生はこのまま年度末まで総合的な学習の時間にSDGs研究、実践を続けると言います。今回の体験を通じてビジネス視点をもった生徒たちの研究報告が楽しみです。

(3) 中学3年生の取り組み：奈良研修 プロジェクト

ア 前提

(ア) 本校の奈良研修

本校では中学3年時の9月に3泊4日の「奈良研修」を実施している。奈良は日本文化の「起源」にあたる地であり、そこを研修で訪れることは、本校では、校是である「自調自考」の力を伸ばす重要な機会として受け止められている。行動班は生徒自身の興味関心に基づいて編成され、班でのテーマを選定し、行程表を策定して研修に臨む。現地ではインタビューをベースにテーマを探究して、事後学習でこれを班としては論文、個人としては紀行文にまとめる。

(イ) 「なら歴史芸術文化村」

「なら歴史芸術文化村」(以下、「文化村」)は、歴史芸術文化活動の拠点として、令和4年(2022年)の開村を目指し、奈良県が天理市に整備している文化施設である。「文化村」は、奈良の歴史文化や芸術文化を「知る・学ぶ・楽しむ」ことを通じ、「本物にふれる」ことで「新たな視点・感性」が生まれる場を提供することを、そのコンセプトとする。日本で初めてとなる文化財4分野(仏像等彫刻、絵画・書跡等、歴史的建造物、考古遺物)の修復作業現場の通年公開や国内外から招いたアーティストの制作活動の公開、未就学児を対象としたフリーアートプログラムなどを展開する。また、国土交通省に重点「道の駅」として、農産物直売所や産直レストラン、伝統工芸品ショップなど、観光、産業等の分野と連携する。いずれにしろ、この施設を核に様々な取り組みが広がっていくよう企画を作成している最中である。



(ウ) 中学3年生の奈良研修

従来から、奈良市観光協会には研修の際には多大なる協力を仰いでいたが、今回、「文化村」の準備組織である「なら歴史芸術文化村整備推進室」より本校に対して、常設イベントを提案してほしいとの依頼があった。月刊「教育旅行」(2020年5月)に掲載された本校の「奈良研修」の取り組みを読んで、とのことであった。

そこで、本校としては、奈良研修の成果をまとめて「整備推進室」にイベントの提案を行うことを決定し、その準備に入った。しかしながら、緊急事態宣言の2度にわたる発出から、現地での研修の目途は立っていないが、高校1年次も引き続き取り組むことになっている。

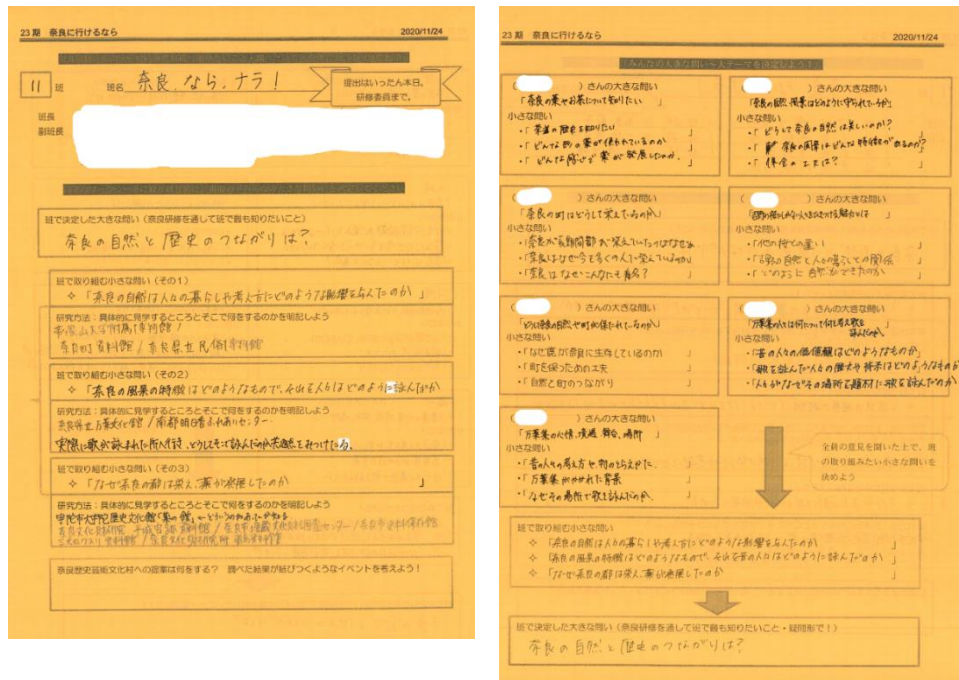
イ 「奈良に行けたなら」 具体的取り組み

(ア) 「個人テーマ検討シート」・「行程表」の作成

奈良に研修に行って体験してみたいことを考える。行程表を作成するにあたっては、最終的にはイベントの提案に結びつけると言うこともあり、季節・移動時間の考慮は行わず、想像も交えて自由におこなった。

(イ) 「班紹介シート」

(ア) によって編成された班の中で、個人のテーマと班のテーマを決定する。



(ウ) 「イベント企画提案用紙」の作成…現在はこの段階を実施中である。

① みんなが宿題に書いた好きなイベントをまとめてみよう

…歴史や芸術、文化に関係なくてもゲーム一場面でもいいから、とにかくたくさん考えてみよう。すごい、びっくり、感動した、大好き、という心が動くものについて挙げていこう。

② みんなが感動するイベントの共通要素に分解しよう

…お客さんである自分がすごいな、びっくり、感動した、大好きと心が動いた共通点を探りましょう。自分という人間がどこでそのイベントに惹かれるのか、自分という人間が分かってくるかも？！

※この「提案用紙」作成の主眼は、②の共通要素に分解することにある。ソニーの商品開発の成功例（トランジスタラジオ・ウォークマン・ハンディーカム）と失敗例（スマートフォンの開発への遅れ）を指摘した。

③ 班で決定した大きな問い（奈良研修を通して班で最も知りたいこと・テーマ）

④ なら歴史芸術文化村への提案は何をする？

…②の要素を③の中に組み入れていくと、見えてくるものがあるはず。お客さんが望む「心が動くイベント」をいくつか考えてみよう。

⑤ なら歴史芸術文化村への提案はどのようなものなのか？

…④であげた提案を絞っていこう。②「感動するイベントの共通要素」を意識しつつ考えていこう。キャッチフレーズを使って明確化していこう

⑥ この企画のターゲットは誰か？

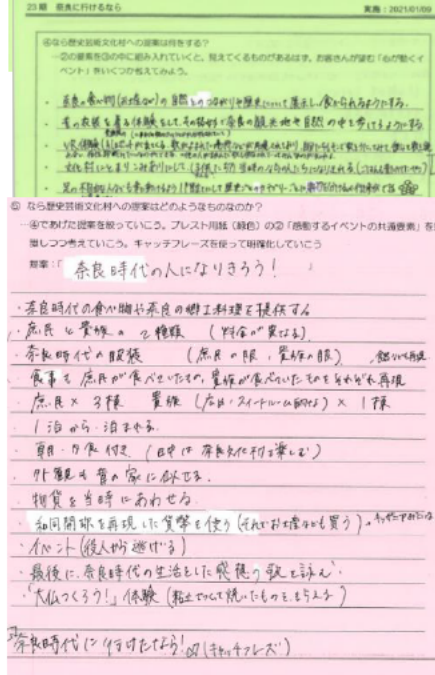
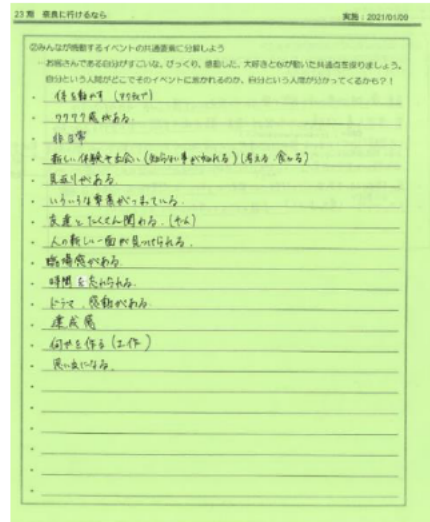
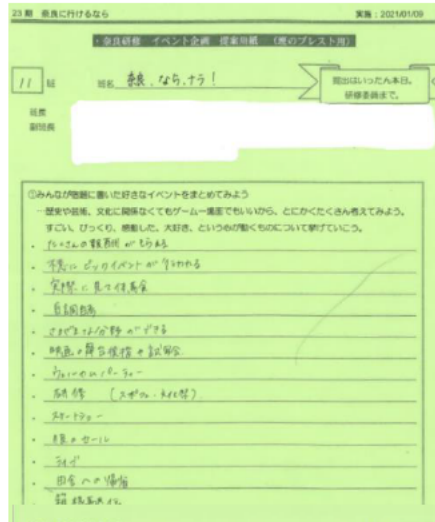
…誰がどのようなメリットを受けるのかを考えよう。

⑦ 提案を実現するために、どのようなことをするか？

…自分たちの提案を実現するために何をやるのか、できるだけくわしく書き出していこう。また、実現の障害になりそうなことも考えてみよう。

⑧ この企画が実現すると、奈良はどのようになるか？

…スケールを大きくとって考えてみよう。



(4) 自調自考論文 : Write for the Future

グローバルイシューや地球社会への課題に関して学ぶとともに、これまでに培った知識や経験をもとにテーマを設定し論文を作成する。また、校内・校外での発表する機会を設け、学校全体として取り組む意識を高める。本校では、総合的な学習の時間などを使い、全生徒が高校1年からおよそ2年半をかけて論文の作成に取り組んでいる。生徒が各自でテーマを設定し、調査・研究を行い、学術論文にまとめる。

ア 目的・意義

本校の教育目標の一つである「自調自考」、つまり自ら調べ自ら考える、自らを知る活動の集大成として、また、探究学習活動を通じて、問題意識を持つ姿勢の醸成、問題発見・解決能力の飛躍につなげる。

この活動を行うことで、自分の興味・関心のある領域について深く学ぶことになり、その過程で、関連する他の領域についても相当量の学びを得る。それが、自分自身に対する理解を深め、生徒一人ひとりの将来の進路を選択する際のきっかけや判断材料になることが期待される。

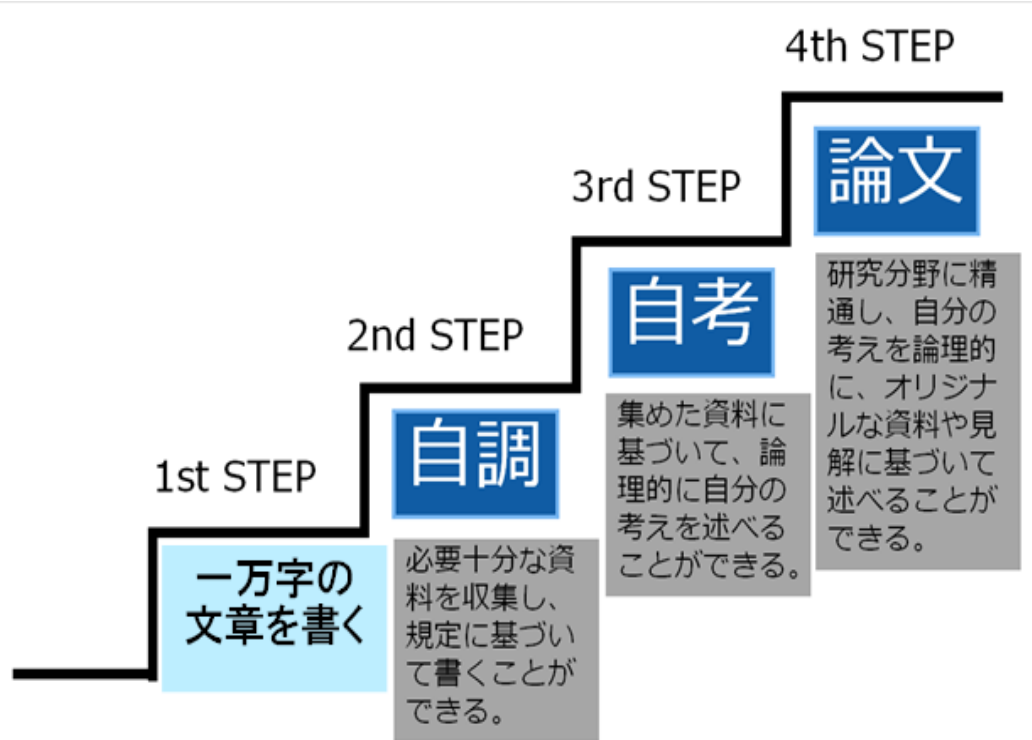
イ 活動の狙い

- ・ 情報リテラシーの向上
- ・ 論理的思考力・表現力の向上
- ・ 学問的手法の習得
- ・ 達成感を得る

ウ 執筆カレンダー

(例年の場合。なお、令和2年度は一斉休校によるスケジュール変更あり)

高1	
5月	全体説明会/テーマを掘り下げのためのグループワーク
6月	卒業生研究者講演会「研究について」
7~8月	仮テーマ決め
9~10月	アドバイザー面談
11月	所属ゼミ決定/ゼミ中間発表(第1回)
12月	先行研究の分析
1月	ゼミ中間発表(第2回)
2月	高2優秀論文発表会に参加
3月	論文構成のデザイン/ライティングセンター(卒業生による論文執筆指導)開設(第1回)
高2	
4月	ライティングセンター開設(第2回)
6月	ゼミ中間発表(第3回)/ライティングセンター開設(第3回)
7月	論文提出(第一稿)
10月	ライティングセンター開設(第4回)
11月	論文提出(完成稿)/ゼミ最終発表
2月	優秀作品発表会/論文要旨完成
高3	
1学期	学園祭論文展示準備
9月	学園祭にて論文展示



Write for the Future で生徒が取り上げた事例

社会課題に関するもの

- 「在留外国人の医療情報ネットワークの構築」(資料参照)
- 「持続可能な在宅介護を行うための改善方法」
- 「免許返納制度と交通事故件数の関係」

国際関係に関するもの




「日韓関係改善のための日本の高校生の行動」

平和・紛争に関するもの

「NGO 設立・維持の成功の鍵」

Who's Who 【面談アドバイザーを探すために生徒に提示する資料 (抜粋)】

Who's Who 【面談アドバイザーを探すために生徒に提示する資料 (抜粋)】

氏名	② 研究・専門	③ 学問的な関心	④ いま研究をされるなら	⑤ メッセージ
高橋 正忠 	日本近現代文学	文学論/論文指導 卒業論文では、安部公房『砂の女』について2001年当時この作品が持つ意味について考察しました。	現代小説はもちろん、映画・音楽(邦洋問わず)、舞台、TVドラマまで興味の赴くままに触れるようにしています。 野球は30年近く携っています。選手としても監督・指導者としても多少話ができると思います。広げて、各種スポーツについても興味関心があります。 中高段階における論文指導について研究を進めています。 育児・働く女性の育児環境などは日常的な興味・関心事としてあります。	◆東日本大震災はその後の文化(表現)にどのような影響を与えたか？ ※大きな事件・事故に限らず、表現文化にどのように社会的な出来事や作家性が投影されるのかについて考えています。
北原 隆志 	教育心理学/英語科教育法/異文化間コミュニケーション	ESD/青年心理学/EQ/アサーション/英語ディベート/右脳教育/映画/手塚治虫を中心とする日本マンガ論 大学では教育学科直轄の研究サークルのチーフをしていました。卒業論文はコミュニケーションツールとしての英語教育法がテーマでした。現在は、ESD関係の講演会やワークショップに多く出席しています。	◆いかにしてESDの発想を世界中に普及し、全人類が持続的に安全に暮らせる平和な世界を実現できるか。 ◆日本の文化的財産である手塚治虫の漫画を若者世代で読んでもらうためにはどうしたらよいか。 ◆日本の中学、高校の英語の授業でディベートの導入を一般化するにはどのような工夫が必要であるか。	論文で大切なものは三つ。一つは、どこかで読んだことがあるようなありきたりのものでなく独自の発想での仮説を立て、もう一つは、その理由を後盾する強い証拠があること。最後は、提出期限を厳守することです。心配は要りません。先生方のアドバイスをしっかりと聞いて、これまでに培ってきた法技論を発揮すれば先輩に負けない個性溢れた素晴らしい作品ができますよ。
野村 努 	都市工学 (津波避難施設への住民参加での最適化)	線形計画モデル 最適化問題 (商品価格の最適化/施設配置の最適化など) 計量心理学 (ヒトがモトをどう捉えるかを数学的に解析)	硬式テニス 日本史 心理学 脳科学 圧力的にジブリ 爆発するくらいハリー・ポッター 他の興味を許さぬディスプレイ	◆ネーミングがとくに与える影響と日本史 ◆どうやったら法技の緑キアラを勝ち取ることができるか？ ◆緑色は目に良いと言われてはいるのに、どして僕はメガネをかけているのか？

Write for the Future (自調自考論文) 要旨集より

日本における在留外国人への医療情報提供
ネットワークの構築は、これからどうあるべきか
藤野 ころこ

キーワード：在留外国人、情報、医療、ネットワーク。

第1章 はじめに。

本論文はどのように在留外国人に医療情報を提供するの
が適切な説明を目指すものである。近年、在留外国人の
数は増加の一途を辿っており、将来的には日本の人口の
大部分を占めるかもしれない彼らも医療という基本的な
権利を母国でいる時と同じようにもしくはそれ以上に享受
できるべきだ。

しかし、現実的として、在留外国人の医療のための
準備を全ての病院で整えるのは非常に困難だ。仮にそれが
達成できたとしても、それはきっとかなりの時間がかかる。
そうだとすれば、まずは、在留外国人が適切な医療情報
入手できることが大切である。インターネット上の医療情報
の整備がアクセシビリティ向上の鍵となる。

第2章 先行研究の分析。

東京都国際交流委員会の「東京都在留外国人向け情報
提供に関するヒアリング調査報告書」によると在留外国人が
今まで困ったと感じたことのある事例について平成30年3
月に聞き取り調査をしたところ、回答者の半数以上が医療
で困った経験があると答えたという結果であった。

横浜国際局の「令和元年度 横浜外国人意識調査 調査
結果報告書」によると、生活に必要な情報の入手方法につ
いて、8割が「インターネット」と回答している。また、生
活で困っていることや心配なことがあったときの相談先と
しては、「家族」(50.3%)、「同じ国出身の友人・知人」
(40.4%)、「日本人の友人・知人」(38.0%)との結果だ
った。インターネット上の医療情報の整備を行い、誰もが
医療情報にアクセスできる環境を整え、いっしょにイン
フォーマルなパイプラインに頼るのが最も効果的ではないか。

第3章 リサーチ・論証。

先行研究を受けて、どのようにインターネット上の医療
情報を整備すればよいかという問いを立て、在留外国人
の意識調査、官庁主体のインターネット上の医療情報の
アクセシビリティ調査、地方自治体主体のインターネット上
の医療情報のアクセシビリティ調査を行った。

在留外国人の意識調査では在留外国人 21 人を対象に
アンケートを実施した。

官庁主体のインターネット上の医療情報のアクセシビ
リティ調査では検索の仕方によるウェブサイトの表示の有
無を調べた。

地方自治体主体のインターネット上の医療情報のアクセ
シビリティ調査では検索の仕方によるウェブサイトの表示
の有無だけでなく、多言語対応しているか、医療を受け
る上で付随する情報を掲載されているかを確認した。

第4章 結論。

在留外国人の意識調査から、在留外国人の日本語の不自

由さ、医療情報を提供するウェブサイトの認知度の低さ、
インフォーマルなパイプラインが利用される傾向にあるこ
とが分かった。

インターネット上の医療情報については、日本語より英
語の方がアクセシビリティが低くなること、対応する言語
が限られていること、自治体の方が狭い範囲で病院を探
すことが可能であること、付随する医療情報は自治体の方
が充実していること、自治体のインターネット上の医療情
報は、対応言語や参考情報の有無で都道府県ごとにかなり
のばらつきがあることがわかった。

現状、インターネット上の医療情報は存在するが、それ
らはアクセスできる状態にないことが多い。

第5章 今後の課題。

現状を踏まえた上でこれから医療情報提供ネットワー
クはどのようにあるべきなのかについて下記4項目を提言し
たい。

①官庁主体のインターネット上の医療情報と地方自治体
主体のインターネット上の医療情報の違いを活かして、在
留外国人に地方自治体のウェブサイトに医療機関紹介やそ
の他の付随する医療情報等が提供されているという認識を
広げなければならない。②都道府県ごとに情報格差が生
じないように官庁が都道府県ごとに提供されている医療情報
を一括管理する態勢を築くべきである。③多様な背景を持
った在留外国人が皆、医療情報にアクセスできるように地
方自治体は在留外国人向けの医療情報の多言語化を行うべ
きである。④在留外国人がインフォーマルなパイプライン
を利用することからも、私たち日本人が医療情報の掲載場
所を把握できるように、住民全般に向けた連絡の中に在留
外国人の医療情報が掲載されているという形で医療情報が
提供されることが望ましい。

そうすれば、既に確立された最も強固なパイプラインを
役立てることができ、彼らが日本社会の一員であるという
意識も育まれるだろう。

文献・資料一覧。

沢田美希 (2019) 「在留外国人の医療を取り巻く課
題と今後の展望」、『公衆衛生』第 83 号、医学書院
pp.96-101.

東京都国際交流委員会：東京都在留外国人向け情報提供に
関するヒアリング調査報告書。
[https://www.tokyo-
icc.jp/topics/pdf/201812research.pdf?02](https://www.tokyo-icc.jp/topics/pdf/201812research.pdf?02) (2021年2月
19日閲覧)。

法務省：人権教育・啓発に関する基本計画(平成23年4
月1日閣議決定[変更])。
<http://www.moj.go.jp/content/000073061.pdf> (2021年2
月19日閲覧)。

日本における在留外国人への 医療情報提供ネットワークの構築は、 これからどうあるべきか

21期 藤野 ころろ

目的 日本にいる在留外国人にどのように医療情報を提供するのが最も適切かを明確にする

在留外国人の8割がインターネットで生活に必要な情報を入手している背景

問い インターネット上の医療情報をどのように整備すればよいのか

調査方法

1. 在留外国人の意識調査
 - ・2020年の9月15日から9月18日にかけて
 - ・目的: 医療情報がどれほど浸透しているのかを調べる
 - ・対象: 在留外国人21人
(東京都、神奈川県、千葉県在住、7か国出身)
2. 官庁主体のインターネット上の医療情報のアクセシビリティ調査
 - ・2020年の9月18日から9月22日にかけて
 - ・検索の仕方によるウェブサイトの表示の有無を調べる
3. 地方自治体主体のインターネット上の医療情報のアクセシビリティ調査
 - ・2020年の9月18日から9月22日にかけて
 - ・検索の仕方によるウェブサイトの表示の有無を調べる
 - ・多言語対応しているか、医療を受ける上で付随する情報を掲載しているかを確認する

結果1 在留外国人の意識調査結果

- ・アンケートを行った全員が病院を訪れたことがあった
- ・「行った病院(クリニック)」は、インターネットやインフォーマルなパイプラインを通して、知ることが多い

- ・医療情報を提供するウェブサイトの認知度が低さが目立った

結果2 地方自治体主体のインターネット上の医療情報のアクセシビリティ調査結果

- ・日本語で検索した場合のウェブサイトの表示数 32/47都道府県
- ・英語で検索した場合のウェブサイトの表示数 26/47都道府県
- ・多言語対応状況

日本語	32
英語	26
中国語	17
韓国語	11

単位: 都道府県

結果3 インターネット上の医療情報の傾向

- ・日本語より英語の方がアクセシビリティが低くなる
- ・対応する言語が限られている
- ・自治体の方が細かい範囲で病院を探すことが可能である
- ・付随する医療情報は地方自治体の方が充実している
- ・自治体のインターネット上の医療情報は、対応言語や参考情報の有無で都道府県ごとにかなりばらつきがある

今後の課題

1. 医療情報を提供するウェブサイトの認知度の低さ
 - ➡医療機関紹介やその他の付随する医療情報等が提供されているという認識を広げる
2. 都道府県ごとの情報格差
 - ➡官庁が都道府県ごとに提供されている医療情報を一括管理する義務を負う

3. 多様な背景を持った在留外国人
 - ➡地方自治体が在留外国人向けの医療情報の多言語化を行う
4. インフォーマルなパイプラインの利用度の高さ
 - ➡日本人が医療情報の掲載場所を把握できるように住民全般に向けた連絡の中に在留外国人の医療情報を掲載する

参考文献
 沢村貞志 (2019) 「在留外国人の医療を取り巻く課題と今後の展望」、『公衆衛生』第83号、医学書院 pp.96-101.
 尊厳に関する基本計画 (平成23年4月1日閣議決定(変更))
<http://www.moj.go.jp/content/000072061.pdf>
 横浜国際局: 令和元年度 横浜市外国人意識調査 調査結果報告書
https://www.city.yokohama.lg.jp/cityinfo/aisaku/kokusai/kyosei/chousa01_files/0003_20200331.pdf

4 特別交流活動

今年度は、多くの国内外の交流活動が制限されることとなったが、少しでも WWL の活動につながるような理解・探求のプログラムをきめ細かく実施し、生徒たちが世界に向けてメッセージを発する機会を設けた。

カンボジア課題探究プログラム

イタリアを学ぶ 特別講義

さくらサイエンス

オンライン学校交流

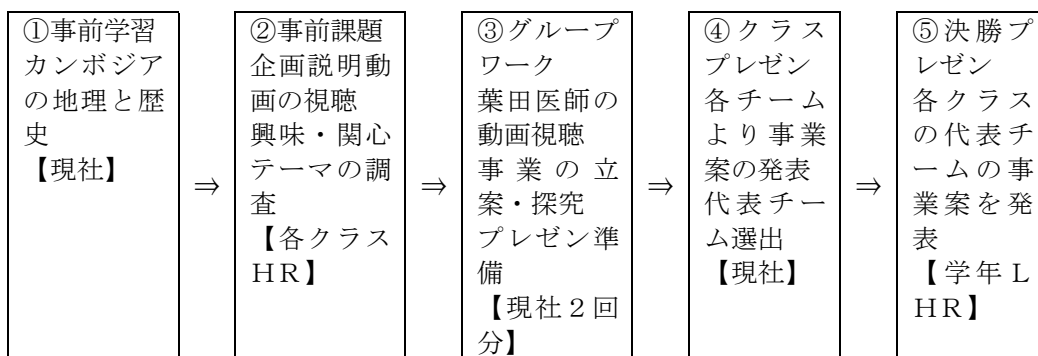
オンライン国際会議参加

SGH・WWL 高校生フォーラム

(1) カンボジア課題探究プログラム

World Wide Learning consortium (WWL) の一環として、2020年10月から11月にかけて、株式会社ミエタ（以下ミエタ社）の協力のもと、高校1年現代社会の授業時間を使用し、カンボジアの抱える諸課題を解決するための事業案をグループで考える取り組みを実施した。各クラスにてチーム毎に事業を立案してプレゼンテーションを行ったのち、各クラスから選ばれた代表チームによる“決勝プレゼンテーション大会”を開催した。以下に取り組みの詳細を記す。

ア 学習の流れ（概要）



イ プログラム実施の背景

今年度はコロナ禍により、海外への研修に参加し現地の方との交流が行えない状況であり、オンラインを活用した現地調査と問題解決のプロジェクトを行う方法を模索した。教育事業に取り組むミエタ社から協力の提案を受けて、「カンボジア・プロジェクト」への取り組みが始まった。ミエタ社は映画『僕たちは世界を変えることができない』でも取り上げられた葉田甲太医師との協力関係も深く、日本の高校生がカンボジアの課題を発見し解決するためのプロジェクトを立ち上げる協力をいただいた。

学内では広島プロジェクトが核兵器の課題解決に関して取り組むが、大国の政治的な対立構造や、歴史及び地政学的な因果関係が多い。そこで、中村哲氏がアフガニスタンに水路を引くドキュメンタリーを視聴し、カンボジア・プロジェクトにつながるよう工夫した。また、中学までに学んだ歴史と地理の知識を活用し考えるための教材を用意し、そこに現在のカンボジアの社会情勢を共有した。

ウ 各段階における学習

(ア) 事前学習

2学期中間テスト前（10月中旬）の現代社会の授業にて、現代社会担当教員作成の教材（資料1）を使用してカンボジアの地理・歴史を学習する時間を

設けた。地理ではカンボジアの自然環境、民族・文化、経済・産業、人口、医療・衛生、外交関係などを、歴史では古代から時代順にアンコール王朝の繁栄と衰退、フランスの進出、タイ・ベトナムとの関係、第二次大戦下の状況、クメール・ルージュと内戦の時代などを扱った。生徒が中学時の既習内容をふまえてカンボジアの地理・歴史を理解し、カンボジアの現状と課題をイメージできるように留意した。

(イ) 事前課題

中間テスト最終日（10月21日(木)）のホームルーム時間にて、ミエタ社作成の動画を視聴し、本プログラムの概要を説明と、本プログラムもサポートしていただく葉田甲太医師の紹介を行った。そしてグループワークと事業の立案に向けて、興味・関心テーマの調査シート（資料2）を配布し、自宅学習日の課題とした（2日後の登校時に提出）。その際、1学期に使用した『SDGs スタートブック』や、JICAの活動内容なども参考にすることを付した。

教員は提出された調査シートをもとに、興味・関心分野の近い生徒が集まるように留意してチーム分けを行った。1チームあたりの人数は、活発な議論につながるとともに、全員が議論に参加できることを考慮して4～6名とし、各クラス8チームを設定した。

(ウ) グループワーク

10月26日(月)と27日(火)の両日、各クラスとも現代社会の授業時間にグループワークを実施した。他教科の協力を得て授業変更を行い、全5クラス両日ともに現代社会の授業を設定することができた。事業の立案に際して、プレゼンテーションにおける評価項目となる以下の5点を提示し、これらを意識させて議論と準備を進めさせた。

- ・ 課題自体の重要性（解決しようとしている課題は本質を捉えているか？）
- ・ 解決策の実現性（解決策から、実現でき得る「ストーリー」が感じられるか？）
- ・ 事業としての継続性（慈善活動ではなく、事業として継続できる可能性がみられるか？）
- ・ 物語性・未来構想力（目指す世界が魅力的で、ワクワクした未来を創り出せるか？）
- ・ 主体者（事業の改革推進者として、任せるにふさわしいか？）

a 第1回…10月26日(月)

授業前にチームに分かれて着席させ、各チームに1台のノートパソコンを配置した。はじめに、チーム毎に葉田医師からのメッセージ動画（自己紹介、支援活動を始めるきっかけ、カンボジアの現状、現在の活動など。約17分）を視聴させた。現地の状況や葉田医師の活動内容を通してカンボジアの現状理解がより深まったところで議論に入った。

この日は「現地の課題の選定」「選定した理由」「課題の本質・原因・データ・関連する他の課題」「どのような組織として課題解決に取り組めるか」「具体的な取り組み方法」「課題解決の先の未来像」について議論させた。教員は各チームの様子を見ながら、議論が進展し、より深まるよ

うに適宜助言した。どのチームも全員が活発に意見を出し、議論が深まる様子がみられた。議論内容はチーム毎に Google フォームに入力させ、ミエタ社のスタッフと内容の共有を図った。ミエタ社のスタッフには内容の確認とフィードバックをしていただいた。

b 第2回…10月27日(火)

この日はミエタ社のスタッフが来校し、各クラスのグループワークに助言をいただいた。生徒たちには前日の議論をさらに深め、事業案を具体化させると同時に、プレゼンテーション準備も進めさせた。ミエタ社のスタッフからは、「こちらから何も言わなくても、自然と活発な議論が始まり、議論において役割分担（まとめ役、記録役など）ができる学校は初めて」との言葉をいただいた。

(エ) クラスにおけるプレゼンテーション

10月30日(金)と31日(土)の現代社会の授業にて、各チームの事業案のプレゼンテーションを行った。発表形式は自由、発表時間4分、質疑応答1分とした。実際にはほぼ全てのチームはプレゼンテーションソフト (Power Point など) を使用していた。また発表は全て動画にて撮影、記録した。

生徒には評価シートを配布し、事前に提示した5つの評価項目について4段階で評価させた。授業後、その合計点を集約して各クラスの1位チームを選出、決勝プレゼン出場チームとした。また、撮影した動画のうち各クラスの1位と2位のチームのものを終了後にミエタ社のスタッフと Google ドライブにて共有した。そして2位チームの発表についてはミエタ社のスタッフに審査していただき、推薦枠として2チームを選出し、決勝プレゼン出場チームとした。決勝には合計7チームが出場することになり、出場チームはミエタ社からのアドバイスを踏まえて、事業案と発表の修正・改善を行った。

(オ) 決勝プレゼンテーション大会

11月7日(土)、学年のロングホームルーム (2時間分) を使用し、校舎内メモリアルホールにて決勝大会を実施した。当日はミエタ社のスタッフや葉田医師が来校し、発表を審査・評価していただいた。発表時間5分、質疑応答3分と、クラスプレゼン時より長く設定した。各チーム、クラス発表時より練り上げられた内容となり、質疑応答も葉田医師を唸らせるほど活発かつ深みのあるものとなった。

評価は「投資家の視点」を意識した形で行うことにした。生徒1名につき1口5万円を3口、合計15万円の資金があるとして、投資したいと思ったチームに投資していく形式を設定した (3口全て1つのチームに投資することも可能)。評価の投票 (投資) は Google フォームを利用して行い、生徒は自身のスマートフォンや教員側で用意したノートパソコンを通して投票した。また、ミエタ社のスタッフと葉田医師には、1口当たりの金額を増やして投票していただいた。Google フォームを利用した結果、集計は速やかに終了し、閉会式にて葉田医師とミエタ社のスタッフから講評をいただいたのち、1～3位のチームが発表された。

- ・ 第1位 日本の教育を応用しカンボジアの教育を変えるチーム (資料3: 発表資料)

- ・ 第2位 飲み水のインフラを整え社会を変えるチーム
- ・ 第3位 鉄道網の整備により社会を変えて経済発展につなげるチーム

エ プログラムを終えて

今までの学びの内容を活かしてテーマを決め、自然に全員参加の活発な議論が始まり、議論においても役割分担がなされ、まとめた事業案を適切な形で相手に伝える。このように各チームとも、本校の教育目標の軸となる「自調自考」が目に見える形で現れているプログラムであった。これも、中学1年次からの各教科における授業や研修旅行における「自調自考」の学びの積み重ねが結び付いてきた証であると感じる。

生徒たちの反応としては、「カンボジアの困っている人たちのことを考えて調べることができた」「チームで取り組みアイデアを1つにまとめることができた」「プレゼンで自分たちの主張を第三者に伝えようとするのができた」「社会を見る視野が広がり、自分の可能性も広がったように思う」などの感想が目立った。なお最終プレゼンテーション大会の第1位、第2位チームについては、クラウドファンディングを利用して実際の活動ができないか模索している（令和3年3月現在）。

資料1

カンボジアと日本

項目	カンボジア	日本
面積	181,037 km ² (2011年)	377,975 km ² (2018年)
人口	16,527,771人 (2019年)	1億2,477万5千人 (2019年)
人口密度	91.1人/km ² (2019年)	330.1人/km ² (2019年)
都市人口率	32.2% (2015年、推定)	91.4% (2015年、推定)
合計労働力	2,588万人 (2017年)	1億4,133万人 (2017年)
労働力	15.5% (2017年)	1.5% (2017年)
平均寿命	69.2歳 (2017年)	84.1歳 (2017年)

人口ピラミッド (2020年)

経済成長率

年	カンボジア	日本
2015年	8.8%	1.0%
2017年	7.0%	0.7%

労働力人口構成

年齢層	カンボジア (%)	日本 (%)
15歳未満	33.2%	14.9%
15-64歳	55.2%	64.8%
65歳以上	11.6%	20.3%

主要都市

都市	カンボジア	日本
カンボジア	プノンペン	東京
人口	2,150万人 (2017年)	1億3,750万人 (2017年)

主要産業

産業	カンボジア (%)	日本 (%)
農業	33.2%	1.0%
工業	15.5%	33.0%
サービス業	51.3%	66.0%

主要課題

- ・ 都市部と農村部の格差
- ・ 労働力の不足
- ・ 労働力の質
- ・ 労働力の量
- ・ 労働力の質
- ・ 労働力の量

プロジェクトの目的

- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる
- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる

プロジェクトの成果

- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる
- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる

プロジェクトの課題

- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる
- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる

プロジェクトの展望

- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる
- ・ 労働力の質を向上させる
- ・ 労働力の量を向上させる

カンボジアの課題を解決しよう！ 22 期×WWL×現代社会×ミエタ合同企画

I:テーマを共有しよう
 カンボジアの課題を踏まえ、国際協力や医療の観点から、現地課題を解決するための事業プランを策定せよ。
 なお、事業プランについては、アイデアの面白さやプレゼンテーションの技術ではなく、「投資家の視点」から評価を行うものとする。

II:今後のスケジュールを共有しよう
 10月26-27日はグループワークでプロジェクトを練り上げ、30or31日にクラス代表選抜プレゼン大会実施
 11月7日(土)の学年LHRで、クラス代表チームによるプレゼン大会(会場 TED In メモリアルホール)
 →カンボジアでの医療支援活動を行っているフロントランナー葉田医師を特別講師としてお招きする予定です

III:10月21日(水)のワーク内容は「リサーチ」です…ワーク期間は23日提出!
 国際協力や医療も含めた様々な観点から、カンボジアにある課題について調べましょう。Google や YouTube 等を利用していきましょう。1学期に使用した「SDGsスタートブック」も活用してみよう。
 まずは課題を5つ以上洗い出し、その中から自分の最も興味のあるものを1つ選び、その課題の対象となっている人、エリア・解決のために誰に取り組みられている施策または組織(行政・企業・NPO等)について、具体的に書き出してください(選んだ理由を説明できるようにしよう)。
 なお、このワーク内容は10月23日(金)に提出してもらいグループ分け(5人前後)を行います。26日にワークを返却し、一人1分程度でグループメンバーにワーク内容を共有できるように準備しよう。

◇JICA(国際協力機構)の海外協力隊の主な取り組みもヒントになるはず(webページより)

計画・行政:国・地域づくりに関わる仕事	農林水産:食や物や自然に関わる仕事
人的資源:教育やスポーツなど人を育てる仕事	鉱工業:ものづくりに関わる仕事
保健・医療:命に関わる仕事	社会福祉:福祉に関わる仕事
公共・公益事業:生活サービスに関わる仕事	エネルギー:エネルギーに関わる仕事
商業・観光:マーケティングや観光に関わる仕事	

◎ワーク内容は10月23日(金)の曜日の日に提出です!→グループ分けを行い26日に返却します

(I) カンボジアの現状を調べて、5つ以上の課題を洗い出そう…自製自考はリサーチから始める!

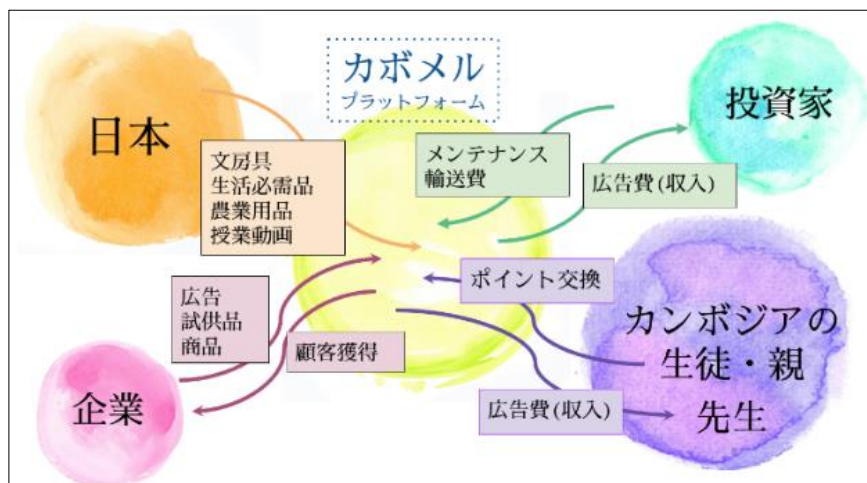
(II) 自分が最も興味のある課題を1つ選ぶよ

(III) その課題の対象となっている人、エリア・解決のために誰に取り組みられている施策または組織(行政・企業・NPO等)について具体的に書き出そう

人_____ エリア_____

※解決のために取り組まれている施策または組織(行政・企業・NPO等)について調べよう

22期高校1年 姓 名 (氏名)



(2) イタリアを学ぶ特別講義

本校では、長期休暇の際に、著名人や専門家を招いて講演を行うことを常としている。

2020年12月23日には、冬期講習の特別講座として、『テルマエ・ロマエ』の作者として知られる漫画家のヤマザキマリ氏をお招きしてお話しいただいた。

特に氏のクリエイティビリティに関しての示唆は、生徒に強い印象を残した。概要は以下の通り。



ア ローマ文明の豊かさ

- ① 発展の理由は、征服した異文化を積極的に自分の中に取り入れた寛容性である。
- ② 技術体系から言えることとして、古い時代の人々が遅れているとは誤りで、人間の発想には現在とも通じる普遍性がある。

イ あらたな発想が生まれるにあたって大切にすべきこと

- ① 経済効率のみを考えないこと
欧州では、お金にならないからと言ってなくしてはならないものとして、芸術が何千年前から存在している。おながが満たされるだけでなく、精神が満たされることを重視している。
- ② 真っ直ぐ生きるだけが人生の理想ではないこと。
思い通りにならないときに、見えてくるものがある。順調に過ごし、何も経験していない人が、芸術家としては、技巧的にうまいものは描けても、感動させるものを描けるかとは思えない。手塚治虫の「漫画家になりたければ、漫画から漫画を学んではならない」という言葉を意識すべきだ。
- ③ したがって人生に無駄な体験は何一つないこと。
発想は、欧州で風呂に入れなかったこと+ポルトガルの昭和の日本のような風情+ローマの古代文明。経験は、油絵画家を目指しての厳しく貧しい修行生活+シングルマザー+ワイドショーの温泉レポーター+シリア・エジプト・キューバでの生活。これらのすべてがヒット作につながった。

【生徒感想文】

冬期講習特別講座

2020年12月23日

『テルマエ・ロマエの古代ローマ』

ヤマザキマリ先生

※今後の特別講座の充実のために、感想とアンケートに答えてください

中学・高校

3年 1組 氏名

感想を書いてください

とてもユーモラスで興味深く、歴史及び人生についての価値観が変わる講演でした。中学3年にもなりそろそろ自分の将来について考える機会が増える時期なので、ヤマザキマリさんの「自分がやることが全て理想や目的に合ってなくてもいい。どんなことでもまっとうにやる」という教方が印象的でした。私は自分にとって役に立つかどうかを考えてから行動しがちですが、確かに人生は何が起きるか分からないため、何事にもチャレンジすることが一番大切だと思いました。今日の講演を聞いてから例えば経済的な価値にはならなかったとしても、自分のやりたいことを追求した方が自分は幸せになれるのかもしれないと思いました。また、古代ローマ文明についても教科書で読んだときは遠く離れた存在だったのにも関わらず、意外にも日本との共通点が多くて人の根本的な発想は同じであることに気づくことができました。そのため、現代でも新しい発想は歴史を深く学んだら生まれてくるのかもしれないと思いました。

先生への質問があれば書いてください

昔のローマ文明の習慣が今はなくなってしまったのはなぜだと思いますか？昔の文化は今でも残す必要があると思いますか？

今後の特別講座にどのようなものがあるといいと思いますか

様々な分野で活躍されている人のお話を聞きたいです

(3) さくらサイエンスプログラム

国立研究開発法人科学技術振興機構が行うさくらサイエンスプログラムは、世界の高校生との交流事業であり、本校もこれまで複数回、受け入れを行ってきた。今年度は、新たな取り組みとして、シンガポールの2つの学校と交流し、ともにSDGsに関わる課題を一緒に解決するワークショップを実施した。

本校からは、高校生27名（9チーム）が参加し、午前中はNanyang Girls' High School 校（<https://www.nygh.edu.sg/> 現地指標ランキング4位(百数十校中) 100年以上の歴史を持つ伝統校）と、午後はNUS High School of Math & Science 校（<https://www.nushigh.edu.sg/> シンガポール国立大学附設の6年一貫校で7割が理系に進む共学校）と交流した。（2021年3月15日 実施）

当日のスケジュール：

午前 Session1 日本時間 11:30~14:00（ワークショップは12:00~14:00）
集合は1時間前 10:30 → 各教室で準備

午後 Session2 日本時間 15:00~17:30（ワークショップは15:30~17:30）
集合は1時間前 14:00 → 午前の部が退出するまで待機

アジアをもっと身近に感じられた有意義な交流であった。

当日はオンライン上のテクニカルサポートが充実していたことと模擬国連活動をボードゲーム形式にした比較的わかりやすい設定だったからこそ、互いの国(仮想国)同士の議論が白熱して大変有意義な交流だったと言える。

本校とは国際交流で大変馴染みのあるシンガポールだが、新たに新設校と名門校2校とつながれたことはうれしいことであった。

オンライン交流の様子（後方画面は、シンガポール）



(4) Raffles Institution (高校) 交流

毎年 3 月に行われる渋谷教育学園渋谷高校と渋谷教育学園幕張高校合同のシンガポール研修及びその翌年の 9 月に行われるシンガポールのラッフルズ校 (Raffles Institution、以下 RI) の受け入れが新型コロナウイルス感染のため全て中止となった。その中で、生徒が自主的に何らかの形で RI の生徒と交流をしたいという申し出があり、本来シンガポール研修で行うはずであったプレゼンテーションと意見交換をオンラインで行うことができないか模索した。生徒の強い希望とこれまでに築き上げてきた信頼関係のお蔭もあり、9 月の 2 日間にオンラインで交流を行うこととなった。

(9 月 23 日(水)・9 月 29 日(火)実施)

ア 事前学習

シンガポール研修の事前学習を含めると、1 月より準備はすでに始まっていた。シンガポールの歴史についての講義を受け、さらに RI の授業に参加した際にプレゼンを行うトピックは：

- (1) 日本における「清潔さ」という文化
- (2) 21 世紀の日本社会を生き抜く伝統と文化

に決定し、その研究を進めようとしていた矢先にシンガポール研修の中止が通達された。

学校生活が通常に戻りつつある 6 月、本校生徒自らシンガポール研修の代替案として RI との交流を行いたいと訴えてきた。国際部の研修担当であった教員 2 人が話を聞いたところ、生徒のその熱意に押され、先方に相談を持ち掛けてみた。その結果、渋谷・幕張・RI の 3 校によるオンライン交流会を開催することが決定した。新しいテーマは、それぞれの国における英語教育を切り口に、「言語と文化」についてプレゼンをすることとなった。メンバーを再募集し、生徒は連日放課後 ICT に残り、学校紹介のビデオ作りや英語でのプレゼンの準備を着々と進めた。

イ 交流当日

交流会は全てウェブ会議システム Zoom 上で行われた。本校では 1 人に 1 台タブレット端末 (Surface Go) を用意し、イヤホンとマイクを介して会議に参加した。本校の中心メンバーは高 2 生がメインであったが、高 1 生、中 3 生にも声をかけ、見学可能とした。生徒・教員どちらもオンライン会議の経験があったため、接続はスムーズに行うことができた。一方、幕張では音声のトラブルがあり 1 日目の開始時間が 15 分前後遅れてしまった。通信について、映像が一部乱れるシーンもあったが、全体的に動作は安定していた。

内容：

Day 1 9/23 (水)	16:50~17:20 Virtual School Tour 各校 10 分~13 分のビデオでの学校紹介 17:25~18:45 Dr.Hattori's interactive session (Q&A) 50 分+40 分 大妻女子大学英語教育研究所の服部孝彦教授による第二言語習得についての講義
Day 2 9/29 (火)	15:50~17:05 Presentation by RI×3 (including Q&A) RI によるプレゼンテーション 17:15~18:05 Presentation by Shibuya/Makuhari (including Q&A) 渋谷と幕張によるプレゼンテーション 18:05~18:30 Sharing of reflection on what they have discovered from the exchange 今回の交流を通して発見したことの共有

【Virtual School Tour】

各校で事前に 10 分程度の学校紹介ビデオを作成し、当日上映した。各校独自の工夫がなされており、映像を通して校舎の中の様子が実感できるだけでなく、生徒が自分の学校に対して抱いている思いを、インタビュー等を通して聴くことができ非常に興味深かった。

【服部教授による第二言語習得についての講義】

当日は服部教授に渋谷にお越しいただき、講演をしていただいた。幕張・RI の生徒はその映像を、Zoom を通して視聴するという形になった。言語の第二習得という、大学レベルの難解な内容を全て英語で聞くというのは生徒にとってはチャレンジではあった。それでも高 2 生は聞き取れた部分も多かった様子で、終わった後は自信に満ちた顔つきをしているのが印象的であった。講義後の質疑応答では鋭い質問が飛び交い、服部教授はその 1 つ 1 つ丁寧に受け答えをしてくださった。

大いに盛り上がった 1 日目が終わったのは午後 7 時を回るような遅い時間であったが、生徒にとっても教員にとっても充実間満ち溢れる時間であった。特に発表する生徒は、ここで得た新しい学びや気づきを次の週に行われるプレゼンに生かそうという意欲が高まっていた。

【プレゼンテーション】

発表は最後までスライドを作り直し、制限時間内に収まるように何度も練習した。生徒は「言語と文化」という大きなテーマのもと、日本にとっての理想の言語教育とは何かを追究し続け、その議論の中で意見が分かれたり、自身の考え方が変わったりすることに戸惑いながらも最終的には納得のいく発表をまとめ上げることができた。また、RI の生徒のプレゼンを通して、日本とは全く異なる形で英語をはじめとする多くの言語を受け入れているシンガポールについて知り、自分が今までに持っていなかった視点・価値観を身に着けていた。2 日目も議論が白熱し、時間いっぱいまでお互いに質問をしていた。短期間ではあったが、大変に内容の濃い交流であった。

ウ 事後活動

- ・ 1 2 月下旬 学校の国際部通信にて紹介
- ・ 同 文部科学省主催 2020 年度全国高校生フォーラムへの参加



オンラインで講義を共有する生徒たち

【生徒のレポート】

Activity Cultural exchange with RI & Makuhari HS and national forum for

high school students

Date 2020~2021

Place Online

Why I chose this activity

Our cultural exchange program started off by bringing up an alternative for a Singapore field trip after being canceled due to the COVID-19. By putting great effort into it, we've managed to be a representative for our school at a national forum for high school students.

What I did

Cultural exchange: three schools (RI, Makuhari-SH, Shibuya-SH) gave presentations regarding education in their own country. Shibuya-SH did a presentation on the ideal education in Japan. We've also had discussions, Q&A sessions, and a keynote speech by Pro. Hattori. This cultural exchange was held for two days, all online through ZOOM.

National forum: Many schools from all over the country did a poster presentation on their activities related to SDGs. We made a poster titled "The looming crisis on Japanese education". We analyzed the current education system and situation in Singapore and made a prediction on what would happen if we applied those systems to the Japanese curriculum.

What I thought/found / How I felt

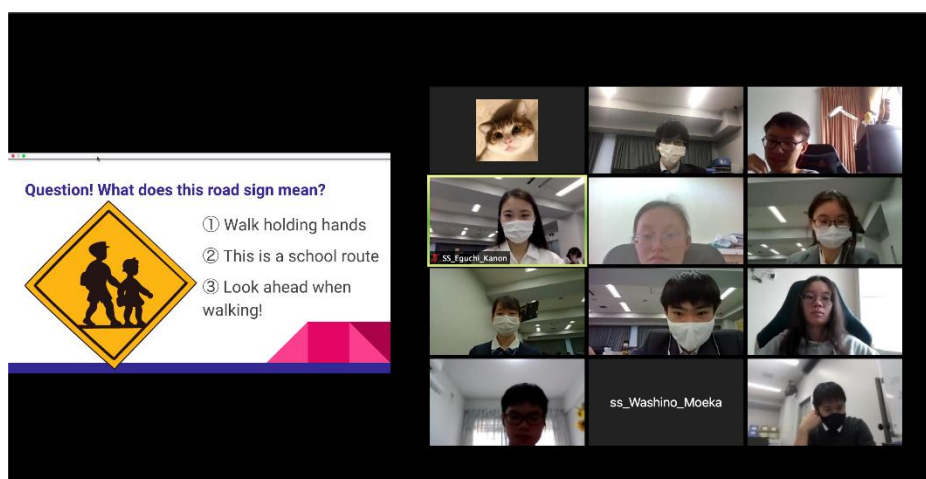
We gathered our thoughts on the theme we wanted to discuss on the cultural exchange. After several discussions, we decided to pick "education" for our agenda. We picked that because 1. We thought the English education in Japan was inferior compared to other Asian countries. 2. Education disparity was one of the problems caused by COVID-19.

We first did a lot of research on the history of education in Japan and found out that Japanese people can live without English because of our rich translation. We also learned about many facts on language acquisition such as: critical period, bilingualism, integrative/instrumental motivation, second/foreign language education, etc. We then examined Japan's current education system. Japanese students can read and write English but can't speak and listen. This is because we start our English education at 8~ which is past the critical period, a period that a person can learn languages efficiently. And because our lesson is in lecture style, Japanese people don't have much opportunity to speak out. We've also recognized the importance of Japanese education. Without any foundation of language, one will have very little capability to think.

On the national forum, we summarized all of our thoughts and put them on one piece of paper.

(5) Dunman 校交流会

11月25日、シンガポール Dunman 校との生徒運営によるオンライン国際交流が行われました。渋渋生 19名、渋幕生 14名、Dunman 校生徒 10名が参加しました。主な内容は①各学校および地域の紹介（文化に関するクイズを含む）、② Dunman 校の企画によるバーチャルエスケープゲーム、③ブレイクアウトセッションでの新型コロナ対応等に関する意見交換の3点でした。渋渋生が強力なリーダーシップを発揮し、Dunman 校からも感謝のお言葉を頂きました。また久々の国際交流に渋渋生も満面の笑みを浮かべており、充実のひと時を過ごせた様子でした。



➤ 参加生徒の感想-1

今回のシンガポール交流会に僕は「なんとなく楽しそうだから」という実に安直な理由で参加することを決めた。シンガポールの人たちと英語で会話するのはいけないので、英語が得意ではない僕は少なからずプレッシャーを感じていた。

この交流会では渋渋、渋幕、ダンマン高校の三校が互いに自分の学校紹介動画を見せ合い、自国についての簡単なクイズを楽しんだ後に七人一組の小さなグループに分かれてグループディスカッションをし、主に二つのテーマについて話し合った。

僕がこの交流会に参加してまず驚いたことは、渋渋の紹介動画や日本文化についてのクイズの作成など、準備から実行までほとんどすべての工程が生徒主体で行われていたことだ。僕はこの交流会はコミュニケーション能力だけでなく、積極性や主体性を育てることのできるプログラムだと思った。

グループディスカッションではまず、新型コロナウイルスによる学校生活への影響について話し合った。この議論では、オンライン上で授業をすることについて、賛成と反対の意見がはっきり分かれた。賛成派の意見は楽に授業が受けられ、通学時間が無くなる分、有効活用できる時間が増えていいというものだったが、反対派の僕は、学校は勉強をするためだけの場所ではなく、実際に行かなければ得られないものもあるという意見だった。その後、オンライン上であることを忘れてしまうほど白熱した議論が続いた。

次に、日本や中国の古典文学を学校の授業で取り扱うことについてどう思うか話し合った。皆の意見はおおむね同じで、将来どのように役に立つのかわから

ないので、授業で扱うことについては反対だが、趣味として読む分にはいいという考えだった。僕は自分の「古典文学は授業に取り入れる必要がない」という考えが少数派だろうと思っていたので、この結果には共感するとともに驚かされた。

最後に余った時間でフリートークを行った。正直、前の二つのテーマについての議論より、このフリートークのほうが個人的には楽しく感じた。

シンガポールの人が日本のアニメや漫画についてとてもよく知っていて、今流行りの「鬼滅の刃」や「原神」というゲームについて話した。ゲームやアニメに対しておもしろいと感じることはどこの国でも変わらないものなのだと改めて思った。

この交流会に参加することを決めた時、はじめは英語に対する苦手意識から。英語で会話することにプレッシャーを抱いていた。しかし、いざ話しかけると、とてもフレンドリーに話しかけてくれて、気が楽になり、今では英語を話すことに自信がついたように思う。

ただすべてがうまくいったというわけではもちろんない。あの時もっと積極的に話していればもっと深い話ができただろうと思うこともあれば、伝えたいことを思うように伝えられず、もどかしい気持ちになる場面もあった。

しかし、この悔しさは今後必ず乗り越えようと思決心した。この経験は必ず僕のこれからの人生を変えるものになるだろう。僕はこの交流会を通してなんとなくで参加したものでも、自分に大きな変化をもたらすものになるということ学んだ。

▶ 参加生徒の感想-2

毎年、シンガポールで実施されていた研修がオンラインになってしまった。できることならシンガポールの現地へ行きたかったが、オンラインという状況でもできることを考えてみんなで準備を進めた。

準備の段階で学校紹介の動画を作るチームとプレゼンを作るチームにわかれて作業をした。学校紹介は、自分たちの学校、渋渋について改めて考えるきっかけとなった。渋幕の生徒もいる中で、どこが渋渋のユニークなところで、どのように渋渋の特徴を見せられるかを考えなければいけなかった。

当日はダンマン高校の生徒二人、渋幕の生徒3人、渋渋の生徒4人のいるグループに分かれてディスカッションをし、最初に話し合ったテーマはコロナ禍での生活についてだった。ダンマン高校の生徒はオンラインの方がよかったという感想だったのに対して、渋渋や渋幕の生徒は対面授業の方がいいと考えた。最初は全然違う意見のように思えたが、理由を聞くと意外と似ていた。オンラインだと授業を自分のペースで見ることができ、趣味などに使える時間も増える。同時に、だらけやすくなってしまふことなど良くない面もある。この点についてはみんな同意した。しかし、ズームでのディスカッション形式の授業も多かったダンマン高校と、それが少なかった渋渋や渋幕では最終的な感想が違った。文化も通っている学校も完全に違うが、コロナによって受けた影響は同じで、どのような授業が良いと考えるかの価値観も共通していた。

参加したシンガポールの生徒たちは日本文化クラブに入っている子たちで、日本について驚くほど詳しくかった。日本人ではない視点から、日本文化にどのような魅力を感じているのかを聞くことができた。それは日常的に目にしている私たちにはない視点だった。アニメなど日本の文化に興味があり、日本語を習得したいと言っていたのが記憶に残った。

交流の時間はあっという間に終わってしまい、どのグループも話し足りないと感じる充実した時間だった。この交流を通して、シンガポールの文化について知識が増えただけでなく、今までとは違う視点で日本文化を見ることができるようになった。自分の国の文化についてもさらに理解したように感じる。

(6) 高校生国際会議参加プロジェクト

本校は、これまでの国際高校生会議等における実績により、模擬 G20 サミットを毎年主催している団体 Kovva Academy（拠点は米国）から日本を代表するグローバル教育実践校であると評価された。2019 年、Kovva Academy から正式に招待を受け、各国のグローバル教育推進校から成るネットワークに加入した。その後、年に複数回開催される高校生会議に常任日本代表校として参加することが可能になった。

本年度、本校生徒は以下の二つの会議に参加した。いずれもコロナ禍のためオンラインでの実施となった。

ア 2020 Global Youth Leadership Conference

2020 年 6 月 2 日～6 日の 5 日間、Kovva Academy 主催、Y7 2020 および Young Professionals in Foreign Policy の後援によって開催され、18 か国から 160 名の高校生が参加した。主な内容は、チームに分かれて Global Connectivity and Trade、Energy、Peace and Security、Education and Jobs に関する問題に対する解決案を話し合って政策を作成し、それをオンライン掲示板で発信した。最終日にはゲストである Harvard 大学の David King 教授の前でプレゼンテーションを行った。その他、Y7 サミットを見学する機会もいただけた。

<参加した生徒の感想>

今回のサミットでは、改めて世界の高校生の議論やコミュニケーション能力のレベルの高さを実感しました。全体チャットだけでなく、個人チャットで積極的に話しかけてくる人や、「このトピックに興味がある人は参加して」などと言って新しい SNS のグループを作る人。様々な形で様々な人達と意見を交わし合い、住んでいる地域や環境が全く違う人達と飛行機代をかけずに話すことができたので、オンラインも捨てたものではないと思うことができたとても楽しいイベントでした。

イ 2020 Model G20 Virtual Summit

Kovva Academy 主催、Y7 2020 と Young Professionals in Foreign Policy 後援で開催された Model G20 Virtual Summit に、本校高 2 生 2 名と高 1 生 1 名が日本代表として参加した。18 の国と地域からの 405 人（60 チーム）の高校生たちは、ゲストの Professor Sam Myers of Harvard Th Chan School of Public Health, Professor Cary Krosinsky of Brown University and Yale University によるキーノートスピーチを聞いた後、チームごとに G20 の国の代表として Climate Change and the Future of Humanity についての政策を作成し、最終日にそれを他グループの前で発表した。その結果、本校生徒たちは、Most Outstanding Country Delegations - Argentina（最優秀賞）、大臣を務めた高 2 生が Best Ministerial Award - Minister of the Environment and Sustainable（最優秀大臣賞）を獲得するなど、主催者や関係者から非常に高い評価を受けた。

<参加した生徒の感想>

1 月 31 日から 2 月 20 日までの 3 週間、18 の国と地域から 400 名以上の高校生が集ったオンラインの国際会議である Model G20 Virtual Summit 2021 に参加しました。割り当てられた G20 の国の大臣となり「気候変動と人類の未来」について議論し、国ごとに政策を考えました。私はイタリアの「環境と持続可能な開発大臣」として議論の場における自分の立場に戸惑いながらも、積極的にアイデ

アを出したり他の大臣に質問をしたりすることで建設的な意見を出し合える雰囲気をつくることを心掛けました。

ハーバード大学教授である Samuel Myers 氏やイエール大学とブラウン大学で教授を兼任している Cary Krosinsky 氏の講義はとても興味深く、リアルタイムで Cary Krosinsky 氏に質問をし、答えていただくことができた時はとても嬉しかったです。

最終日の政策発表に向けて、EU の調査書を読み漁ったり、時差のため夜中の 1 時からミーティングを始めたりと大変でしたが、環境と持続可能な開発を担当する大臣として最優秀賞をいただくことができました。チームとして賞をとれなかったのは残念でしたが、様々な背景を持った高校生と一丸になって、気候変動に立ち向かうという目標のもとで議論ができたのは素晴らしい経験になりました。何よりもこの会議で感じられた「世界の人とつながる」という感覚をこれからも大切にしていきたいと思います。



▲最優秀賞を獲得したチームの記念写真。上段右が本校の高 2 生

<参加生徒報告>

模擬 G7 サミット 2020 を終えて

テーマ: Online Defamation インターネット上の誹謗中傷についての法改正を考える日時・場所: 9 月 6 日 9:00~17:00 オンライン

参加校: 神戸大学附属中等教育学校、渋谷教育学園渋谷中学高等学校、渋谷教育学園幕張高等学校、洗足学園中学高等学校、創価高等学校、東京学芸大学附属高等学校、栃木県立宇都宮高等学校、福井県立藤島高等学校、富士見中学高等学校、Guiyang No.1 High School (China)、Kang Chiao International School (China)、St. Dominic Savio Catholic High School

(U.S. 支.), Taipei Wego Private High School (Taiwan) 計 13 校

運営委員: 3 名 渋谷教育学園渋谷高等学校 2 年

ファシリテーター: 8 名 渋谷教育学園渋谷高等学校

報告: 今年の模擬 G7 サミット(Model G7 summit 2020) は、5 年間の歴史の中で初のオンライン開催となりました。

海外からの参加者も含めた 44 名の中高生がインターネット上の誹謗中傷について意見を交わしました。

まず、若者の政治参画を推進する活動を行っている高校生の車世栄さんをキーノートスピーカーとして迎え、若者と政治に関してお話をさせていただきました。MG7 は若者の社会参画を目的に始められたので、改めてこの会の意義を感じることができました。



次に運営委員が現状の問題についてのプレゼンテーションを行いました。その中で、インターネット上の誹謗中傷に立ち向かった芸人として話題になっている春名風花さん（舞台俳優、声優）からのビデオメッセージを紹介させていただきました。今の法律や社会が被害者に優しくないこと、この問題の深刻さが非常によくわかりました。プレゼンの最後に、クイズを通して、どの行為が違法で、どの行為が合法かを確認しました。参加者の皆さんが熱心に聞いていただいていることが、画面越しにでもわかりました。

その後はグループディスカッションに入り、「実現可能で効果的、そして社会に受け入れられるようなアクションプランを高校生独自の視点から考える」という課題に取り組んでいただきました。今回は英語で話し合うグループが 6 つ、日本語で話し合うグループが 2 つでした。発表は日本語で話し合ったグループも含め、英語で



行いました。誹謗中傷の被害を受けた際の保険や小学校からの SNS 教育、誹謗中傷か否かの判断を精神科医に託すなど、それぞれのグループが様々な角度からこの問題を深く考察していて、どのグループにも賞をあげたい気持ちになりました。質疑応答では鋭い質問が飛び交い、皆さんがとても真剣にこの問題に立ち向かっていることが改めて感じられました。

閉会式では、J7サミット2015日本代表として独メルケル首相と意見交換した足立愛音さん（東京大学法学部 4 年）からアドバイスをいただきました。参加してくれた中高生の皆さん、ゲストの方々、後援してくださった日本ユニセフ協会の皆様のおかげでこの会議を成功させることができました。心より感謝しております。

(7) 全国高校生フォーラム 2020 参加

2020年12月20日、高校2年生4名がオンラインにより日頃取り組んでいるグローバルな社会課題の解決や提案等を話し合うとともに、英語でのポスター発表による発信を行いました。また、大変名誉なことに、今年度の全国高校生フォーラムの総合司会を高2男子生徒と高1女子生徒が担当しました。英語での開会宣言ののち、概要の説明、流れに沿ってスムーズで明るい司会を心がけてくれました。生徒交流会は、グローバルな課題意識を持った生徒が参加し、ポスターセッションの発表テーマに関するSDGsの17の到達目標について大きな4つのテーマ、「格差のない社会をめざして」、「自然環境と生活」、「社会的環境と生活」、「持続可能な産業と開発」のもと、小グループに分かれた8分科会をZoomで開催し、問題の解決に向け高校生にできることは何かを中心に英語でディスカッションをしました。

今年度の高校生フォーラムに取り組んだきっかけは、本校が国際理解教育の旗印のもと大切にしている国際交流から生まれたものです。シンガポール研修はその中でも最もユニークで人気のある研修です。シンガポールのトップ校である Raffles Institution との相互交流は、生徒ひとり一人にとりましてもかけがえのない一生涯ものです。また、本校滞在中の彼らとの授業や課外活動を通しての交流もとても刺激的です。2020年度は3月の訪問も、9月の受け入れもコロナ禍で中止となる中、メンバー生徒達からの強い要望でオンライン交流が実現しました。Raffles Institution は、English Department がこの交流を担っているため、交流のテーマは必然的に英語教育になりました。6月から準備をはじめ多くの同学年の仲間を巻き込んで9月に2回のオンライン交流を行いました。この実りある成果をぜひまとめて全国の高校生と共有しようと発表者4名と中心メンバーたちが2か月以上を費やして作成したのが次ページのポスターです。昨年度、文部科学大臣賞を受賞した環境問題とは打って変わって、SDGsの発表には少ない Humanities の分野で挑戦しました。他国の高校生と交流したからこそ、また、日本における英語教育と母語についてしっかり時間をかけて学んだからこそ至った結論には説得力があります。SDGsの4.Quality Education を基軸に、言葉の喪失と文化の喪失をシンガポールと日本に当てはめて英語教育を議論してまとめていく過程は見事でした。



オンラインでの総合司会



オンライン交流会

Shibuya Junior and Senior High School W201903-1

Looming Crisis on Japanese Culture

Our thoughts following discussions with Raffles Institution



1 Introduction



Discussion and presentation sharing online with Shibuya Makuhari HS and Raffles Institution from Singapore on "Language and Education"



First thought
Lucky Singaporeans, they're so good at English and even have it as their first language. If only we could achieve the same educational system in Japan.

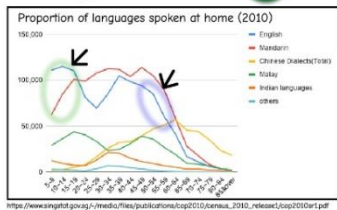
HOT TOPIC

Languages can be acquired in either of these environments:
Second Language Environment - the desired language is in common use.
Foreign Language Environment - the desired language would be considered foreign.
Critical period - the period in life one can learn and acquire a language efficiently.
 "Singlish" is an English-based creole used prominently in Singapore.
 There are many words unique to Singlish, and the language works to support the culture of the nation.

2 Language & Culture in Singapore



English should be used as the common language of Singapore to unify the diverse population of the nation and to increase international competitiveness.



Connection between Language and Culture/Society

Language characteristics reflect those of the society it serves

Languages around the world are deeply rooted in their cultures and national characters. The linguistic characteristics that have been formed throughout history is what is being represented in today's society.

Language	Culture/Society
Japanese A sensitive language that puts those around into consideration.	Subservient to those above, strict hierarchy
English A language in which all remarks are accompanied by responsibility.	Able to question others equally

3 Possible Consequences of Excessive English Education in Japan

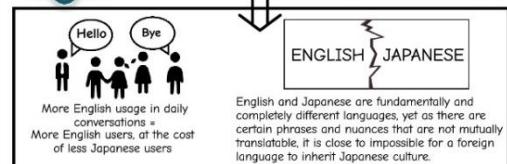


Globalization

Increased usage of English as a lingua franca may bring about...



Excessive English education in Japan



Loss of Japanese culture and overall "Japanese-ness"



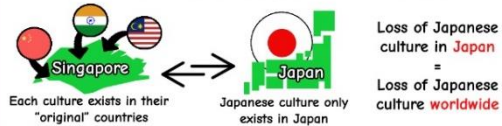
Fukuzawa Yukichi, Futabatei Shimei, Natsume Soseki

Example
Japan's national literature is the fruit of its independence from colonial powers, and the importation and translation of foreign literature. Excessive English education may erode the rich national literature, and deprive Japan of its national language.

These literary masters created the foundation of "national language" in Japan. 「日本語がこぼるときー英語の世紀の中で」水村美織 ちくま文庫

Loss of literature = Loss of a "National Language"

Impact of the introduction and assimilation of new cultures



4 Conclusion



Education with Japanese at its core will play a critical role in preserving Japanese culture and the Japanese way of life.

At the same time, however, Japanese people must improve their English skills, for English can function as a medium to both meet and exchange ideas with other cultures. Improving English skills on top of a strong Japanese foundation and connecting with other cultures will enrich Japan's culture, making it fit for this globalising world.



5 評価・分析結果

(1) WWL アンケート分析

本校では、SGH 指定初年度より、アンケートを無記名で実施している。これは、生徒の「英語運用能力」、「知的好奇心（英語に接する習慣）」および「グローバルリーダーへのモチベーション」という3つの部門に対して、計28個の質問項目に答えるものである。単年度の評価だけでなく、学年3年間の変化も読み取り、次年度のプロジェクトに反映させている。

ア 高校3年生(WWL 二期生・SGH 第五期生)

3年間における意識変化（巻末図参照）

本アンケートの対象である20期生は、高校1年次をSGH 第五期生として、2、3年次をWWL 二期生として取り組んだ学年である。アンケートにおいて「よくあてはまる・そう思う」または「とてもよく当てはまる・そう思う」と答えた生徒の割合を、2018年4月(高校1年開始)、2019年3月(高校1年修了)、2020年6月(高校2年修了)、2020年12月(高校3年修了)時点で比較したものである。なお、高校2年修了時のアンケートは、新型コロナウイルス感染症による一斉休校の影響を受け、2020年6月に実施することとなった。多くの項目で向上が見られる。

▶質問項目(1)~(10)：英語の一般的な運用能力を問う質問

学年全体の特徴として、自身の能力に対しての評価が控えめであることが多い学年であった。よって、緩やかな上昇にとどまっている項目も見られるが、一方で、高1の開始時と比較して、(2)洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる、(3)英語の新聞を読むことができる、の項目では、プラス30%以上の著しい伸びを見せた。また、(5)インターネットの英語サイトを利用することができる、(6)日常的话题について100語以上の英語のエッセイを書くことができる、(7)地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる、の項目ではそれぞれプラス約20%という伸びを見せた。

(2), (3), (5)の項目では学年進行に比例した上昇を見せており、これは多くのプロジェクトやプレゼンテーションのリサーチ等を通して「英語で書かれた文章・文献」にあたることに慣れてきたからだと思われる。また(6), (7)の項目の「エッセイ」に関しては、高1開始時には自信を持って「できる」と言える割合が低かったものの、様々なトピックに関してエッセイを書く機会が多かったため、高1修了時から安定した数値を見せている。

▶質問事項(11)~(19)：英語に接する習慣と知的好奇心を問う質問

こちらも緩やかな上昇が見られる項目が多い。授業内で他教科の知識とも関連させた様々な英語に触れる機会は多くあったが、学年生徒の傾向として「与えられたものは自発的ではないため「～している」と言うべきではない」といった厳しい評価を自己に対してする生徒が多いため、全体として前向きな回答を示す割合が低かった可能性がある。しかし、(11)新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む、(13)政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている、(19)その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている、の項目では約20%の上昇が見られた。これらの項目に関しては、学校での授業以外にも、生徒たちが自ら「やっている」と自己評価

できるほど、自主的にインターネット上で関連記事を探して読むなど、英語を情報を得るためのツールとして用いることができる生徒が多くなってきていることが分かる。

▶質問事項(20)~(28)：グローバルリーダーへのモチベーションを問う質問

これらの質問に関しては、全体的な数値として高校1年開始時より50%を超えた数値がよく見られている。特に、(21)自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい、という項目では、90%近くの数値をキープし、高校3年修了時には91%となっている。その外にも、(23)自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい、(24)日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい、(25)地球社会が抱える問題の解決に貢献したい、(28)将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい、の項目は高校3年修了時に約60%が前向きな姿勢を見せている。全体として、自分への評価はやや控えめであるものの、グローバルな世界でリーダーとして、自分の得意とする分野で活躍したいという、内に秘めた熱い情熱があることが分かる。高校生の段階では、様々な分野の魅力や問題点に触れ、どの分野に軸足を置いていくか迷うこともあるだろう。(21)の数値にも見られるように、まずは自身の得意分野をじっくりと、コツコツと極め、そして世界に発信していきたいという考える生徒が多いようである。SGH、WWLの両プログラムが、一つのキャリア教育の一環として、可能性を広げたと行ってよいのではないだろうか。多様な国際社会において、熱い野望を持って取り組んでいることに、この取り組みの意義を感じた。

イ 高校2年生(WWL 第三期生)

WWL 三期生である高校2年生(21期生)132名(匿名)から得られた回答を、昨年度末に同様のサンプルに対して同様に行ったアンケートの結果と比較、検証したい。

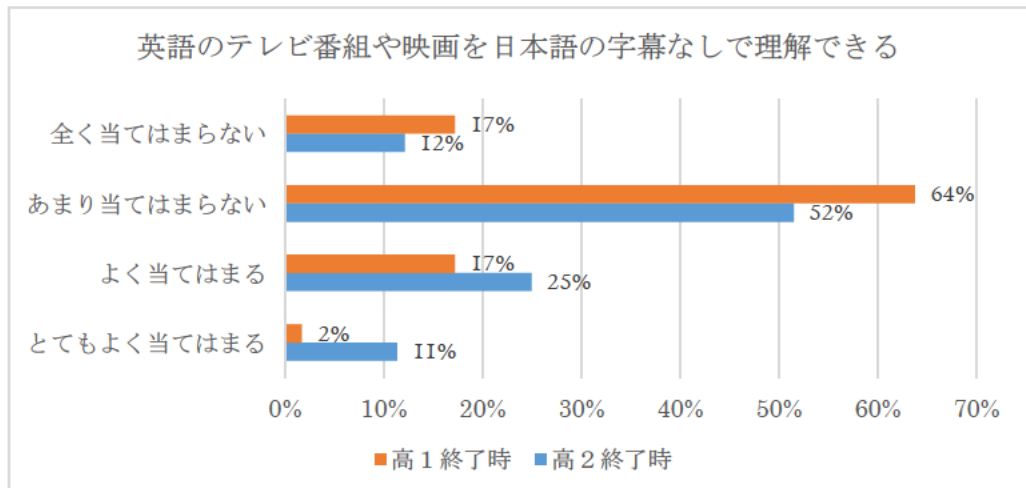
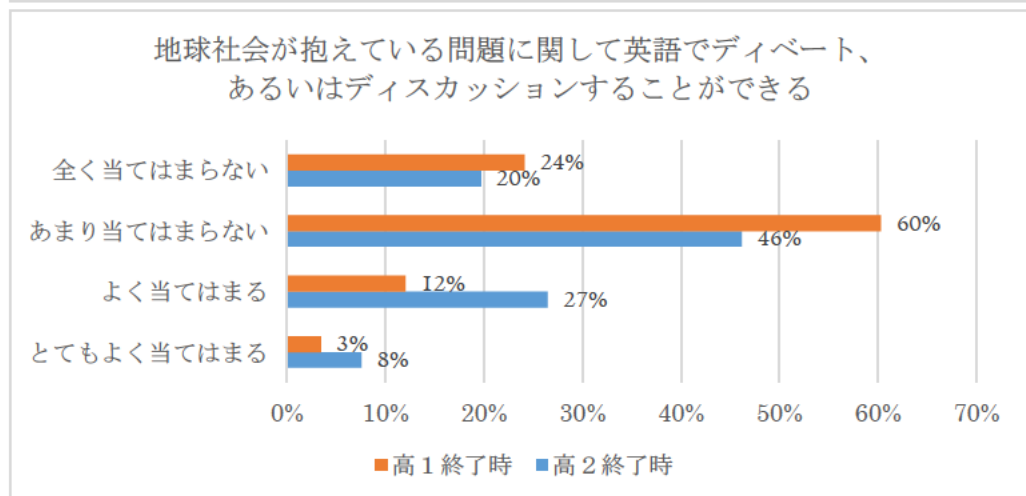
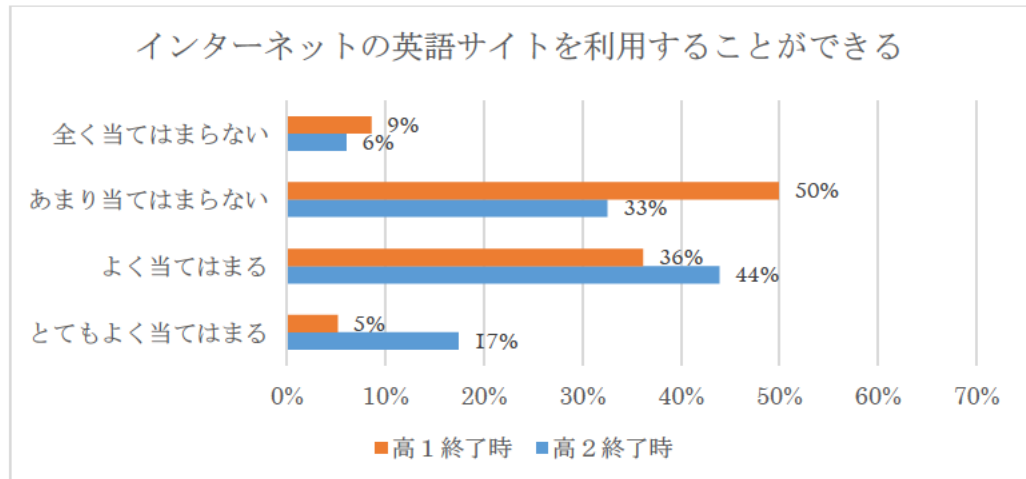
*昨年度末のアンケートはコロナ禍により学校登校禁止を行っていた期間に実施し、返答率も学年の3分の1程度の低いものであった。例年との比較ではあくまでも参考値となる可能性がある。

WWL 三期生(21期生)の意識変化

(ア)セクション1：「英語スキル」について

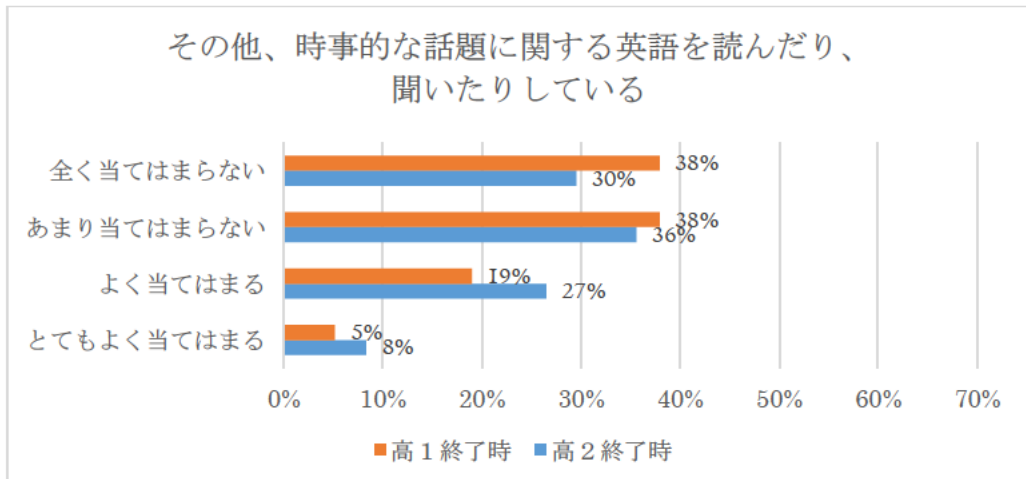
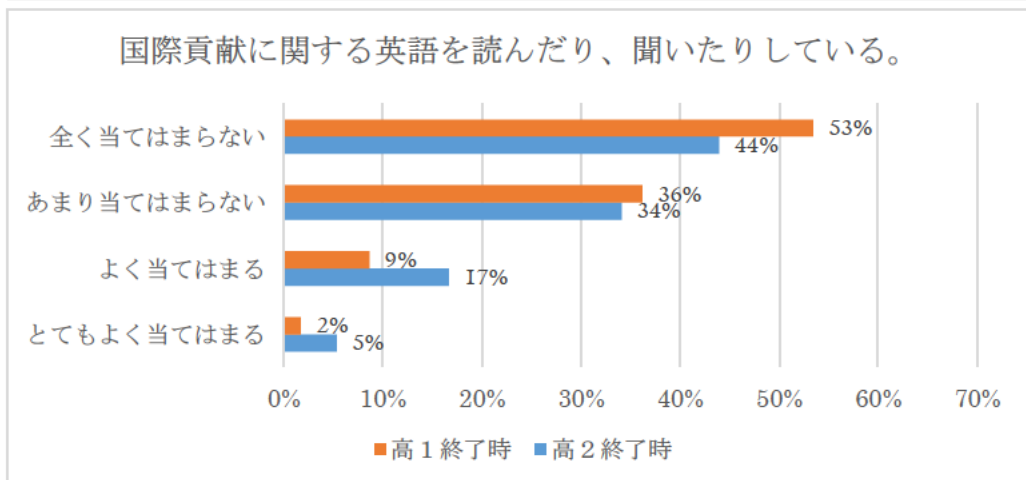
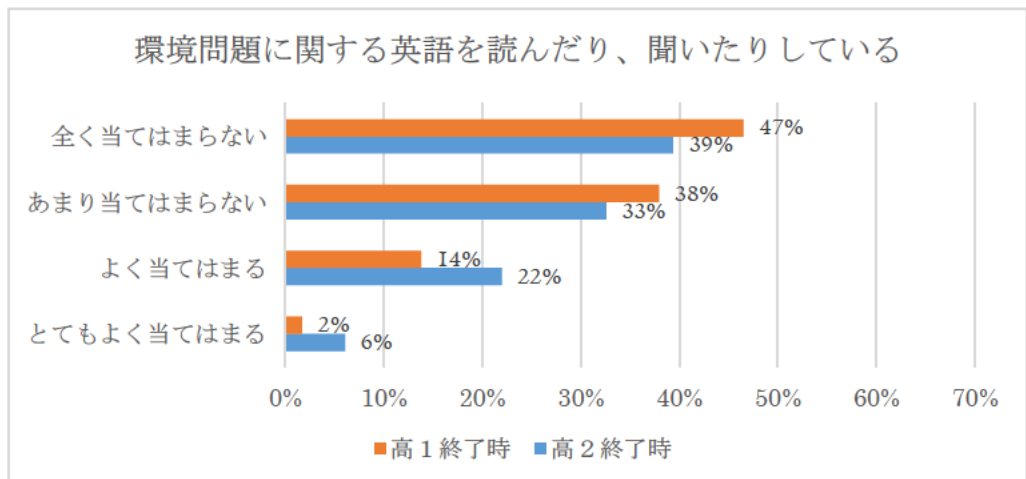
今年の高校2年生は、オンライン授業となった期間があったため、例年に比べ、開始時(6月)と終了時(3月)の期間が短く、英語の授業において発話できない期間があった。他方、昨年は中3の3月の海外研修、高1の2・3学期の東京外国語大学の学生の来訪で外国の人と英語を話す機会があったが、本年度高2では、例年と異なり、外国の人と英語を話す機会はオンラインも含めて完全にゼロであった。このことから、「外国の人と」英語で話すことについての自信だけは微かだが減少傾向にある。しかし、日本人同士で精力的に行ったスピーキング活動の結果、「地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる」という項目をはじめとしてスピーキングの自信において高い伸びを見せている。また、それらスピーキングに合わせて行ったリスニング・リーディング活動から、インターネット英語サイトの利用、英語の字幕なしでの聴取、英語の

雑誌や新聞の読解についての自信も着実に伸長しており、4技能のバランスの取れた伸長が見て取れる。



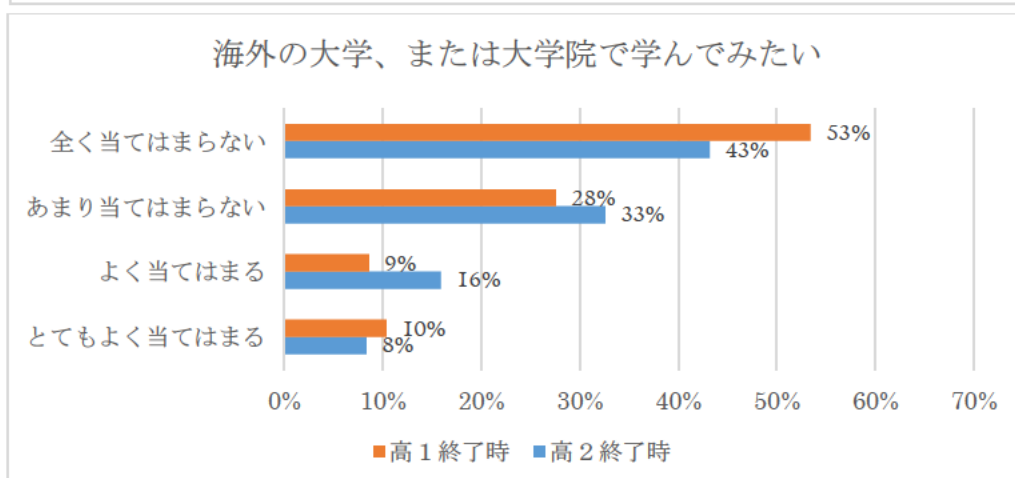
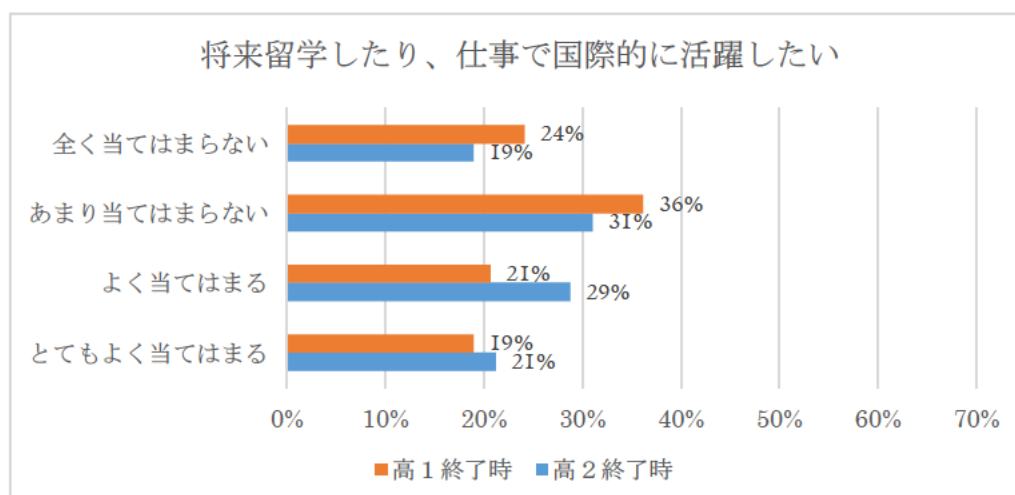
(イ)セクション2：「知的好奇心（習慣）」について

本セクションについては、上述のように、貧困・飢餓、水資源、エネルギーについて扱うという高2のカリキュラム内容をそのまま反映して、それに連動する項目を主として昨年度に比べて数値が上昇しており、プログラムを通じて、広く社会や世界に関する知的好奇心が着実に身につけていることが示唆される。



(ウ)セクション3 :「グローバルリーダーへのモチベーション」について

例年と比べると、以下グラフの2項目、すなわち「直接外国に行く」ことに関連する項目の数値が、例年より高めに出現している。これは、コロナ禍で行動が制限されているという現状や英語授業での例年通りの外国の人との交流が全くなかったことの反動とも解釈可能かもしれないが、いずれにせよ、内向きにならざるを得ない特殊な状況の一年にも関わらず外国への意識を涵養できたことは、一定の成果と言ってよいだろう。



ウ 高校1年生 (WWL 第四期生)

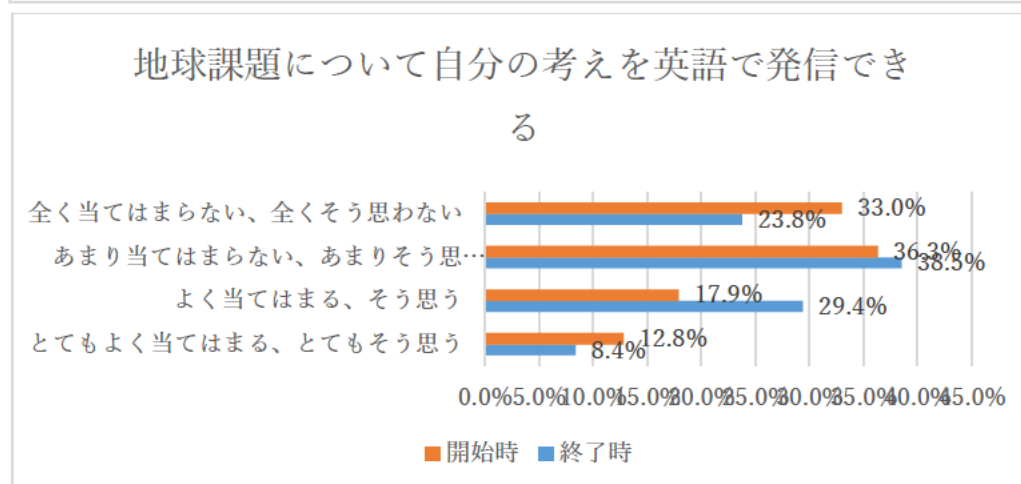
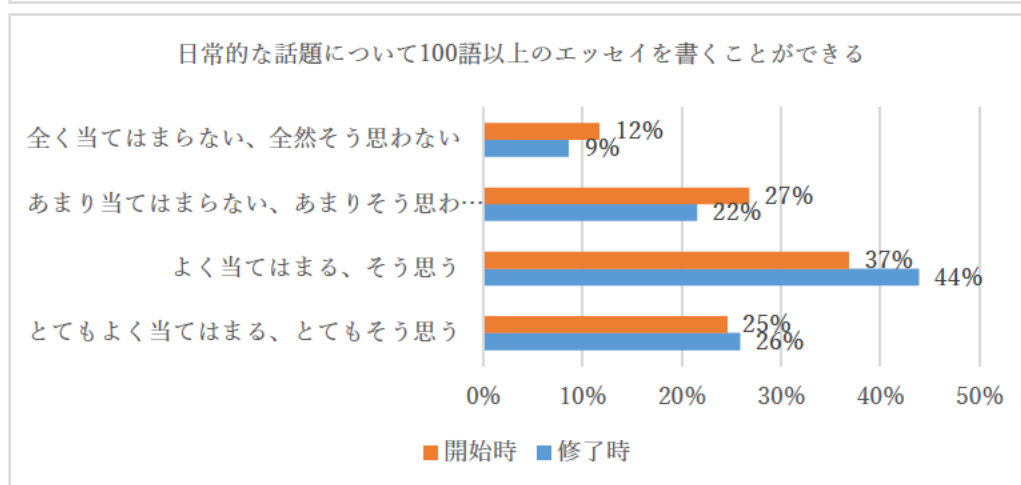
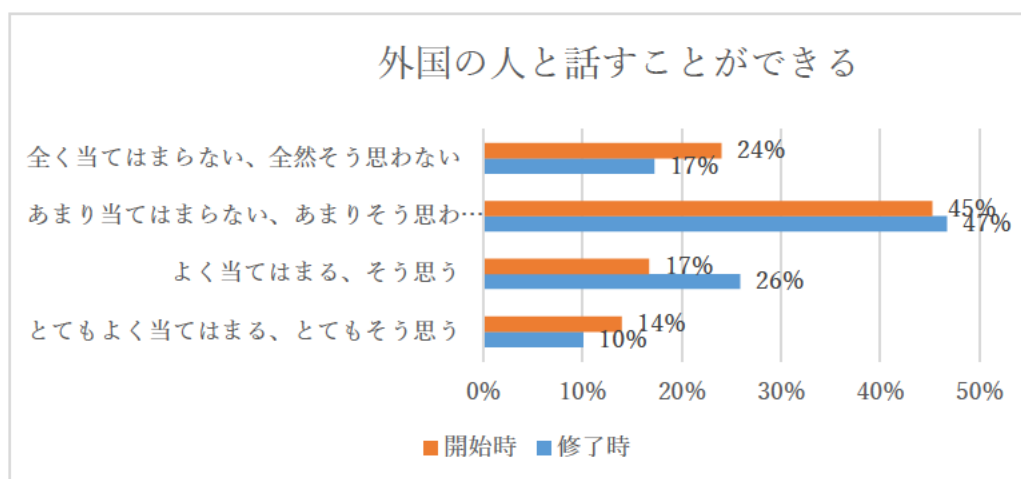
WWL 四期生である高校一年生 (22 期生) 得られた開始時 (179 名) と終了時 (143 名) の回答結果を比較、検証する。

*この学年は、COVID-19 の影響による休校期間があり、開始時と終了時の間の期間がこれまでより、短くなった。例年との比較ではあくまでも参考値となる可能性がある。

WWL 四期生 (22 期生) の意識変化

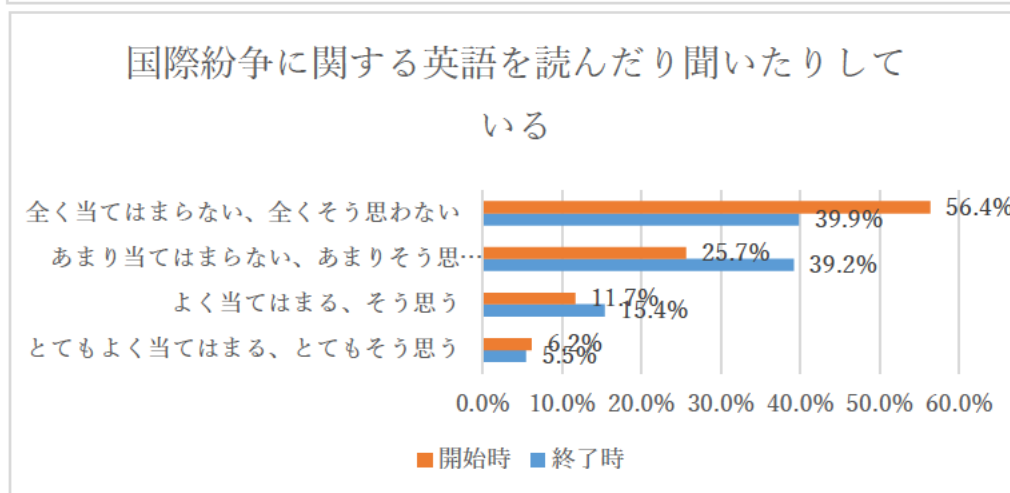
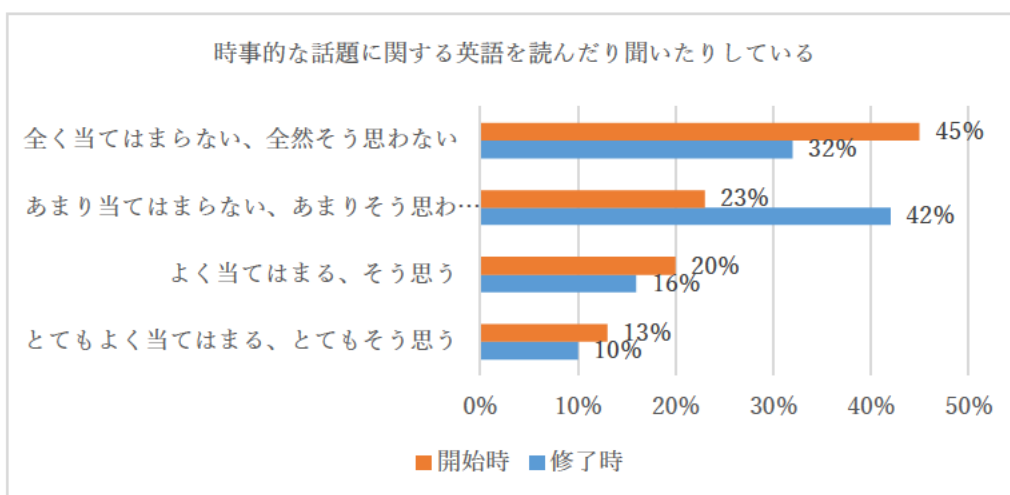
(ア) セクション 1 : 「英語スキル」について

今年の高校1年生は、オンライン授業となった期間があったため、例年に比べ、開始時 (6 月) と終了時 (3 月) の期間が短く、英語の授業において発話できない期間があったことから、話すことや意見を述べることについて、とてもよくできると回答する生徒が減っていることが読み取れる。他方、中学3年生の海外研修がなかったことから、当初自身の英語の会話力に自信がなかった生徒 (全く当てはまらない) も、年間の授業を通じて、少しずつ自信を持つようになったことも読み取れる。次年度も継続し、自信が持てるように工夫したい。また、読むこと、書くことについては、自信のある生徒が多く、今後は英語スキルのバランスが課題である。



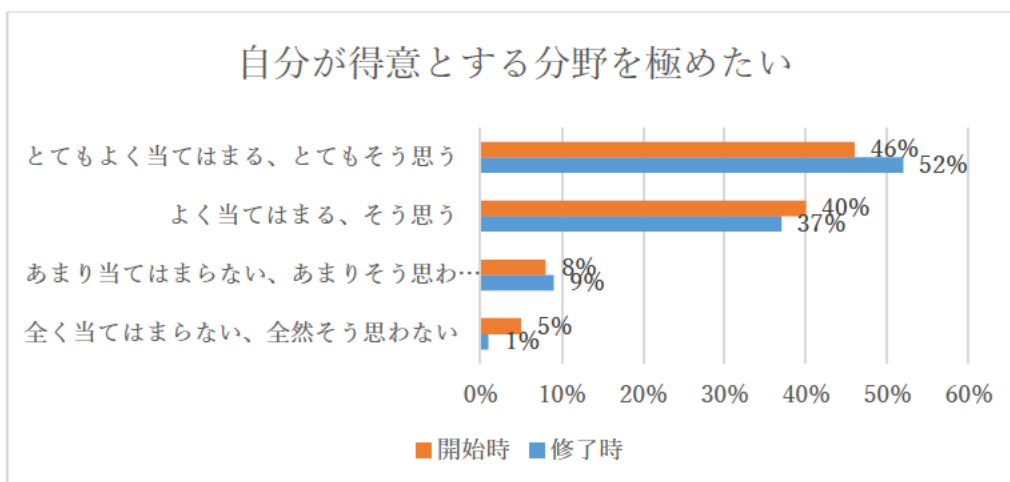
(イ)セクション2：「知的好奇心（習慣）」について

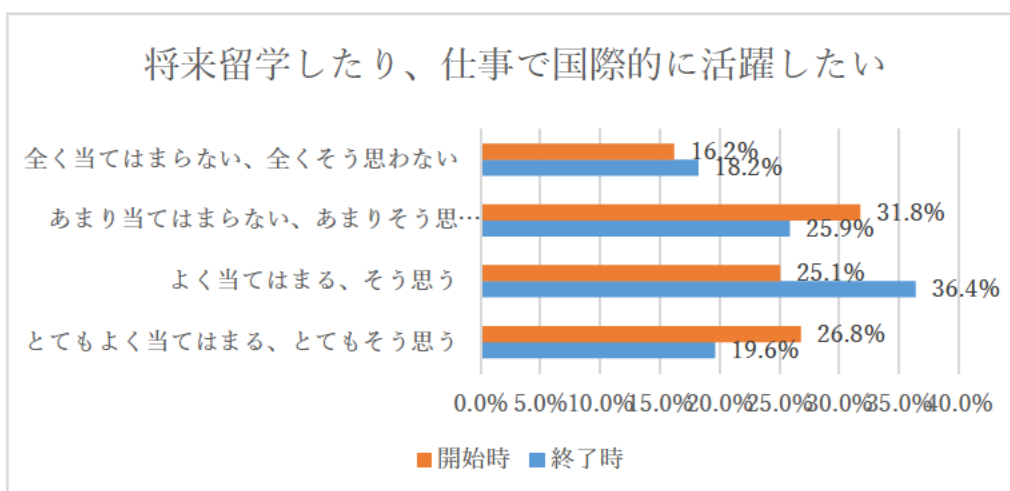
英語で情報を集めることについては、当てはまらないと答える生徒の割合が一定程度減少したものの、大きな変化となるまでにはいかなかった。今年は、対外的な活動ができず、地球課題を自分のこととして深める時間が不足したことが影響される。また情報ツールにおいても“コロナ”という特定のワードにしばられる期間が長かったことも影響した。次年度も同様にコロナ禍ではあるが、社会や世界に目を向ける機会を多く取り入れ、自分から進んで活動したいと思える仕組みづくりが課題である。



(ウ) セクション3 : 「グローバルリーダーへのモチベーション」について

自分が得意とする分野を極めたいと思う生徒が90%近くいることから、例年に比べて大きな変化はなかった。一方、海外で学びたい、海外で働きたいととても思うと回答する生徒が減少し、そう思うとの回答が増加した。行ってはみたいが、悩むということが読み取れる、長期留学の中止・延期など、渡航できない環境を身近に感じていると思われる。次年度は生徒のモチベーションを上げる工夫を行い、引き続き分析を続けたい。



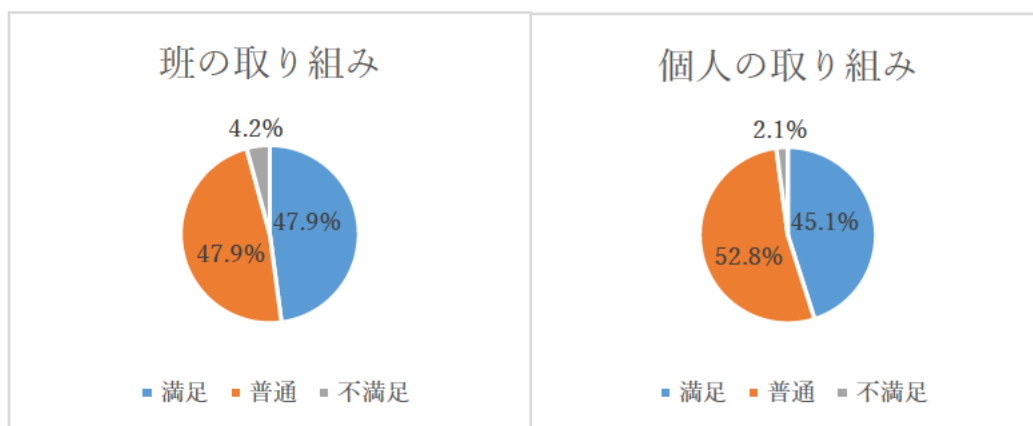


エ SDGs プロジェクトアンケート調査（中学2年生）

今年度は、中学2年生がSDGsを発信するプロジェクトに取り組んだ。プロジェクト後の生徒アンケート結果を分析し、高校での学びの動機付けになるか検証していきたい。

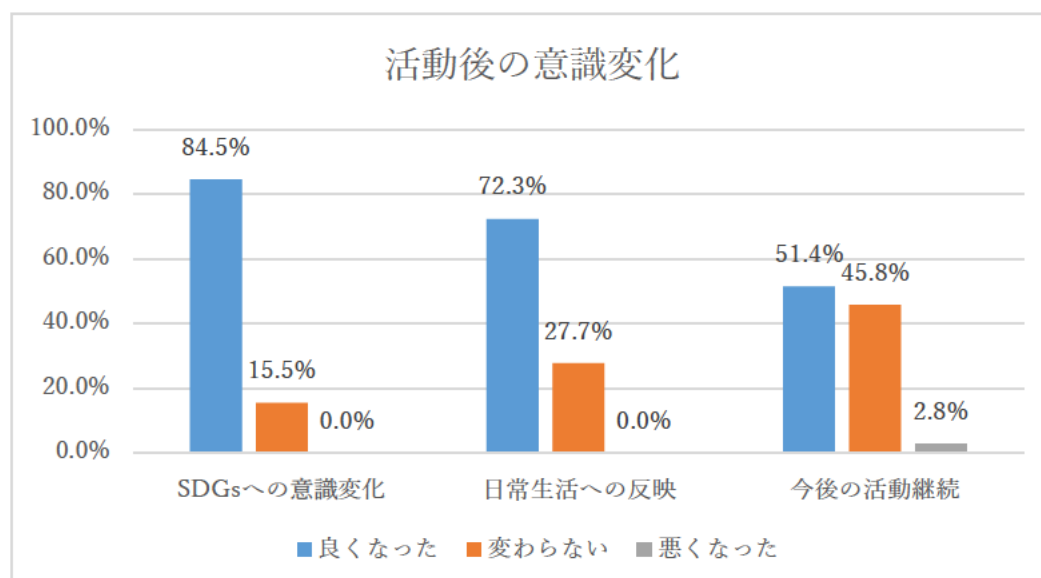
(ア) プロジェクトの満足度

生徒たちの期待のプロジェクトであったが、コロナ禍ということがあり、企業を訪問することができないため、ZOOMなどを活用しインタビューをしている班もあった。結果としては、満足がいく活動までいけない生徒が半数以上になった。中学2年生という、活動のスタート段階と考えると、満足しすぎないこともポジティブにとらえてもいいのかもしれない。



(イ) 意識変化

全体としてほとんどの生徒が、「意識が高くなった」と回答しており、SDGSプロジェクトの良いスタートとなった。日常の行動や継続は「変わらない」と回答する生徒が一定程度いるが、テーマが大きすぎて、日々の行動との結びつきがはっきりしないことが考えられる。今後の校内での活動や高校での授業で、理解を深めることで、活動につながることを期待できる。生徒たちが自発的に取り組む活動につながるようサポートをしていきたい。



(2) 活動事例における生徒たちの活躍

① P & J project (Peace, Justice and strong institutions project)に関する活躍 <中学生>

- ・第1回 JAXA「きぼう」プログラミングロボット競技会 (Kibo-RPC) 国内予選優勝 / 決勝戦 (世界大会) 優勝 (宇宙ステーション「きぼう」船内のロボットを、プログラムで遠隔制御する競技)
- ・東京都都民安全推進本部主催「SNSトラブル防止動画コンテスト」優秀賞
- ・ロボカップジュニア2020 サッカー (ライトウェイト) 関東大会優勝 (日本大会はコロナのため中止)

<高校生>

- ・文部科学省 WWL2020 全国高校生フォーラム 総合司会
- ・2020 グローバル ユースリーダーシップ カンファレンス (18ヶ国の各代表160名によるオンライン国際会議) 日本代表
- ・会津大学、福島県、全国高等学校パソコンコンクール実行委員会主催 全国高等学校パソコンコンクール「パソコン甲子園 2020」プログラミング本選 第5位
- ・第20回日本情報オリンピック (JOI) 本選 金賞 (1310名中、1位)、優秀賞 (上位17名)
- ・第31回日本数学オリンピック (JMO) 東京地区表彰

② P & F project (Partnerships for the goals project) に関する活躍

<中学生>

- ・クエストカップ2021 全国大会 企業賞 (三菱地所)

<高校生>

- ・第14回日本高校模擬国連大会にナイジェリア大使として出場 最優秀賞
- ・模擬 G20 Climate Change and the Future of Humanity サミット (18の国と地域からの405人、60チームによる世界高校生会議) Most Outstanding Country Delegations – Argentina (最優秀賞)、Best Ministerial Award - Minister of the Environment and Sustainable (最優秀大臣賞)
- ・第4回全国高校教育模擬国連大会 全国63校、476名226チームの中からB議場の優秀賞 (オーストラリア大使として)、C議場の優秀賞 (ベトナム大使として)
- ・株式会社マイナビ主催 キャリア甲子園2020 (全国6,870名2,009チームが参加) 優勝

- ・孫正義育英財団 財団生に認定（昨年度、準財団生に認定（応募 660 人中 44 人採用）され、その活動実績を以て、本年度、正規の財団生として認定された）
- ・ブリティッシュ・カウンシル主催 駐日英国大使館・朝日学生新聞社後援 高校生日英エッセイコンテスト 2020 「危機的な気候変動を回避し、豊かで繁栄する社会を私たちはどのように実現できるのか」をテーマにした日英二カ国語のエッセイコンテスト 全国より 173 名の応募。
選ばれた二名の優秀者の一人となり、小泉環境大臣と面会、懇談。

③ R & A project (Research and analysis project)に関する活躍

<中学生>

- ・2020 年度 第 24 回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 中学生の部 観光庁長官賞 受賞（16432 作品の中、入賞 7 作品に選出）
- ・第 18 回 調べる学習コンクール in としま 豊島区長賞 受賞

<高校生>

- ・第 16 回 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテスト（國學院大學・高校生新聞社） 地域文化研究部門 佳作
- ・2020 年度 第 24 回図書館を使った調べる学習コンクール 調べる学習部門 高校生の部 優秀賞・図書館振興財団賞（応募総数 770 作品の中から、文部科学大臣賞に次ぐ全国第 2 位）
- ・第 64 回全国学芸サイエンスコンクール 自然科学研究部門 入選（427 編の中、特別賞 3 編に続く上位 10 編）、人文社会科学部門 入選（942 編のうち、特別賞 3 編に続く上位 10 編）
- ・東京家政大学生生活科学研究所 生活をテーマとする研究・作品コンクール 優秀賞（上位 3 名）

④海外プロジェクト及び英語を活用する大会での活躍

<中学生>

- ・第 10 回全国中学生英語ディベート大会 優勝
- ・大学生ディベート大会 K-cup 2020 第 3 位
- ・Japan BP 2020 ノービス部門 チーム賞ベスト 8
- ・大学生大会 Japan BP 2020 ノービス部門 ベスト 8
- ・第 3 回日本中学生パラメンタリーディベート大会 優勝、ベストスピーカー賞 第 3 位、第 5 位
- ・第 10 回全国中学生英語ディベート大会 優勝、ベストディベーター賞第 1 位
- ・筑波大学附属駒場中・高等学校 主催 Tsukukoma Schools Open 2020 ノービス部門 優勝、ベストスピーカー賞第 1 位、第 7 位
- ・アジア高校生リンクバート・ディベート・チャンピオンシップ 2020 ジュニア部門 ベスト 4
- ・筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 ノービス部門 優勝

<高校生>

- ・第 12 回 IIBC (TOEIC) エッセイコンテスト 最優秀賞/日米協会会長賞 (ダブル受賞)
- ・PDWC 高校生パラメンタリーディベート世界交流大会 2020 優勝
- ・第 15 回 全国高校生英語ディベート大会 オンライン東京都予選 優勝
- ・The International Public Speaking Competition 2021 日本代表選考 優勝 (2021 年 5 月に行われる世界最大規模のスピーチコンテストへの参加権を獲得)
- ・WSDC 世界高校生ディベート大会 2020 EFL 国部門 第 1 位、ベストスピーカー賞第 3 位
- ・第 9 回日本高校生パラメンタリーディベート連盟杯全国大会 準優勝 ベストスピーカー賞 第 1 位、第 3 位、第 8 位
- ・第 10 回日本高校生パラメンタリーディベート杯東京都大会 準優勝 ベストスピーカー賞第 3 位
- ・第 11 回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール 佳作

- ・アジア高校生リンクバート・ディベート・チャンピオンシップ 2020 ジュニア部門 ベスト 8
- ・大学生ディベート大会銀杏 CUP2020 第 5 位、ベストスピーカー賞第 10 位
- ・筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 オープン部門 優勝、準優勝、ベスト 8、ベストスピーカー賞 第 7 位
- ・日韓高校生ディベート大会 KJOSDC2020 ベスト 8、ベストスピーカー賞 第 1 位、第 4 位、第 8 位
- ・第 9 回 日本高校生英語パラメンタリーディベート連盟 新緑杯 第 4 位、ベストスピーカー賞第 5 位
- ・大学生ディベート大会 K-cup 2020 第 3 位、第 5 位、第 6 位、ベストスピーカー賞第 1 位、第 2 位、第 9 位
- ・第 3 回 P D A 中学生即興型英語ディベート全国大会 第 4 位
- ・大学生ディベート大会銀杏 CUP2020 準優勝、第 4 位、第 5 位、ベストスピーカー賞 第 2 位、第 6 位、第 7 位
- ・筑波大学附属駒場中・高等学校主催 Tsukukoma Schools Open 2020 オープン部門 優勝、準優勝、ベスト 8、ベストスピーカー賞第 3 位
- ・フェミニズムオープン 2020 (大学生大会) ベスト 8、新人ベストスピーカー賞 第 1 位、第 3 位
- ・Yale-NUS 主催 第 1 回 Yale-NUS Pro-Ams ベスト 8 ベストスピーカー賞 第 14 位
- ・Asian Schools Online Debate Tournament 2020 ベスト 4、Novice ベストスピーカー賞第 1 位
- ・大学生大会 Japan BP 2020 ノビス部門 準優勝、オープン部門 ベスト 12
- ・大学生ディベート大会 The Kansai 2021 ベスト新人スピーカー賞第 5 位
- ・WSDC 世界高校生英語ディベート大会 2021 日本代表選手選考試験合格
- ・Nagoya Debate Open 2020 ベストスピーカー新人賞 第 5 位、第 10 位
- ・Hong Kong Pro-Ams Online Debate Tournament(香港主催の大学生ディベート大会) ベスト 12、ベストスピーカー賞第 7 位、ベストスピーカー新人賞第 4 位
- ・プレ・ジェミニ杯 Cup 2020 (大学生大会) ベストスピーカー賞 第 5 位
- ・ICU 主催 第 17 回エリザベス杯 (大学生大会) 新人ベストスピーカー賞 第 5 位・

⑤その他、Liberal Arts 関連の大会での活躍

<中学生>

- ・「映画感想文コンクール 2020 夏」優秀賞 受賞 (東京都 2 位)
- ・読売新聞社主催 「第 70 回 全国小・中学校 作文コンクール」東京審査 最優秀賞、佳作
- ・「五井平和財団主催 2020 年度 国際ユース作文コンテスト (小中学生の部) テーマ 2030 年からの手紙」優秀賞 (世界 166 か国から寄せられた 9578 作品のうちの 2 位に相当)
- ・日本新聞協会主催 第 11 回「いっしょに読もう! 新聞コンクール」優秀賞 受賞 (東京都の応募総数は小・中・高あわせて 10,178 名で、表彰者は 46 名)
- ・板橋法人会主催「第八回 税をテーマとした川柳コンクール」ジュニア部門百選 入賞 (ジュニア部門の応募総数は 3,047 句)
- ・全国納税貯蓄連合会国税局主催 中学生の税についての作文コンクール 渋谷税務署長賞
- ・第 19 回 鎌倉全国俳句大賞 佳作
- ・生命保険文化センター主催「第 58 回 中学生作文コンクール」都道府県別 佳作 受賞
- ・第 23 回 長塚節文学賞 短歌部門 入選 (応募総数 3174 首)
- ・TOTO 主催 「第 16 回トイレ川柳」中学生・高校生受賞 (35,451 句中上位 20 句に相当。ペンネーム はなこ「西校舎 一番奥は 僕の部屋」)

- ・金融広報中央委員会主催 第53回「おかねの作文」コンクール 特選 日本銀行総裁賞受賞 (1,723名中、上位5名)

<高校生>

- ・国際言語学オリンピック日本委員会主催 第2回アジア太平洋言語学オリンピック 銅賞
- ・第27回関東地区高等学校小倉百人一首かるた大会東京都代表選出 (B級38名中8名) 令和二年度関東地区高等学校かるた団体戦 優勝
- ・毎日新聞主催インターネットによる高校生小論文コンテスト 佳作
- ・國學院大學・高校生新聞社主催 第24回全国高校生創作コンテスト 短篇小説の部入選
- ・京都文学賞実行委員会主催 第1回京都文学賞 中高生部門 優秀賞
- ・集英社主催 第一回高校生のための小説甲子園 東京ブロック代表
- ・全国高等学校文化連盟・読売新聞社主催 第35回全国高等学校文芸コンクール 詩部門 優良賞
- ・高岡市教育委員会、高岡市万葉歴史館、北日本新聞主催 第5回高校生万葉短歌バトル in 高岡 優勝
- ・文化庁、厚生労働省、宮崎県、教育委員会主催 全国高校生短歌オンライン甲子園 (全国高校生短歌大会、牧水・短歌甲子園、高校生万葉短歌バトルの優勝校が参加) 作品賞として小島ゆかり賞、伊藤一彦賞
- ・鳥取県主催 第2回万葉の郷鳥取県全国高校生短歌大会 (16都県から32校242チームの参加) 優勝、パフォーマンス特別賞
- ・國學院大學 高校生新聞社主催 文部科学省・全国高等学校長協会全国高等学校国語教育研究連合会・公益財団法人日本進路指導協会後援 「第24回 全国高校生創作コンテスト 現代詩部門」 佳作 (最優秀賞1名、優秀賞2名に続く5名)
- ・文化連盟賞 (第26回関東地区高等学校小倉百人一首かるた大会3位となり、全国高校生かるたグランプリに関東地区代表として推薦されたが、新型コロナウイルスの影響でグランプリ大会が中止となり、この戦績によって第44回全国高等学校総合文化祭の東京都代表に内定し、全国高等学校文化連盟会長より本賞が授与された。)

【参考資料】

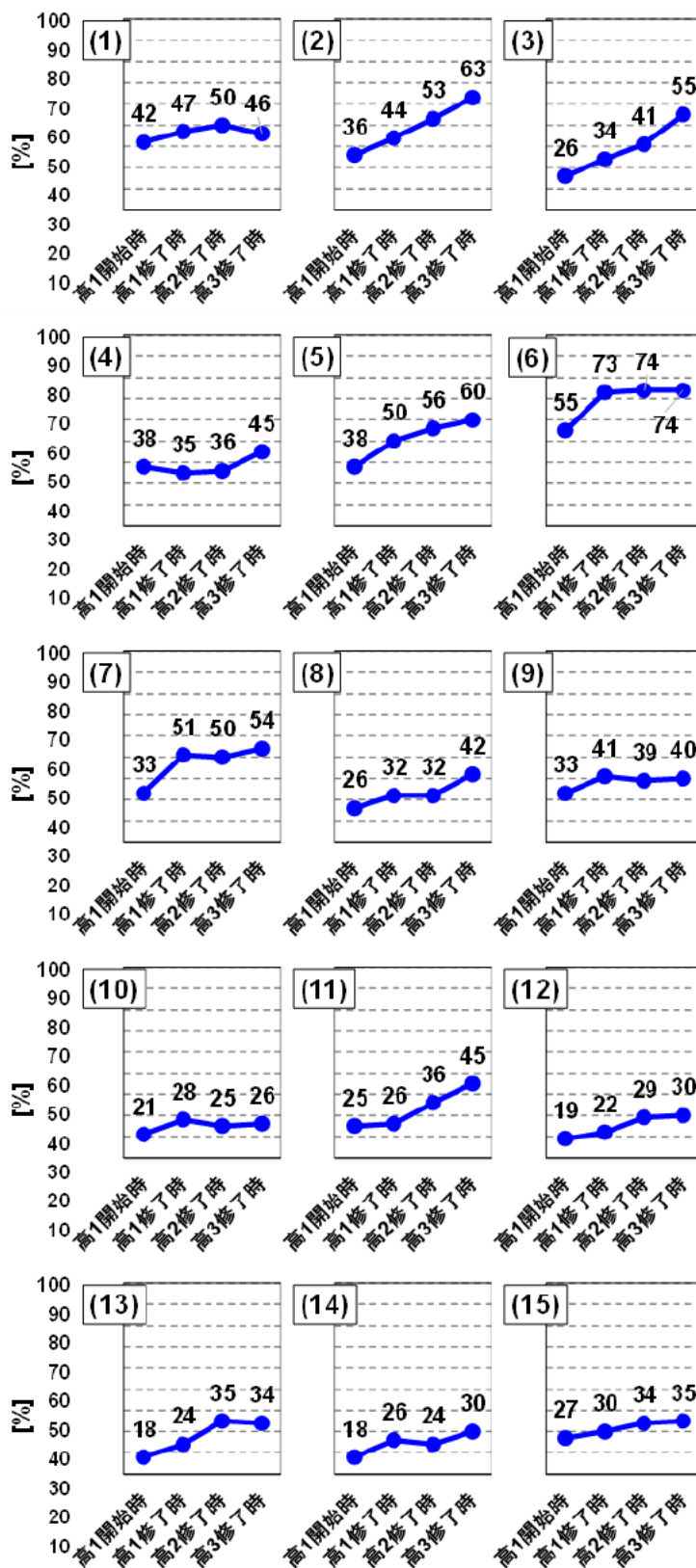
A WWL アンケートデータ～3年間における意識変化

図 SGH 第五期生(20期)の3年間における意識変化

高1開始時:(2018.4) 高1修了時:(2019.3) 高2修了時:(2020.6) 高3修了時:(2020.12)

-質問項目-

- (1) 外国の人と英語で話することができる
- (2) 洋書や英語で書かれた雑誌を読むことができる
- (3) 英語の新聞を読むことができる
- (4) 英語のテレビ番組や映画を日本語の字幕なしで理解できる
- (5) インターネットの英語サイトを利用することができる
- (6) 日常的话题について100語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (7) 地球社会が抱えている問題に関して200語以上の英語のエッセイを書くことができる
- (8) 地球社会が抱えている問題に関してとっさに英語で何らかの説明をすることができる
- (9) 地球社会が抱えている問題に関して自分の考えを英語で発言することができる
- (10) 地球社会が抱えている問題に関して英語でディベート、あるいはディスカッションすることができる
- (11) 新聞やインターネットの英語で書かれた記事を読む
- (12) 科学技術、研究開発に関する英語を読む、あるいは聞く。
- (13) 政治・経済・様々な社会問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (14) 環境問題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (15) 異文化、歴史、文化遺産に関する英語を読んだり、聞いたりしている。



- (16) 紛争、地雷の除去など平和に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (17) 国際紛争に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (18) 国際貢献に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (19) その他、時事的な話題に関する英語を読んだり、聞いたりしている。
- (20) 海外の大学、または大学院で学んでみたい。
- (21) 自分が得意とする分野、興味を持っている分野を極めたい。
- (22) 自分が得意とする分野で自分の考えを英語で発信していきたい。
- (23) 自分が得意とする分野で、リーダーとして活躍したい。
- (24) 日本がグローバル社会の中で存在価値のある国になるように自分ができることをしたい。
- (25) 地球社会が抱える問題の解決に貢献したい。
- (26) グローバル・リーダーとして活躍し、地球社会に貢献したい。
- (27) 海外の会社に対しプレゼンテーションを行ったり、あるいは国際会議で発言したい。
- (28) 将来留学したり、仕事で国際的に活躍したい。

